

一般国道10号線

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

安平遺跡	居屋敷地区
城山遺跡	木部地区
大根川遺跡	向野地区

1993年3月

大分県教育委員会

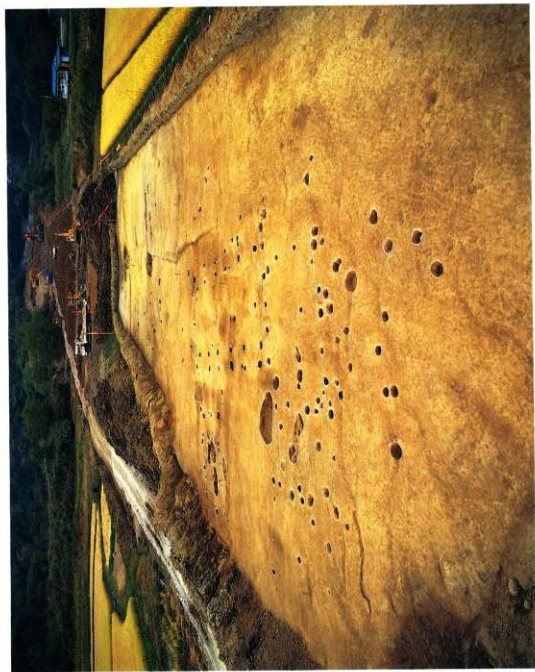
一般国道10号線

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

安平遺跡 居屋敷地区
城山遺跡 木部地区
大根川遺跡 向野地区

1993年3月

大分県教育委員会



安平遊藝全景

序 文

大分県と北九州市を結ぶ北大道路のうち、中津市と宇佐市間の中津バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和55年に開始され、平成2年末に完了しました。この間、調査の成果を公表するため発掘調査報告書も順次刊行され、第5集である本書が最後となりました。

約10年間にわたる発掘調査の結果、縄文時代から近世まで数多くの資料を得、中津・宇佐地域のみならず、大分県の歴史と文化を考えるうえで貴重なものとなりました。

本書を含めたこれらの発掘調査報告書が、学術研究や郷土の歴史を考えるための資料として、また、埋蔵文化財の理解と保護のために役立てば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書の作成まで御指導いただきました諸先生方をはじめ、調査に御協力いただきました関係者の方々、地元の皆様に対し、深く敬意を表するとともに、厚くお礼を申し上げます。

平成5年3月

大分県教育委員会

教育長 宮本高志

例 言

- 1 本報告書は一般国道10号中津バイパス（洞ノ上～木部間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆者は次のとおりである。

第1章	小林 昭彦
第2章 第1節1、2、第2節～第5節1～3	小林 昭彦
第2章 第1節3	時枝 克安
第2章 第1節4	大澤 正己
第2章 第5節4	村上 久和・坂本 嘉弘
第2章 第6節1、2	村上 久和・坂本 嘉弘
第2章 第6節3～5	坂本 嘉弘
補遺	西村 康

- 4 遺物の実測、トレース、写真撮影などの作業は、坂本、村上、小林、阿部みゆき、今泉正子が行った。また安平北遺跡出土の銅銭については、大野町教育委員会の後藤幹彦氏に製図・作表をお願いした。

安平遺跡出土土器については、本課玉永光洋主査に指導・教示を受けた。

- 5 本書の編集は、坂本、小林が行った。

目 次

第1章 序 説	1
第1節 調査の経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
3 調査の経過	3
第2節 遺跡の立地と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
第2章 各遺跡の調査	7
第1節 安平遺跡	7
1 安平遺跡	7
2 安平北遺跡	26
3 安平遺跡鍛冶遺構の地磁気年代	33
4 安平遺跡出土鍛冶滓の金属学的調査	35
第2節 居屋敷地区	48
第3節 城山遺跡	49
第4節 木部地区	50
第5節 大根川遺跡	51
1 A地区	51
2 B地区	56
3 C地区	63
4 D地区	65
第6節 向野遺跡	69
1 兵庫畑地区	69
2 市場地区	114
3 ヲソヲ地区	127
4 繪極地区	142
5 川楽地区	150
補遺 夜鳴池窯跡の磁気探査 報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	県内高速道路および、北大バイパス位置図	4
第2図	路線内および周辺遺跡分布図	6
第3図	平安遺跡位置図	15
第4図	平安遺跡構分布図	16
第5図	平安遺跡建物1実測図	17
第6図	平安遺跡建物1柱穴実測図(1)	18
第7図	平安遺跡建物1柱穴実測図(2)	19
第8図	平安遺跡建物2(鍛冶工房)実測図	20
第9図	平安遺跡鍛冶遺構実測図	21
第10図	平安遺跡建物3、4、柵列実測図	22
第11図	平安遺跡落ち込み、土坑実測図	23
第12図	平安遺跡出土遺物実測図(1)	24
第13図	平安遺跡出土遺物実測図(2)	25
第14図	平安北遺跡遺構分布図	30
第15図	平安北遺跡建物1、2実測図	30
第16図	平安北遺跡井戸実測図	31
第17図	平安北遺跡出土遺物実測図	32
第18図	平安遺跡鍛冶遺構の残留磁気方向	33
第19図	平安遺跡鍛冶遺構の残留磁気の平均方向と誤差の範囲	34
第20図	大分県出土製鉄関連遺物のTiとVの相関図	45
第21図	居屋敷地区トレンチ配置図および周辺地形図	48
第22図	城山遺跡および周辺地形図	49
第23図	木部地区グリッド配置図	50
第24図	大根川遺跡各地区位置図	52
第25図	大根川遺跡A地区遺構分布図	53
第26図	大根川遺跡A地区土坑、ピット、溝1、2断面図	54
第27図	大根川遺跡A地区出土遺物実測図	55
第28図	大根川遺跡B地区出土遺物実測図	56
第29図	大根川遺跡B地区遺構分布図	57
第30図	大根川遺跡B地区建物1、2実測図	58
第31図	大根川遺跡B地区建物3、4実測図	59

第32図	大根川B地区遺跡建物5、6	60
第33図	大根川遺跡B地区建物7、8	61
第34図	大根川遺跡B地区建物9	62
第35図	大根川遺跡B地区溝断面図	62
第36図	大根川遺跡C地区溝、畦遺構断面図	63
第37図	大根川遺跡C地区溝、畦状遺構断面図	63
第38図	大根川遺跡C地区出土遺物実測図	64
第39図	大根川遺跡D地区遺構配置図	65
第40図	大根川遺跡D地区出土土器実測図	66
第41図	向野遺跡各調査地区位置図	67
第42図	向野遺跡兵後畑地区1号土坑墓実測図	70
第43図	向野遺跡兵後畑地区2号土坑墓実測図	70
第44図	向野遺跡兵後畑地区遺構配置図	71
第45図	向野遺跡兵後畑地区2号土坑墓出土石剣実測図	73
第46図	向野遺跡兵後畑地区3号土坑墓実測図	73
第47図	向野遺跡兵後畑地区4号土坑墓実測図	74
第48図	向野遺跡兵後畑地区5号土坑墓実測図	74
第49図	向野遺跡兵後畑地区6号土坑墓実測図	75
第50図	向野遺跡兵後畑地区7号土坑墓実測図	75
第51図	向野遺跡兵後畑地区8号土坑墓実測図	76
第52図	向野遺跡兵後畑地区1・4号弥生祭祀土坑上層実測図	77
第53図	向野遺跡兵後畑地区1号・4号弥生祭祀土坑下層実測図	77
第54図	向野遺跡兵後畑地区1号弥生時代祭祀土坑出土土器実測図	78
第55図	向野遺跡兵後畑地区2号祭祀土坑実測図	79
第56図	向野遺跡兵後畑地区3号祭祀土坑実測図	79
第57図	向野遺跡兵後畑地区2・4号祭祀土坑出土土器実測図	80
第58図	向野遺跡兵後畑地区大溝出土土器実測図(1)	81
第59図	向野遺跡兵後畑地区大溝出土土器実測図(2)	82
第60図	向野遺跡兵後畑地区3号土坑実測図	83
第61図	向野遺跡兵後畑地区3号土坑出土土器実測図	83
第62図	向野遺跡兵後畑地区4号土坑実測図	84
第63図	向野遺跡兵後畑地区4号土坑出土土器実測図	84
第64図	向野遺跡兵後畑地区1号建物実測図	85

第65図	向野遺跡兵後畑地区 2 号建物実測図	86
第66図	向野遺跡兵後畑地区 3 号建物実測図	87
第67図	向野遺跡兵後畑地区 4 号建物実測図	88
第68図	向野遺跡兵後畑地区 5 号建物実測図	89
第69図	向野遺跡兵後畑地区 6 号建物実測図	90
第70図	向野遺跡兵後畑地区 7 号建物実測図	91
第71図	向野遺跡兵後畑地区 8 号建物実測図	92
第72図	向野遺跡兵後畑地区 9 号建物実測図	92
第73図	向野遺跡兵後畑地区10号建物実測図	93
第74図	向野遺跡兵後畑地区各土坑出土土器実測図	95
第75図	向野遺跡兵後畑地区 1 号溝出土土器実測図	97
第76図	向野遺跡兵後畑地区 3 号溝遺構出土土器実測図	98
第77図	向野遺跡兵後畑地区 4 号溝出土土器実測図(1)	99
第78図	向野遺跡兵後畑地区 4 号溝遺構出土土器実測図(2)	101
第79図	向野遺跡兵後畑地区各溝遺構出土土器実測図(1)	102
第80図	向野遺跡兵後畑地区各溝遺構出土土器実測図(2)	103
第81図	向野遺跡兵後畑地区各遺構出土土器実測図	106
第82図	向野遺跡兵後畑地区出土土器実測図(1)	108
第83図	向野遺跡兵後畑地区出土土器実測図(2)	109
第84図	向野遺跡兵後畑地区包含層出土土器実測図(3)	110
第85図	向野遺跡兵後畑地区包含層出土土器実測図(4)	111
第86図	向野遺跡現道部包含層出土土器実測図(5)	112
第87図	向野遺跡市場地区 1 号弥生土坑実測図	114
第88図	向野遺跡市場地区遺構配置図	115
第89図	向野遺跡市場地区 1 号弥生土坑出土土器実測図	117
第90図	向野遺跡市場地区 2 号弥生土坑実測図	118
第91図	向野遺跡市場地区 2 号弥生土坑出土土器実測図	119
第92図	向野遺跡市場地区 1 号建物実測図	120
第93図	向野遺跡市場地区 2 号建物実測図	121
第94図	向野遺跡市場地区 3 号建物	121
第95図	向野遺跡市場地区 2 号井戸実測図	122
第96図	向野遺跡市場地区 2 号井戸出土土器実測図	123
第97図	向野遺跡市場地区 1・2・3・5・6 号溝出土土器実測図	125

第98図	向野遺跡市場地区各遺構出土土器実測図	126
第99図	向野遺跡ヲソヲ地区1号土坑実測図	127
第100図	向野遺跡ヲソヲ地区遺構配置図	129
第101図	向野遺跡ヲソヲ地区101号土坑実測図	131
第102図	向野遺跡ヲソヲ地区304号土坑実測図	131
第103図	向野遺跡ヲソヲ地区出土土器実測図(1)	133
第104図	向野遺跡ヲソヲ地区出土土器実測図(2)	134
第105図	向野遺跡ヲソヲ地区出土土器実測図(3)	135
第106図	向野遺跡ヲソヲ地区出土土器実測図(4)	136
第107図	向野遺跡ヲソヲ地区出土土器実測図(5)	137
第108図	向野遺跡ヲソヲ地区出土土器実測図(6)	138
第109図	向野遺跡ヲソヲ地区出土土器実測図(7)	139
第110図	向野遺跡ヲソヲ地区出土石器実測図	141
第111図	向野遺跡繪極地区遺構配置図	143
第112図	向野遺跡繪極地区(A区)遺構配置図	145
第113図	向野遺跡繪極地区(B区)遺構配置図	147
第114図	向野遺跡繪極地区出土土器実測図(1)	148
第115図	向野遺跡繪極地区出土土器実測図(2)	149
第116図	向野遺跡川楽地区1号建物実測図	151
第117図	向野遺跡川楽地区2号建物実測図	152
第118図	向野遺跡川楽地区遺構配置図	153
第119図	向野遺跡川楽地区3号建物実測図	155
第120図	向野遺跡川楽地区4号建物実測図	156
第121図	向野遺跡川楽地区5号建物実測図	157
第122図	向野遺跡川楽地区6号建物実測図	158
第123図	向野遺跡川楽地区建物遺構出土土器実測図	158
第124図	向野遺跡川楽地区7号建物実測図	159
第125図	向野遺跡川楽地区8号建物実測図	159
第126図	向野遺跡川楽地区9号建物実測図	160
第127図	向野遺跡川楽地区10号建物実測図	160
第128図	向野遺跡川楽地区1号土坑実測図	161
第129図	向野遺跡川楽地区1号土坑出土土器実測図	161
第130図	向野遺跡川楽地区2号土坑実測図	162

第131図	向野遺跡川楽地区3号土坑実測図	162
第132図	向野遺跡川楽地区4号土坑実測図	164
第133図	向野遺跡川楽地区4号土坑出土土器実測図(1)	165
第134図	向野遺跡川楽地区4号土坑出土土器実測図(2)	166
第135図	向野遺跡川楽地区1号溝出土土器実測図	167
第136図	夜鳴池窯跡磁気測定図、遺構分布図	170

写真図版

図版一	安平遺跡(1)	
図版二	安平遺跡(2)	
図版三	安平遺跡出土遺物(1)	
図版四	安平遺跡出土遺物(2)	
図版五	安平遺跡出土遺物(3)	
図版六	安平遺跡出土遺物(4)	
図版七	安平遺跡(5)・安平北遺跡出土遺物	
図版八	安平北遺跡出土銅銭	
図版九	居屋敷地区・城山遺跡・木部地区	
図版一〇	大根川遺跡(1)	
図版一一	大根川遺跡(2)・向野遺跡(1)	
図版一二	向野遺跡(2)	
図版一三	向野遺跡(3)	
図版一四	向野遺跡(4)	
図版一五	向野遺跡(5)	
図版一六	向野遺跡(6)	
図版一七	向野遺跡(7)	
図版一八	向野遺跡(8)	
Photo.1	鉄滓の顕微鏡組織	46
Photo.2	鉄滓の顕微鏡組織	47

表 目 次

表 1	安平遺跡出土遺物観察表	11
表 2	安平北遺跡井戸出土土器観察表	28
表 3	安平北遺跡出土銅銭一覧表	29
表 4	供試材の履歴と調査項目	36
表 5	鉄滓の化学組成	41
表 6	鉄滓、砂鉄の分析結果	43

第 1 章 序 説

第 1 節 調査の経過

1 調査に至る経過

中津バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査は、北九州市から大分市に至る北大バイパス路線のうち下毛郡三光村から宇佐市山下までの間を対象としたものである。中津バイパスは交通体系整備事業の一貫として設計された高規格道路で、宇佐道路、宇佐別府道路とつづき九州横断自動車道と合流する。中津バイパス建設に伴う調査は、昭和55年度から開始し、平成2年度の向野遺跡の調査ですべてを終了した。

本報告の調査は、昭和61年度から平成2年度までの5カ年間にわたり実施したものである。

2 調査の組織

昭和61年度

- 調査主体 大分県教育委員会
調査指導 賀川光夫（別府大学教授・県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・県文化財保護審議会委員）
時枝 克安（島根大学助教授）
春成 秀爾（国立歴史民俗博物館助教授）
総括 藤井 義美（教育長）、塔鼻 勝人（文化課長）、
調査主任 後藤 宗俊（文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長）
調査員 渋谷 忠章（文化課埋蔵文化財係主任）、西 哲弘（同主事）、小林 昭彦（同主事）、友岡 信彦（同嘱託）

昭和62年度

- 調査主体 大分県教育委員会
調査指導 賀川 光夫（別府大学教授・県文化財保護審議会委員）
時枝 克安（島根大学助教授）
池上 悟（立正大学講師）
総括 嶋津 文雄（教育長）、後藤 昭六（文化課長）
調査主任 後藤 宗俊（文化課主幹）
調査員 渋谷 忠章（文化課埋蔵文化財第二係長）、村上 久和・西 哲弘（同主任）、

小林 昭彦・松本 康弘（同主事）、永松 みゆき・友岡 信彦・後藤 晃一・吉武 牧子（同囑託）

昭和63年度

調査指導 賀川 光夫（別府大学教授・県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・県文化財保護審議会委員）
小池 裕子（埼玉大学助教授）
田中 良之（九州大学医学部第二解剖講座）
土肥 直美（九州大学助手）

総括 嶋津 文雄（教育長）、小代 基雍（文化課長）

調査主任 後藤 宗俊（同課長補佐）

調査員 渋谷 忠章（文化課埋蔵文化財第二係長）、村上 久和（同主査）、西 哲弘（同主任）、吉留 秀敏（福岡市教育委員会）、後藤 晃一（同主事）、吉武 牧子・行時 志郎・今泉 正子（同囑託）

平成元年度

調査指導 賀川 光夫（別府大学教授・県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・県文化財保護審議会委員）
小池 裕子（埼玉大学助教授）
田中 良之（九州大学医学部第二解剖講座）
土肥 直美（九州大学助手）

総括 嶋津 文雄（教育長）、小代 基雍（文化課長）

調査主任 後藤 宗俊（同課長補佐）

調査員 渋谷 忠章（文化課埋蔵文化財第二係長）、村上 久和（同主査）、西 哲弘（同主任）、吉留 秀敏（福岡市教育委員会）、後藤 晃一（同主事）、吉武 牧子・行時 志郎・今泉 正子（同囑託）

平成2年度

調査指導 賀川 光夫（別府大学教授・県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（福岡大学教授・県文化財保護審議会委員）

総括 宮本 高志（教育長）、後藤 正二（文化課長）

調査主任 清水 宗昭（文化課埋蔵文化財第一係長）

調査員 坂本 嘉弘・宮内 克己（同主査）、西 哲弘・小林 昭彦（同主任）、原田 昭一・後藤 晃一（同主事）、富田 修司・高松 永治・新宅 信久（同囑託）

上記関係者の他に、多くの方々には現地指導および有益なご助言をいただいた。

3 調査の経過

発掘調査は既述の調査組織の編成下で行った。以下、調査の経過を年次ごとに示す。

昭和61年度調査

調査は5月から城山遺跡の試掘調査より開始した。6月から7月中旬に城山遺跡の本調査を実施、継続して居屋敷地区の試掘調査、安平遺跡の試掘・本調査を行い、11月初旬に安平遺跡の調査で今年度の予定を終了した。

安平遺跡では掘立柱建物4棟、土坑8、棚列、ピットなどを検出した。2間×5間の建物を中心として他の3棟の建物もほぼ同一方位を保って位置しており、一定の構成をもつ建物群と考えられる。注目される点として、建物の1つに鉄滓、焼土などを充填する土坑を伴うことがあげられる。これは製鉄関連遺構と思われ、建物群の性格を知る重要な内容を提供したものと見える。出土遺物からみて14世紀後半代の時期に比定できる。

居屋敷地区は現状が水田になっている。試掘調査を行い遺構の存否確認を行った。設定したトレンチ内から古墳時代～中・近世の土器類を採集したが、このほとんどが表土中から得られたものであり遺構は認められなかった。

城山遺跡は、同一丘陵上に城山窯跡群が存在するため関連遺構の検出が想定された。しかし、予想された遺構の検出はなく、近世以降とみられる土坑が確認された程度であった。

昭和62年度調査

本年度は宇佐市域に入り、大根川遺跡の調査を開始した。この遺跡の範囲は広くまた調査時期が数年にわたるため、北からA～Dの調査区に区分し、今年度はA、C地区とB地区の一部について調査を行った。

A地区は、五十石川右岸の低地に位置する。検出した遺構として、溝、土坑、ピット、遺状遺構・長楕円形ピットなどがある。

B地区はA地区の南東に位置する。ここでは掘立柱建物3棟、溝、土坑などを検出した。

C地区はB地区のさらに南東部に位置する。検出遺構として、溝、畦状の高まりがある。

昭和63年度・平成元年度調査

大根川遺跡のB、D地区と向野遺跡の調査を行った。

大根川遺跡B地区では、昨年度調査地区の北東に隣接する残余の範囲について調査を実施した。調査の結果、掘立柱建物6棟、溝、土坑、ピットなどを検出した。

大根川遺跡D地区は大根川遺跡のもっとも南東部に位置し、向野遺跡と隣接する。ここでは奈良・平安時代の溝、土坑、ピット列などが検出された。

向野遺跡は今年度から調査を着手したものである。調査地区が全長約630mにおよんだため、小字をもとに北東方向から兵後畑、市場、ヲソア、繪極、川楽の5地区に区分し調査を行った。

兵後畑地区では、古墳～平安時代、近世の溝14条、奈良・平安時代の掘立柱建物4棟、古墳～平安時代、近世の土坑16、近世の井戸1、奈良・平安時代の遺物包含層を検出している。

市場地区では、古墳～平安時代、近世の溝27条、奈良・平安時代の掘立柱建物4棟、弥生時代、近世の土坑約50、平安時代～近世の井戸5、近世の埋蔵6を検出している。

ヲソヲ地区では、調査の結果、溝2条、弥生時代後期の土坑を200以上検出した。

繪極地区では、溝2条、弥生時代中期の土坑を100以上検出した。

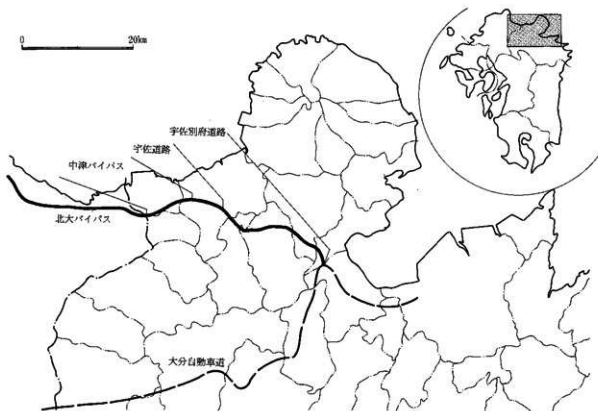
川楽地区では、溝6条、奈良・平安時代の掘立柱建物10棟、土坑12を検出した。

平成2年度

今年度は向野遺跡兵後畑地区の残余部分と兵後畑地区～市場地区にかかる現道部分について調査を行ったものである。

兵後畑地区では、溝8条、掘立柱建物3棟、奈良・平安時代、近世の土坑9、弥生時代中期の落ち込み、祭祀土坑3、土坑9、近世の井戸1を検出した。

現道部分では、奈良～近世の溝14条、掘立柱建物2棟、土坑15、奈良・平安時代の遺物包含層を検出している。



第1図 県内高速道路および、北大バイパス位置図

第 2 節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

調査遺跡の所在する中津市は大分県北部の山国川を挟んで福岡県新吉富村と対峙し、周防灘に面し海岸部から沖代平野など肥沃な可耕地をへて南部の丘陵部にいたる広範な変化に富む地形環境に恵まれている。中津市南部は低位丘陵が広がっており、北から南に開析された谷が多くみられる。この谷水田に安平遺跡、居屋敷遺跡が立地する。城山遺跡は丘陵上に、木部は丘陵の北部に広がる平野部に位置する。宇佐市域に入り大根川遺跡、向野遺跡の所在範囲においても低位段丘に平野が形成されている。

2 歴史的環境

周辺遺跡の分布状況を見ると、旧石器時代から近世に至る各時代の遺構・遺物が平野部、河岸段丘、丘陵部に多く確認されている。

旧石器時代の遺跡は洞ノ上、大池南、才木遺跡などに断片的な資料が確認されている。

縄文時代の遺跡として、犬丸川流域の水田地帯に形成された微高地に立地し、早期の落とし穴遺構が調査された黒水遺跡、後期のボウガキ遺跡、植野貝塚が知られている。

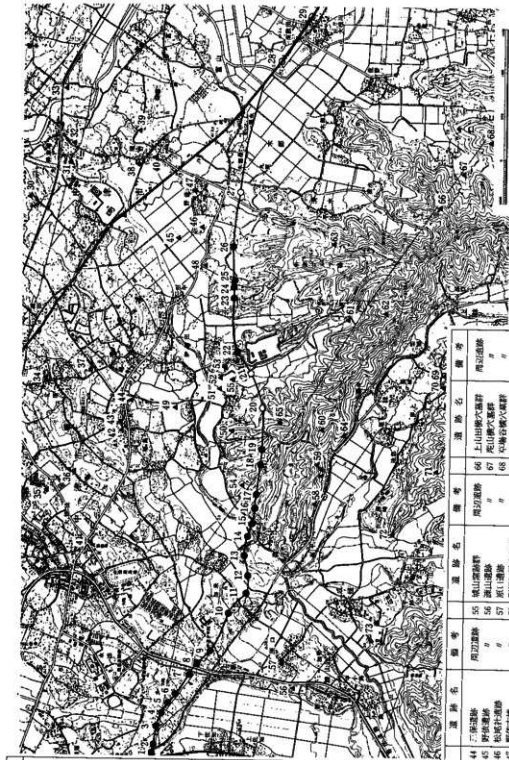
弥生時代では、前期～後期の遺跡として森山、榎多田、福島遺跡がある。とくに森山遺跡は水田面との比高が約40mの丘陵上に立地し、前期後半～後期初頭の集落が形成されていた。

古墳時代の遺跡を見ると、前期では三光村岡崎遺跡で調査された石棺墓、土坑墓がみられる程度である。後期に多くの遺跡がみられる。集落跡としては前田、大坪遺跡がある。墓地遺跡には、森山、岩井崎、城山、寺迫横穴などの横穴墓群、城山、野依古墳などの古墳群がこの伊藤田周辺の丘陵崖面や丘陵上に分布している。また西部には山国川の河岸段丘崖面に横穴100基以上が集中する5世紀後半～7世紀初頭に営まれた上ノ原横穴墓群が位置する。

古墳時代後期（6世紀後半）は伊藤田窯群が操業を開始する時期である。この窯跡群は中津市南部の伊藤田から野依地区、一部宇佐市木部にかかる丘陵地域に所在する。本県では最大規模を誇り、須恵器および瓦の生産実態を確認できる重要な位置付けがなされている。

歴史時代の遺跡は、奈良時代の三光村塔ノ熊鷹寺、勸助野地遺跡の火葬墓があり、平安時代では寺迫遺跡の火葬墓などがある。中世には中津市前田遺跡のように水田経営のあり方を示唆する遺構群や製鉄関連遺跡である安平遺跡の存在も注意される。宇佐市域では、笠松遺跡にみられる火葬墓が15世紀末～16世紀初頭に導入された特徴ある墓制として注目された。

近世では、中津城跡や城下町関連の遺構などがあり、近世都市の形成に関わる重要な資料が提示されている。



第2図 路線内および周辺道路分布図

番号	道路名	備考
1	上ノ原第六區群	周辺内道路
2	新助野地道路	"
3	野々上池草道路	"
4	六軒町道路	"
5	六軒町道路	"
6	大池所道路	"
7	市ノ野道路	"
8	加米原道路	"
9	清水原田田道路	"
10	澤水原京車道路	"
11	黒水道路	"
12	大野道路	"
13	高市町	"
14	藤多田道路	"
15	藤引尾道路	"
16	津山道路	"
17	津山横穴	"
18	新市地(横穴)	"
19	寺道道路	"
20	52号道路	本報告
21	道原路、津山道路	周辺内道路
22	津場原路	"
23	成崎池内道路	"
24	茂崎池内道路	"
25	藤ヶ池内道路	"
26	瓦ヶ池内道路	"
27	木道原田原地	本報告
28	大野山道路	"
29	池野道路	"
30	赤沼道路	"
31	岩原野道路	"
32	中野道路	"

番号	道路名	備考	道路名	備考	道路名	備考		
33	津場原路	周辺内道路	44	二所道路	周辺内道路	66	上山田第六區群	周辺内道路
34	北野道：道路	"	45	野中道路	"	67	赤山第六區群	"
35	大野山道路	"	46	松原村道路	"	68	松原村第六區群	"
36	土本道路	"	47	野野古橋	"	69	茶ノ馬路寺	"
37	北野第1道路	"	48	長野	"	70	八田山車道	"
38	越野村道	"	49	富士道路	"	71	長持道路	"
39	越野村道	"	50	津ノ上第六區群	"	72	阿部道路	"
40	例田池内道路	"	51	所田道路	"	73	越野寺高寺	"
41	例田池内道路	"	52	津山第六區群	"			
42	田丸池内	"	53	津山古橋群	"			
43	高島原	"	54	北平第六區群	"			
						55	津山第六區群	
						56	津山道路	
						57	野中道路	
						58	野中第六區群	
						59	赤沼道路	
						60	津通三ツ家古橋群	
						61	大谷野道路	
						62	野依池内道路	
						63	野依池内道路	
						64	大神原第六區群	
						65	津ノ上道路	

第 2 章 各遺跡の調査

第 1 節 安平遺跡の調査

1 安平遺跡

安平遺跡は中津市安平に所在する。この地域は中津市の南部丘陵にあたる。遺跡は大きく北へ開析された谷の西側支谷を望む微高地上に立地する。遺跡の範囲は、南部を支谷で画された1250㎡である。

遺跡は、14世紀後半～15世紀初頭に営まれた鍛冶工房と考えられ、掘立柱建物とこれに付属する鍛冶土坑、棚列、ピットで構成されている。遺構の分布状況から工房を中心とする一単位の集落と見做すことができる。

遺構 (第3図～第11図)

確認された遺構は、掘立柱建物4棟、棚列1、土坑8、溝状落ち込み3、ピット約70などである。

建物1 (第5図～第7図)

調査区はやや東側に位置する。東西方向に長い四面に庇をもつ掘立柱建物である。規模は桁行5間(9.9m)、梁行1間(4m)である。柱間は2mのほぼ等間隔に配されていた。庇は桁行5間(11.4m)、柱間は四隅に接するところで2.8m、他の三間は主屋の柱穴と対応し2mである。梁行は、西辺で2間(2.5m、2.8m)、東辺梁行は柱間長の異なる4間(1.1m～2m)で中央が狭くなっている。柱穴の大きさは上面径17cm～37cm、底面径10cm～20cm、深さ40cm～55cmであった。

庇の四隅柱穴は、主屋の隅とこれと対応する柱列の第3番目の柱穴を対角線に結ぶ延長線上に位置する。また庇の東辺の柱列は入り口施設を示す配置と考えられる。

遺物は柱穴内から意図的に埋められた状態で出土した。土器が出土した柱穴は5例あり、4例について図示した。

建物2 (第8図, 第9図)

建物1の南側に位置する。西辺柱列は建物1西辺の柱筋の延長上にある。2間×3間、桁行5.2m、梁行3.6mの掘立柱建物である。この建物には4基の鍛冶土坑が伴う。土坑は建物の中央部に3基が並列し、その南に1基が位置する。

建物3 (第4図)

建物1の南側に位置する。西辺は建物1の東辺柱筋の延長上にある。柱間が3mの1間×1間の規模をもち、正方形の平面形を呈する。建物の中心に柱穴があり倉庫と考えられる。

建物4 (第4図)

建物の中では最も西に位置する。規模は1間×2間(3.7m×3m)である。建物の方位は他の建物と同一方位を指向する。

櫓列 (第4図)

建物1の東側正面に位置する。長さは南北方向に17mあり、柱穴5が2.2m~3m間隔で配される。

土坑 (第9図, 第11図)

土坑は1~4の4基が建物2の付属施設である。

土坑1は楕円形を呈し、長さ1.65m、幅0.8m、深さ0.45mである。底面は両端がやや窪み中央は平坦であった。土坑内の堆積土中に焼土・カーボン、鉄滓、被熱跡が多くみられ、中層以下には焼土・カーボン、炭化材を多量に混じる鉄滓主体層が確認された。底面・壁面の被熱は若干確認できるものの顕著ではなかった。出土遺物として土師器小皿、フィゴの羽口が検出された。

土坑2は土坑3に西壁の一部を切られていた。平面形は不整楕円形を呈していた。規模は長さ1.25m、幅約0.6m、深さ0.25mである。底面はほぼ平坦であった。堆積土は茶褐色土層が主体であり、焼土・カーボン・鉄滓が上層に若干混じる程度であった。土坑内から土師器小皿が出土している。

土坑3は不整円形を呈し、長さ1m、幅0.6m、深さ0.25mである。底面は緩い舟底状に掘られていた。堆積土は土坑2と同様に茶褐色土層が主体であった。

土坑4は不整楕円形を呈し、長さ1.23m、深さ0.35mで舟底状に窪む。幅は南端で0.6mと膨らむが、ほかはほぼ0.45mである。堆積土は土坑1に似ており、上層に焼土・カーボンを含む茶褐色土層、その下層に焼土・カーボン主体層、最下層に鉄滓が厚く堆積していた。そして最下層の上面から金床石が出土している。金床石の上面には鉄の融着がみられた。また土坑内から土師器環が出土している。

これら4基の土坑については、粘土の塗布や炭化敷設など特別な加工はなく地山の黄褐色土を掘り下げたものであった。ただ、一部に被熱痕跡があり、フィゴの羽口も出土していることから高温加熱を伴う作業場であったことは明確である。

土坑5は建物3の北西部に位置する。規模は長さ4.6m、最大幅2.8m、深さ0.3mである。形状は卵形の平面形を呈す。

土坑6は建物2の北西隅の外側に位置する。規模は長さ1.9m、最大幅1m、深さ0.05m程度である。形状は不整形を呈す。

落ち込み (第11図)

調査区北半部に3基が近接して位置する。

1は溝状に伸び、長さ6.1m、幅0.3m~0.9m、深さは削平を受けて浅くなっており確認面から0.04m程度残るのみである。2は1と同様に溝状を呈し、長さ5.2m、幅0.15m~0.8m、確認面からの深さは0.05m程度である。3は長方形に近い平面形をもつ。長さ3.7m、幅0.85m~1.2m、確認面からの深さは0.05m程度である。

ピット

ピットは約70確認されているが、多くは調査区東半部の建物1~3付近に集中する。このうちピット1、2から土器が出土している。

出土遺物（第12図、第13図）

建物1、2の柱穴、土坑および試掘トレンチから出土したものである。出土遺物には瓦器、土師器などがある。

建物1出土遺物

柱穴1出土土器（1~17）

土師器小皿（1） 器高は低く、口縁部は短く外傾する。底部は回転糸切りで切り離されている。大きさは口径6.4cm、器高0.9cm、底径5.4cmである。

土師器環（2~14） 体部~口縁部の形態に差がある。2は直線的に伸び、5、7、10、14は体部中位からやや外反気味に立上る。このほかは底部からほぼ丸みをもって口縁部に至る。4は底部が肥厚し段をもつ。概ね器壁が厚い。底部は回転糸切りで切り離され、板状圧痕が残る。体部~口縁部は横ナデで仕上げられている。大きさは口径9.9cm~12.2cm、器高2cm~2.6cm、底径8cm~8.8cmである。

瓦器塊（15~17） 内湾する体部をもつ。高台は完全に消失している。底部から体部下半にかけてヘラ削り後、ナデ調整が施されている。また体部下半に指頭による整形痕が残っている。焼成は還元が十分でなく、白灰色、淡黄褐色を呈する。胎土に角閃石、斜長石を含む。大きさは口径14.6cm~16cm、器高4.4cm~5cmである。

柱穴2出土土器（18~39）

土師器環（18~39） 18は器高が1.5cmと低く、体部は外へ大きく開く。ほかの例については体部~口縁部の形態に差がみられる。直線的に立上るものとして20、27、32、やや外反する例に19、22、25、30、31、35~39、内湾気味に立上る23、24、26、28、29、33、34がある。

器壁は体部中位から口縁部に向かって細くなる27、32、33、36、37などがある。底部は回転糸切りで切り離され、板状圧痕が残る。体部~口縁部は横ナデで仕上げられている。大きさは口径10.8cm~12.1cm、器高1.5cm~2.6cm、底径7.1cm~8.7cmである。

柱穴3出土土器（40、41、44、45、55）

土師器小皿（40、41） 器高は低く、口縁部は短く外傾する。底部は回転糸切りで切り離されている。大きさは40が口径6.3cm、器高0.7cm、底径5.4cm、41は口径6.5cm、器高1.3cm、底径

5.6cmである。

瓦器境 (45、45) 無高台瓦器境で内湾する体部をもつ。底部から体部下半にかけてヘラ削り後、ナデ調整が施されている。焼成は還元が十分でなく、白灰色、淡黄褐色を呈する。胎土に角閃石、斜長石を含む。大きさは44が口径15.8cm、器高4.2cm、底径6.7cm、45は口径14.7cm、器高4.3cm、底径6.9cmである。

甕 (55) 口縁部～体部上半が残存する。口縁部は短く外反し、胴部は大きく張る形状と考えられる。調整は外面に縦方向、内面に横斜方向のハケ目が残し、丁寧なナデが施され平滑に仕上げとなっている。焼成はやや還元気味で淡黄褐色を呈する。胎土に砂粒はほとんど含まれない。大きさは口径32cmである。

柱穴4出土土器 (56、57)

甕の残欠が2点出土している。56は短く外半し、復元口径45cmである。57は底部を欠く胴部である。調整は丁寧なナデが全面に施され平滑に仕上げとなっている。焼成はやや還元気味で淡灰色を呈する。胎土に砂粒はほとんど含まれない。柱穴3出土の甕 (55) と同巧である。

建物1付近出土土器 (42、43、46、)

土師器環 (42、43) 2点ともに器壁は厚い。43は体部下半で屈曲する。底部は回転糸切りである。大きさは口径10.8cm、器高2.2cm、底径7.6cmである。

瓦器境 (46) 無高台瓦器境で内湾する体部をもつ。底部周辺から体部下半にかけて指頭による整形痕が残っている。底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り後、ナデ調整が施されている。焼成は還元が十分でなく、淡黄褐色を呈する。胎土に角閃石、斜長石を含む。大きさは口径15.2cm、器高4.8cm、底径7cmで、やや深めである。

建物2出土遺物

47～49、58は土坑1、50は土坑2、52は土坑4、50は建物2の北東隅柱穴から出土した。

土師器小皿 (47、48、50) 47、48は直線的に伸びる体部をもつ。50は器高が低く、体部は外へ開く。底部は回転糸切り後、ナデが施されている。大きさは口径6.4cm～7cm、器高0.8cm～1.2cm、底径5.1cm～5.4cmである。

土師器環 (49、51、52) 49は体部上半を欠く。51は外へ開かず、内湾して立上る。52は体部中位まで器壁が厚く、体部中位～口縁部は直線的に立上る。

フィゴの羽口 (58) 残存長9cm、径8cmである。先端部分は被熱により融解している。

ピット出土土器 (53、54)

棚列周辺のピットから出土した土師器環である。53はピット1、54はピット2から出土した。53は口径10.7cm、器高1.9cm、底径7.5cmと器高が低く、外へ大きく開く。54は体部があまり開かず、上方へ伸びやや不快形状を呈す。大きさは口径12.7cm、器高3.3cm、底径7.2cmである。ともに底部は回転糸切りで切り離され、後にナデが施される。ただ53は糸切り痕が消されてい

る。

西部試掘トレンチ出土土器 (59~62)

調査区から続く西部の平坦部において遺構の確認調査を行った際、表土中から採取した須恵器、土師器である。59は蓋の紐で低平な宝珠状をなす。60、61は高台付杯の底部破片で、やや長めの高台をもつ。いずれも須恵器で8世紀前半代の特徴を示している。また62は土師器短頸蓋の口縁部~体部上半の破片である。

建物1、2で出土した土師器小皿・杯は底部を右回転糸切りで切り離し、その後ナデを施す調整が共通してみられる。色調はほとんどが赤褐色~黄褐色を呈し、胎土には角閃石、細砂を含むものであった。

表1 安平遺跡出土土器観察表

標目録 番号	器種	法草 口径 器高 器径	形状・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
1	土師器小皿	6.4 0.9 5.4	内面多方向ナデ 横ナデ 底部回転糸切り後板状圧痕	角閃石斜長石アズキ色微量 白色微量 良好 淡黄褐色	ほぼ完形	建物1 柱穴1	
2	土師器杯	9.9 2.3 8.0	横ナデ 底部一方向ナデ	角閃石アズキ色斜長石(?)微量 透有 淡黄褐色	$\frac{1}{3}$ 個体	建物1 柱穴1	
3	土師器杯	10.4 2.1 7.2	内面一方向ナデ 横ナデ 底部右回転糸切り	角閃石と白色砂粒は少量細砂や や少し 透有 赤褐色(一部黒褐色)	$\frac{1}{2}$ 個体	建物1 柱1	
4	土師器杯	10.2 2.3 7.2	多方向ナデ	角閃石少量白色アズキ色砂粒微量 良好 淡黄褐色	$\frac{1}{6}$ 個体	建物1 柱穴1	
5	土師器杯	12.6 2.4 6.6	内面多方向ナデ 横ナデ 回転糸切り後ナデ	角閃石・アズキ色砂粒微量 良好 淡黄褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損 底面 $\frac{1}{2}$ 欠損	建物1 柱1	
6	土師器杯	11.0 2.5 8.1	内面一方向ナデ 横ナデ 底部粗い右回転糸切り	細砂が多く角閃石を若干含む 良好 淡黄褐色と黒茶褐色	口縁部 一部欠損	建物1 柱穴1	
7	土師器杯	10.8 2.3 7.9	内面多方向ナデ 横ナデ 底部右回転糸切り	角閃石若干細砂少量 透有 暗黄褐色を基調とする	$\frac{1}{2}$ 個体	建物1 柱穴1	
8	土師器杯	11.0 2.2 8.3	内面一方向ナデ 横ナデ 底部回転糸切り	角閃石・斜長石微量アズキ色砂粒 良好 淡黄灰褐色	$\frac{1}{4}$ 個体	建物1 柱穴1	
9	土師器杯	11.1 2.4 8.6	内面一方向全面下たい 横ナデ 底部右回転糸切り	細砂角閃石 良好 黄褐色を基調とする	口縁部 一部欠損	建物1 柱穴1	
10	土師器杯	11.4 2.4 7.5	内面一方向ナデ 横ナデ 右回転糸切り後板状圧痕	なし 透有 淡黄褐色	ほぼ完形	建物1 柱穴1	
11	土師器杯	11.4 2.3 8.5	内面多方向ナデ 横ナデ 底部右回転糸切り	角閃石微量細砂多量含む 透有 黄褐色黒褐色	$\frac{1}{3}$ 個体	建物1 柱穴1	
12	土師器杯	11.4 2.4 8.3	内面ナデ 横ナデ 底部回転糸切り	角閃石若干白色砂粒微量細砂や や少し 透有 暗黄褐色を基調とする	$\frac{1}{3}$ 個体	建物1 柱穴1	

種目録 番号	部 種	法量 口徑 底径	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存数	出土地	備 考
13	土 師 器 環	12.2 2.1 9.0	内面多方向ナデ 横ナデ	角閃石微量白色アズキ色砂粒 適有 淡茶褐色	1 4 個 体	建物1 柱穴1	
14	土 師 器 環	12.2 横ナデ 8.8	内面多方向ナデ 横ナデ 同転糸切り後板状圧痕	角閃石微量黒砂少量 適有 淡赤褐色	口 縁 部 3 4 欠 損	建物1 柱穴1	
15	瓦 器 碗	14.6 4.3 5.2	内面横ナデ 横ナデ内方向ナデ 底部多方向ナデ	角閃石細粒白色砂粒いづれも若干 適有 淡黄褐色	11 縁 部 1 2 欠 損	建物1 柱穴1	
16	瓦 器 碗	15.6 —	胎前による整形痕顕著	角閃石多粒 適有 淡色褐色	破 片	建物1 柱穴1	
17	瓦 器 碗	16.0 4.5 7.8	内面ナデ体部下半に指頭痕 横ナデ 底部へつ倒り後ナデ	角閃石多量白色砂粒若干細砂多 量 不良 淡黄褐色	1 2 個 体	建物1 柱穴1	
18	土 師 器 環	11.5 1.45 7.1	内面多方向ナデ 横ナデ 底面糸切り後ナデ	角閃石斜長石共に極少量 適有 黒褐色	1 4 個 体	建物1 柱穴2	
19	土 師 器 環	10.8 1.9 7.5	内面横ナデ 横ナデ 底部同転糸切り	角閃石少量細砂少量 適有 赤褐色	1 4 個 体	建物1 柱穴2	
20	土 師 器 環	10.7 2.6 7.8	内面一方向ナデ 底部多方向ナデ	角閃石白色砂粒斜長石アズキ色 粒共に少量 良好 淡茶褐色	口 縁 1 10 3 欠 損 3 1 欠 損	建物1 柱穴2	
21	土 師 器 環	10.9 2.3 8.2	内面指頭によるナデ 横ナデ 底部同転糸切り後平行板目痕	角閃石微量白色砂粒若干細砂多 量 良好 淡赤褐色を基調とする	完 形	建物1 柱穴2	
22	土 師 器 環	10.3 2.5 8.0	内面一方向ナデ 横ナデ 底部板状圧痕	角閃石白色砂粒ともに少量 良好 黄褐色	1 4 個 体	建物1 柱穴2	
23	土 師 器 環	10.8 2.1 7.5	内面一方向ナデ 横ナデ 底部右同転糸切り	角閃石白色砂粒微量細砂やや多 し 良好 赤褐色	口 縁 部 一 部 欠 損	建物1 柱穴2	
24	土 師 器 環	10.9 2.4 7.5	内面一方向ナデ 横ナデ 底部右同転糸切り	角閃石微量黒砂少量 良好 明赤褐色	口 縁 部 一 部 欠 損	建物1 柱穴2	
25	土 師 器 環	11.0 2.1 8.0	多方向ナデ	角閃石アズキ色粒 適有 橙褐色から茶褐色	1 4 個 体 1 1 破 片 の み 残 存	建物1 柱穴2	
26	土 師 器 環	11.3 2.4 8.25	内面ナデ 横ナデ 底部右同転糸切り後板状圧痕	角閃石白色砂粒微量細砂多し 良好 黄褐色	ほぼ完形	建物1 柱穴2	
27	土 師 器 環	11.4 2.35 7.9	内面多方向ナデ 横ナデ 糸切り	角閃石微量黒砂少量 適有 赤褐色	1 3 個 体	建物1 柱穴2	
28	土 師 器 環	14.3 2.0 8.2	内面一方向ナデ指頭痕 横ナデ 底部右同転糸切り後板状圧痕	角閃石白色砂粒少量細砂多し 適有 黄褐色一部黒褐色	ほぼ完形	建物1 柱穴2	
29	土 師 器 環	11.5 2.0 7.6	内面多方向ナデ 横ナデ 糸切り後ナデ(?)板状圧痕	角閃石少量 適有 赤褐色一部黒褐色	1 3 個 体	建物1 柱穴2	
30	土 師 器 環	11.6 2.4 6.8	内面一方向ナデ 横ナデ 同転糸切り後ナデ	角閃石微量細砂少量 良好 淡黄褐色		建物1 柱穴2	
31	土 師 器 環	11.6 2.6 6.8	内面一方向ナデ多方向ナデ 横ナデ 底部右同転糸切り	角閃石微量黒砂少量 良好 淡赤褐色	口 縁 部 2 3 欠 損	建物1 柱穴2	

障子番号	部 種	法地	口徑 高さ 筋住	装形・調整手法の特徴	粘土・泥成・色調	残存度	出土地	備 考
32	土器器環		11.1 2.2 8.1	内面多方向ナゲ横ナゲ 横ナゲ 底部糸切縁板状圧痕	角閃石微量細砂少量 透有 赤褐色	口縁部 1/4欠損	建物1 柱穴2	
33	土器器環		11.7 2.3 8.0	内面一方向ナゲ 横ナゲ 底部回転糸切後ナゲ圧痕	角閃石斜長石アズキ色粒共に微量 透有 淡黄褐色から淡茶褐色	1 2個体	建物1 柱穴2	
34	土器器環		10.8 2.6 8.4	内面多方向ナゲ	角閃石長石(?)共に極微量 透有 黄茶褐色	口縁部 1/8欠損 1/8欠損	建物1 柱穴2	
35	土器器環		11.9 2.4 8.7	磨滅の急激形不明 底部右回転糸切板目圧痕若干あり	角閃石若干細砂やや多量 不良 淡黄褐色	口縁部 1/6欠損	建物1 柱穴2	
36	土器器環		14.9 2.4 8.0	内面多方向ナゲ 横ナゲ 底部右回転糸切り	角閃石微量 透有 赤褐色		建物1 柱穴2	
37	土器器環		12.0 2.3 8.2	内面一方向ナゲ横ナゲ ナゲ 底部ナゲ	角閃石長石(石英?)アズキ色粒 共に微量 透有 淡茶褐色	1/5個体	建物1 柱穴2	
38	土器器環		12.1 2.2 8.7	内面横ナゲ主体 右斜め上方内へのナゲ 底部多方向ナゲ	角閃石微量アズキ色粒 透有 粒味をおびた淡茶褐色	1/3個体	建物1 柱穴2	
39	土器器環		12.1 2.4 7.9	内面左回りナゲ 横ナゲ 底部回転糸切り板目痕	角閃石微量細砂若干 不良 淡黄褐色	口縁部 1/2欠損	建物1 柱穴2	
40	土器器小皿		6.3 0.7 5.2	横ナゲ内面中心まで同心円状 底部横ナゲナゲ一部に板状圧痕	角閃石斜長石アズキ色粒共に少量 透有 淡黄褐色	ほぼ完形	建物1 柱穴3	
41	土器器小皿		6.5 1.3 5.6	内面一方向ナゲ 横ナゲ 底部回転糸切り後ナゲ	角閃石少量斜長石微量 透有 淡茶褐色	口縁部のみ 1/3欠損	建物1 柱穴3	
42	土器器環		10.8 2.2 7.6	内面多方向のナゲ 横ナゲ 瓦部一方向ナゲ	角閃石少量アズキ色砂粒 良好 淡茶褐色	1/2個体	建物1	
43	土器器環		10.7 2.2 7.6	内面一方向ナゲ 横ナゲ 底部右回転糸切り	角閃石斜長石アズキ色粒 良好 赤褐色から茶褐色	1 2個体	建物1	
44	瓦器輪		15.8 4.2 6.7	内面多方向ナゲ下から上へのナゲ 横ナゲ 底部ヘラ割り後ナゲ	角閃石白色粒(斜長石?) 透有 淡黄褐色を基調	3/4個体	建物1 柱穴3	
45	瓦器輪		14.7 4.3 6.9	内面多方向ナゲ 横ナゲ 瓦部ヘラ割り後多方向ナゲ	角閃石多量白色細粒 透有 淡黄褐色を基調とする底部は灰褐色	口縁部 1/3欠損	建物1 柱穴3	
46	瓦器輪		15.2 4.8 7.0	内面ナゲ 横ナゲ 体部下下指痕による整形痕	角閃石多量斜長石 透有 淡黄褐色	1/3個体	建物1	
47	土器器環		7.0 1.1 5.4	内面ナゲ 横ナゲ 底部右回転糸切り	角閃石若干白色砂粒微量細砂や や多 不良 淡黄褐色	口縁部 1/2欠損	建物2 土坑1	
48	土器器小皿		6.7 1.1 5.4	内面一方向ナゲ 横ナゲ 底部右回転糸切り後ナゲ	角閃石斜長石やや多いアズキ色粒 透有 粒がかった淡茶褐色	口縁部以外ほぼ 完形口縁部 は一部のみ存	建物2 土坑1	
49	土器器小皿		8.8 1.2 6.3	内面横ナゲ ナゲ横ナゲ 底部回転糸切り後板状圧痕	角閃石斜長石 透有 やや淡い黄褐色	口縁部のみ 2/3欠損	建物2 土坑1	

採目録 番号	部 種	法 規 口徑 高さ 底径	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備 考
50	土師器小皿	6.4 0.75 5.1	内面一方向ナデ 横ナデ 底面一方向ナデ	角閃石斜長石アスキ色粒 通有 淡灰褐色	$\frac{1}{2}$ 個 体	建物2 土坑2	
51	土師器 杯	10.9 2.2 9.1	横ナデ 底面ナデ	角閃石斜長石アスキ色粒各少量 通有 淡灰褐色	口縁部 ¹ ₁₄ 底面 ¹ ₁₄	建物2 北西住 穴9	
52	土師器 杯	11.8 3.5 8.3	横ナデ 底面右回転糸切	角閃石若干細砂多量 通有 赤褐色		建物2 土坑4	
53	土師器 杯	10.7 1.9 7.5	内面一方向ナデ 横ナデ 底面ナデ(?)	角閃石白色砂粒少量細砂やや多し 通有 赤褐色	完 形	建物1 柱穴2	
54	土師器 杯	12.7 3.3 7.2	横方向ナデ 底面回転糸切り後一方向ナデ	角閃石多量白色砂粒 通有 淡褐色	$\frac{1}{2}$ 残 存	ビツ5	
55	甕		外面縦方向ハケ目 内面横斜方向ハケ目 「冪」ナデ	白色砂粒微量 通有 淡赤褐色	破 片	建物1 柱穴3	
56	甕		「冪」ナデ	白色砂粒微量 通有 淡灰褐色	11 縁 部 ² ～胴部 ² ₅	建物1 柱穴4	
57	甕		「冪」ナデ	白色砂粒微量 通有 淡灰色	胴 部 ¹ ₃	建物1 柱穴4	
58	須 恵 器 (紐)	紐径2.6	横ナデ	黒色磁雲粒 良好 灰色	胴部のみ	西部ト レンチ	
59	須 恵 器 高 台 付 杯	— — 8.4	内面横ナデ 横ナデ胴部はり付け低あり横ナ デ 底面回転へつ切後横ナデ	黒色磁雲粒白色磁雲粒 良好 灰色	破 片	西部ト レンチ	
60	須 恵 器 高 台 付 杯	— — 7.9	内面横ナデ 横ナデ胴部はり付け横横ナデ 底面回転へつ切り	黒色磁雲粒 良好 灰色	破 片	西部ト レンチ	
61	土師器 土師器	12.2 —	横ナデ 横ナデ	角閃石白色砂粒斜長石 通有 暗褐色	破 片	西部ト レンチ	

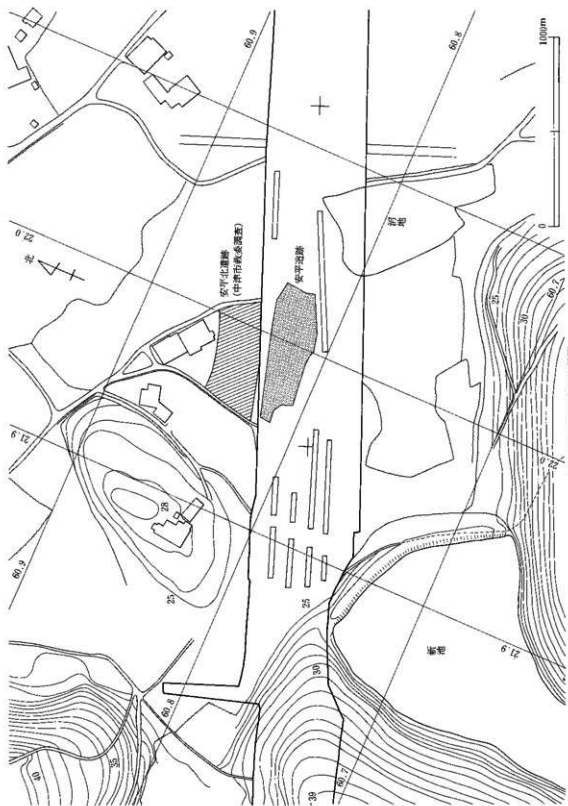
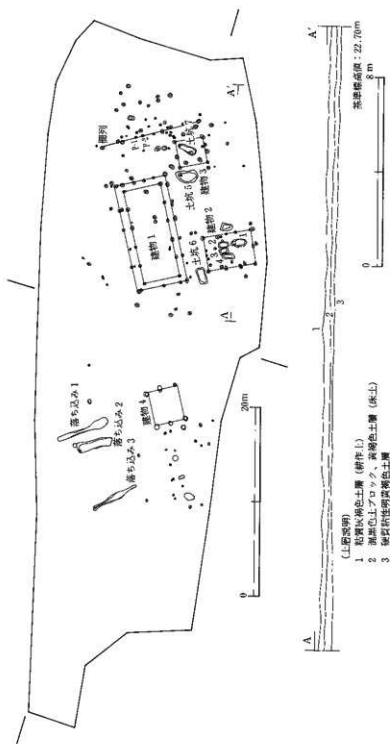
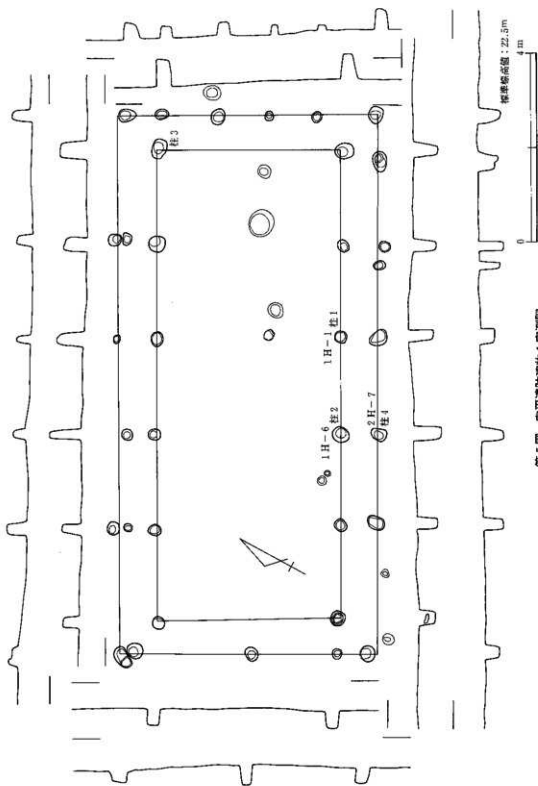
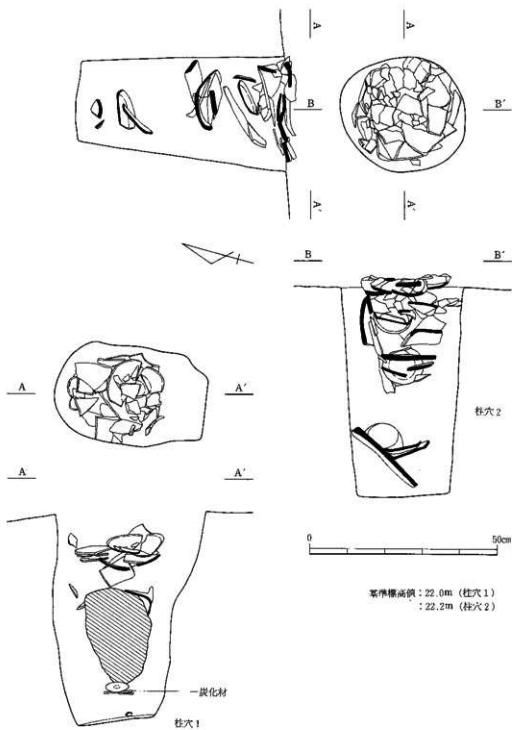


圖 3 安平遺跡位置圖

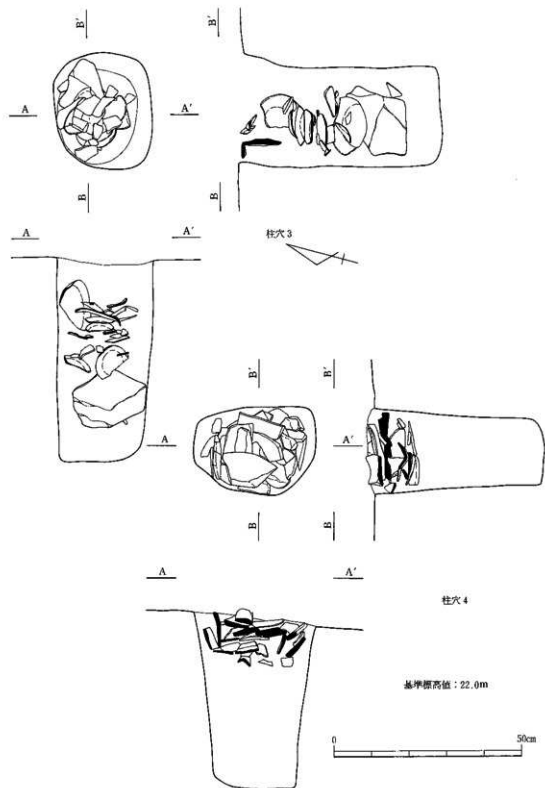




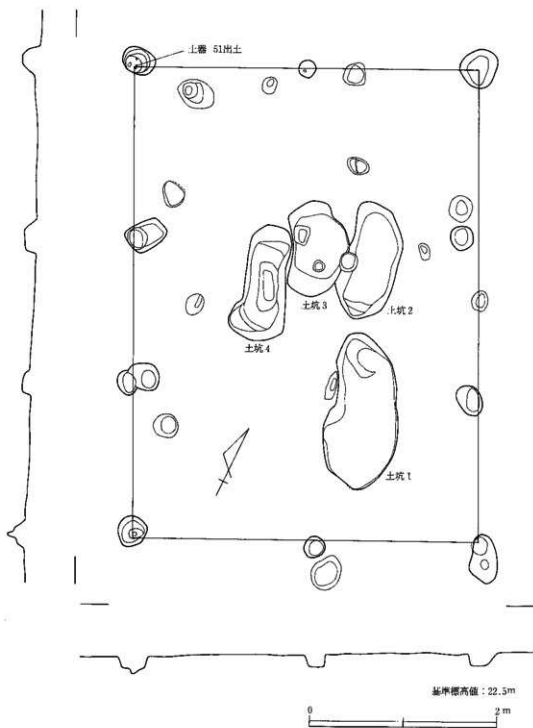
第5図 安平遺跡建物1実測図



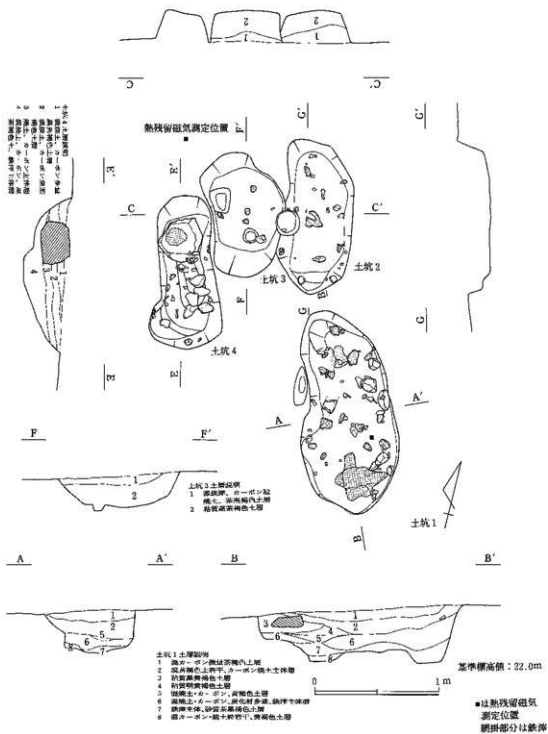
第 6 圖 安平遺跡建物 1 柱穴実測図(1)



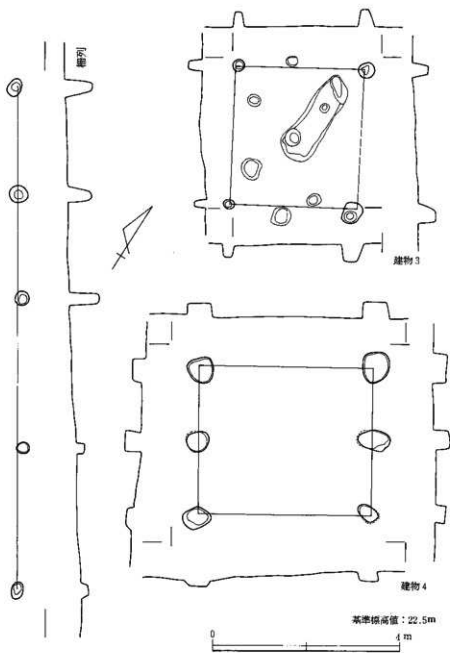
第7图 安平遺跡建物1柱穴実測図(2)



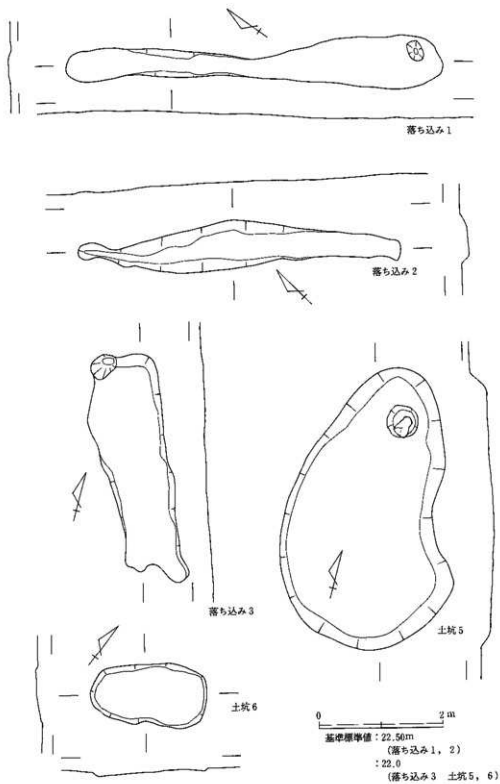
第 8 圖 安平遺跡建物 2 (鍛冶工房) 実測図



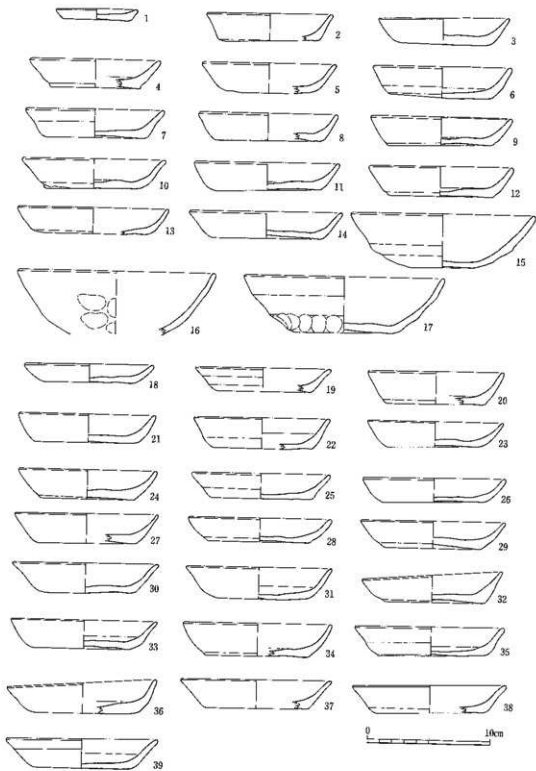
第9図 安平遺跡鐵冶遺構実測図



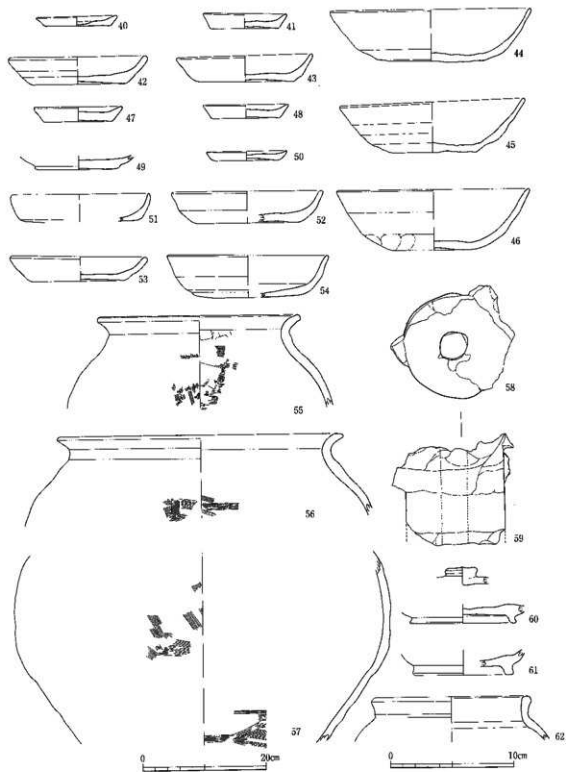
第10図 安平遺跡建物 3、4、横列実測図



第11図 安平遺跡落ち込み、土坑実測図



第12图 安平遺跡出土遺物実測図(1)



第13図 安平遺跡出土遺物実測図(2)

2 安平北遺跡

安平遺跡に北接する地区（安平北遺跡）については、昭和62年度に中津市教育委員会が調査を実施し、安平遺跡と同時期の遺構および遺物が検出されている。このため両遺跡を同一の遺跡として考える必要があり、併せてその概要を紹介しておきたい。

安平北遺跡は北西部丘陵の裾にあたり、緩やかな平坦に近い微高地上に位置する。調査はこの1400㎡を対象とした。検出された遺構は、掘立柱建物2棟、井戸1、南北および東西に伸びる溝7状、ピット群などである。ここでは性格の明確な掘立柱建物、井戸について説明したい。遺物は井戸、溝、土坑から出土したものである。

遺構

建物（第14図、第15図）

調査区の中央付近に2棟ある。建物1は1間×2間（3.4m×3.4m）でほぼ正方形を呈す。建物2は東西辺2間、北辺3間で南北4.1m×東西3.8mの規模をもつ。

井戸（第16図）

井戸は建物の南側に若干離れて位置する。平面形は不整形を呈し、規模は径1.5m～1.6m、深さ2.05mである。井戸には井桁などの施設はなく、素掘の状態であった。また井戸の北辺に0.15m×0.23mの楕円形ピットが設けられ、内部に銅銭31枚が納められていた。井戸の祭祀を示す施設と考えられる。

遺物（第17図、表2）

これらのうち4、5、6、8～12、14、16、17、19、20が井戸、1、3が土坑1、7が土坑4、15、18が溝2から出土したものであり、2、13は調査区内で採集された。

土師器小皿（1～3） 1は浅い器形を呈する。2、3は外傾する体部をもつ。直線的に伸びる体部をもつ。底部は磨減が著しく調整が不明瞭である。大きさは口径7.8cm～9.2cm、器高1.2cm～1.7cmである。

土師器（6、7） 長い高台をもつ土師器壺の底部破片である。

瓦器（4、5） 無高台瓦器境である。4は器高が低く、底部は丸く仕上げられている。体部は内湾する。器壁は底部が薄く口縁部に向かって徐々に肥厚し、口縁部端部は丸くなる。体部下部に指頭による整形痕が残っている。内面には丁寧なナデが施されている。焼成は通有であるが内面に還元が十分でなく淡黄褐色を呈する部分がある。胎土に角閃石、斜長石を含む。大きさは口径15cm、器高4.7cmである。5は底部を欠く破片である。体部は外へ開き、口縁部は丸く肥厚する。1よりも更に浅い形状を呈し皿状となっている。体部下部に指頭による整形痕が残っている。内面には丁寧なナデが施されている。焼成は還元が十分でなく淡黄褐色を呈する部分が多い。胎土に角閃石、斜長石を含む。大きさは口径15cmで、器高は4cm程度と思われる。

る。

瓦質土鍋（8～12） 共に体部上半部～口縁部の破片である。口縁部は体部との境から緩く内湾して立ち上り、内面に明瞭な段が残る。焼成は良好で灰褐色を基調とする。胎土に角閃石、斜長石を含む。また外面に炭化物の付着がみられる。大きさは復元口径28.4cm～30cmである。

瓦質すり鉢（13、14、15） 13は口縁部～体部上半部の破片で口径27.5cmを復元できる。内面に3条を1単位とする櫛目がみられる。14は底部破片で底径11.4cmの平底である。内面に6条を1単位とする櫛目があり、底部では交差して、体部では縦方向に施されている。15は備前焼で断面三角状をなす口縁部と平底をもつ。

瓦質鉢（18～20） 底部を欠く体部～口縁部の破片である。口縁は端部で短かく屈曲し内面に稜をもつ。19は体部上半部に指頭、横ナデ、下半部に斜方向のヘラ削りの調整痕がみられる。

瓦質釜（8） 直立する短い口縁部をもつ。

銅銭（表3）

祭祀ピットから一括出土した31枚の銅銭である。銅銭の種類は「開元通寶」5枚、「天聖元寶」1枚、「景祐元寶」1枚、「皇宋通寶」1枚、「治平元寶」1枚、「熙寧元寶」3枚、「元豊通寶」2枚、「元祐通寶」4枚、「聖宋元寶」1枚、「大定通寶」1枚、「至大通寶」1枚、「洪武通寶」1枚、不明3枚である。銘を判別できる銅銭は12種類である。このうち永樂通寶が初鑄年の最も新しい例である。

小結

遺構について

遺構の広がりを見ると、南の安平遺跡と北の安平北遺跡では分布に若干の差がある。地形的には北に向かい高くなっていくが、遺跡範囲としては一つの纏まりをもつと考えられる。

安平遺跡の4棟の建物については、建物1を中心に、工房である建物2、倉庫などの機能が考えられる付属建物2棟が柱筋、方位を同一に配置されている。

一方、安平北遺跡では建物2棟、井戸1、溝が検出されている。建物は安平遺跡のそれとは主軸方位を異にし、2棟ともに安平遺跡のような計画的な配置をもっていない。しかし井戸の出土遺物からみれば、安平遺跡と時期的に併存した可能性を想定できる。

従って、安平遺跡は鍛冶工房の一単位とし、安平北遺跡はやや後出ながら併存あるいは連続する雑舎と位置付けることができよう。

出土土器について

瓦器塊 安平北遺跡井戸出土のものは、体部下半部で丸くなり、底部との境が不明瞭になる傾向をもつ。口縁部は安平遺跡建物出土例が端部に向かい細くなるのに対し、明らかに肥厚する。このような形態の特徴は、宇佐市大楽寺出土例に近似する。

瓦質土鍋 安平北遺跡井戸出土例では、口縁下部の外面に緩く膨らみをもち、内面に明瞭な段が確認できる。次段階では、吉松遺跡3号墓例のように退化するものと思われる。

土師器小皿 量的には僅少である。

土師器環 器形は一定の規格水準を保っている。形態の多様さは生産の状況を示すものであり、必ずしも時期差とは捉えられない。

出土遺物の時期については、安平北遺跡の井戸祭祀ピットから一括出土した銅銭が重要な意味をもつ。

祭祀ピット出土の銅銭の中では永楽通寶が最も新しく、次の宣徳通寶(1433年)は出土していない。

このことから、井戸廃棄年代を1433年を下限とし、出土土器の後出する一群を15世紀前半に位置付けることができる。

従って、安平北遺跡井戸出土瓦器碗、土鍋、すり鉢、鉢が15世紀前半に該当し、これよりも若干先行する安斗遺跡建物出土の土器群は14世紀後半代に充つことができよう。

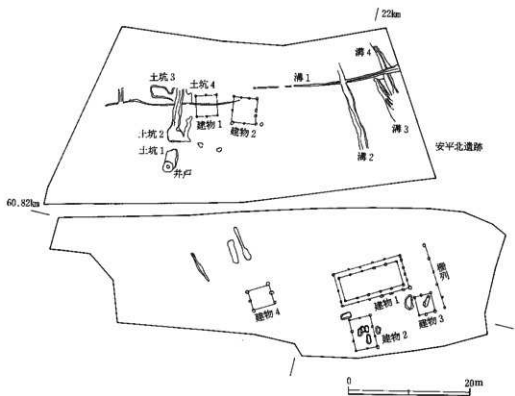
表2 安平北遺跡井戸出土土器観察表

遺物No.	器種	大きさ	調整・焼成・色調・胎土	備考
1	土師器小皿	口径7.9cm、 器高1.2cm	体部はナデ。焼成は通有。色調は灰白色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	1/6
2	土師器小皿	口径8.6cm、 器高1.7cm	体部はナデ。焼成は通有。色調は灰白色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	1/2
3	土師器小皿	口径9.2cm、 器高1.7cm	体部はナデ。焼成は通有。色調は淡褐色～灰白色胎土に角閃石、斜長石を含む。	1/4
4	瓦器碗	口径15cm、 器高4.7cm	体部下半に指頭による整形痕、内面には丁寧なナデ。焼成は通有。色調は黒褐色、一部淡黄褐色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	1/2
5	瓦器碗	口径15cm、 器高4.7cm	体部下半に指頭による整形痕、内面には丁寧なナデ。焼成は黒褐色、一部淡黄褐色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	1/5
6	土師器碗	高台径7.2cm	横ナデ。焼成はやや不良。色調は淡赤褐色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	底部残欠
7	土師器碗	高台径7.4cm	横ナデ。焼成はやや不良。色調は淡赤褐色。胎土に角閃石を含む。	底部残欠
8	土師器碗	復元口径29.7cm	横ナデ。焼成は通有。色調は灰褐色。胎土に角閃石、斜長石を白色砂粒を含む。	体部上半部～口縁部の破片外面に保付着
9	土師器碗	復元口径30cm	横ナデ。焼成は通有。色調は灰褐色。胎土に角閃石、斜長石を白色砂粒を含む。	体部上半部～口縁部の破片外面に保付着
10	土師器碗	復元口径30cm	横ナデ。指頭。焼成は良好。色調は灰褐色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	体部上半部～口縁部の破片
11	土師器碗	復元口径30cm	横ナデ。焼成は通有。色調は灰褐色。胎土に角閃石、斜長石を白色砂粒を含む。	体部上半部～口縁部の破片外面に保付着
12	瓦質土鍋	復元口径28.4cm	横ナデ。焼成は良好。色調は淡灰褐色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	体部上半部～口縁部の破片
13	瓦質すり鉢	口径27.5cm	内外面にナデ。内面に3条を1単位とする縦方向の標目。焼成は通有。色調は淡黄～灰褐色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	体部上半部～口縁部の破片
14	瓦質すり鉢	口径11.4cm	体部は多方向へう割り。底部ナデ。内面に6条を1単位とする標目。焼成は堅緻。色調は淡灰褐色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	底部付近の破片
15	備前すり鉢	口径20.9cm、 器高8.2cm	横ナデ。内面に9条を1単位とする縦方向の標目。焼成は堅緻。良好。色調は暗灰色。胎土に白色砂粒を多量含む。	底部～口縁部の破片
16	瓦質釜	口径16cm	口縁部は短く直立する。調整は横ナデが施されている。焼成は良好。色調は灰黒色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	破片
17	瓦質火鉢	口径29.2cm	横ナデ。外面に2条の突起が通りその間にスランプが施される。焼成は通有。色調は灰褐色～黒灰色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	底部～口縁部の破片
18	瓦質鉢	復元口径50.5cm	ナデ。焼成は通有。色調は淡褐色～暗灰色。胎土に角閃石、斜長石、白色砂粒を含む。	底部を欠く体部～口縁部の破片外面に保付着
19	瓦質鉢	復元口径60.4cm	体部上半に指頭。横ナデ。下半に斜方向のへう割り。焼成は良好。色調は黄褐色～黒褐色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	底部を欠く体部～口縁部の破片
20	瓦質鉢	復元口径52.8cm	ナデ。焼成は良好。色調は淡褐色。胎土に角閃石、斜長石を含む。	底部を欠く体部～口縁部の破片

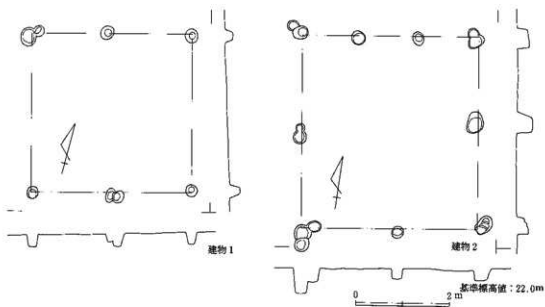
表3 安平北遺跡出土銅錢一覽表

No	銭名	初鋳年	形状	外径 (cm)	内径 (cm)	穿径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	開元通寶	621	完形	2.4	2.0	0.6	0.1	2.1	
2	元祐通寶	1086	完形	2.4	2.0	0.6	0.1	2.0	
3	大定通寶	1178	$\frac{2}{3}$ 残存	2.4	2.1	0.5	0.1	1.5(+)	
4	元祐通寶	1086	完形	2.3	1.9	0.6	0.1	2.3	
5	熙寧元寶	1068	完形	2.3	2.0	0.7	0.1	3.0	
6	元祐通寶	1086	完形	2.4	2.1	0.6	0.1	3.3	
7	開元通寶	621	完形	2.3	1.9	0.6	0.1	2.7	
8	元豐通寶	1078	完形	2.5	2.0	0.6	0.1	3.6	
9	治平元寶	1064	完形	2.4	1.9	0.6	0.1	2.9	
10	永樂通寶	1408	一部欠損	2.5	2.1	0.5	0.1	1.9(+)	
11	開元通寶	621	一部欠損	2.2	1.9	0.7	0.1	1.9(+)	
12	聖宋元寶	1101	完形	2.3	1.8	0.6	0.1	3.1	
13	洪武通寶	1368	完形	2.3	1.7	0.4	0.1	3.6	背文アリ
14	皇宋通寶	1038	完形	2.4	2.0	0.8	0.1	2.7	
15	皇宋通寶	1038	完形	2.3	1.9	0.6	0.1	3.0	
16	開元通寶	621	完形	2.5	2.0	0.7	0.1	2.9	背文アリ
17	元豐通寶	1078	完形	2.3	1.7	0.6	0.1	2.8	
18	元祐通寶	1086	完形	2.4	1.8	0.6	0.1	2.4	
19	天聖元寶	1023	完形	2.4	2.0	0.6	0.1	2.3	
20	永樂通寶	1408	完形	2.5	2.1	0.5	0.1	2.5	
21	天禧通寶	1017	完形	2.4	2.0	0.6	0.1	3.8	
22	嘉祐通寶	1056	完形	2.4	2.0	0.7	0.1	2.3	
23	元豐通寶	1078	完形	2.4	2.0	0.7	0.1	2.7	
24	開元通寶	621	完形	2.4	2.0	0.7	0.1	2.9	背文アリ
25	景祐元寶	1034	完形	2.5	2.0	0.5	0.1	3.5	
26	熙寧元寶	1068	完形	2.3	1.9	0.6	0.1	2.7	
27	(永樂通寶?)		約 $\frac{2}{3}$	2.2	1.9	0.6	0.1	1.0(+)	
28	永樂通寶	1411	完形	2.5	2.1	0.5	0.1	3.0	
29	至道元寶	995	完形	2.5	1.7	0.5	0.1	3.0	
30	至大通寶	1310	完形	2.4	2.0	0.6	0.1	2.5	
31	熙寧元寶	1068	一部欠損	2.4	2.0	0.7	0.1	2.5(+)	

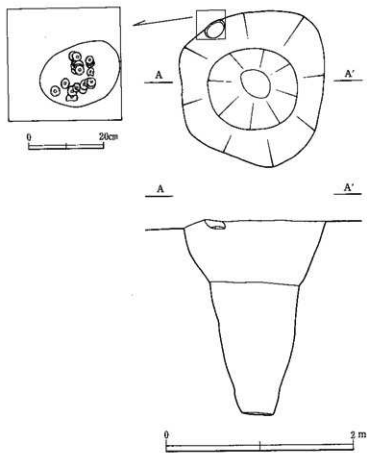
(参考文献:永井久美男編「中世の出土銭」兵庫埋蔵銭調査会,1994年)



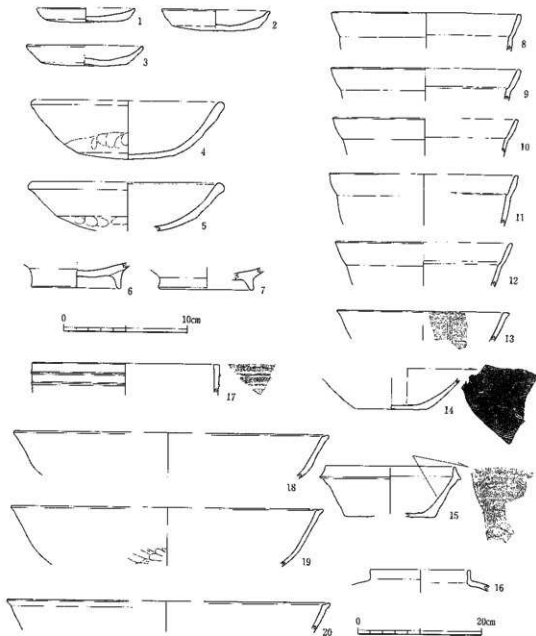
第14圖 安平北遺跡遺構分布圖



第15圖 安平北遺跡建物 1、2 實測圖



第16图 安平北遺跡井戸突測図



〈出土位置〉

4、5、6、8～12、14、16、17、19、20 井戸

1、3 土坑1

7 土坑4

15、18 溝2

2、13 表採

〈出土土器・類別〉

1～3、6、7は土師器

他は瓦質土器

第17図 安平北遺跡出土遺物実測図

3 安平遺跡鍛冶遺構の地磁気年代

島根大学理学部 時枝克安

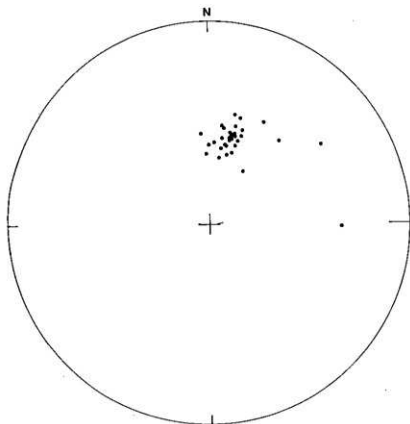
安平遺跡の鍛冶遺構について、熱残留磁気の方向を西南日本の過去2000年の地磁気永年変化曲線と比較して次の地磁気年代を得た。

安平遺跡鍛冶遺構の地磁気年代 A. D. 1220 ± 30

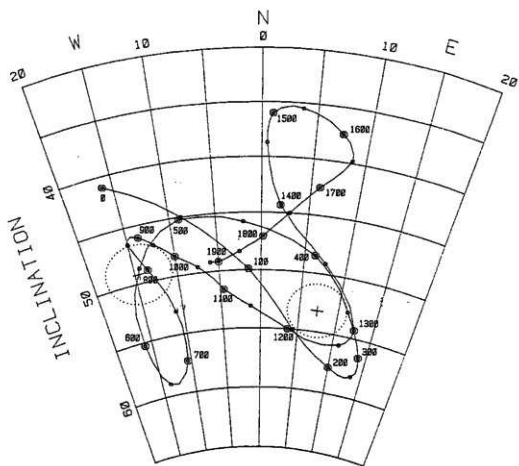
または A. D. 1325 ± 25

残留磁気の平均方向

	Im(度)	Dm(度E)	k	θ_{95} (度)	N
安平遺跡鍛冶遺構	53.2	7.3	127	2.3	32



第18図 安平遺跡鍛冶遺構の残留磁気方向



第19図 安平遺跡銅冶遺構の残留磁気の平均方向（右+印）と誤差の範囲（右点線の楕円）、および、広岡（1977）による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

4 安平遺跡出土鍛冶滓の金属学的調査

たたら研究会会員 大澤正己

概要

中世（14世紀後半～15世紀前半）に属する安平遺跡出土の5点の鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

- 〈1〉鉄滓は、鉄器製作時の折返し曲げ鍛接作業での高温加熱時に派生した鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）に分類される。鍛冶炉の炉底に堆積形成された小型の碗形滓も存在した。
- 〈2〉鍛冶に供した鉄素材は、国東半島の海岸線一帯に賦存する塩基性砂鉄（赤目系）を始発原料とした可能性をもつ。
- 〈3〉安平遺跡は4棟の建物を中心に構成された中世集落の一部と考えられている。^① その中の建物2は、前述した鍛錬鍛冶滓を出土するので鍛冶工房に想定される。又、土坑1出土の羽口は外径8cm、内径2.4cmは鍛錬鍛冶用としての機能を有するものである。

1 いきさつ

安平遺跡は、大分県中津市伊藤田地区に所在する。遺跡は西へ開析された谷に北面する緩い斜面上に立地し、建物4、土坑8、ピット約70、溝状落ち込み3、棚列1が検出された。このうち、建物2は3間×2間、桁行5.2m、梁行3.6mの掘立柱建物で、中に4基の土坑を伴っていた。4基の土坑は、いずれも鉄滓の出土が顕著で、炭化物、被熱の礫の堆積が認められた。更に土坑1から羽口、土坑4は35×36cm、厚さ25cmの金床石が想定できる遺物まで検出された。

この建物2の土坑2、3より出土した鉄滓の専門調査を大分県教育委員会より要請されたので、若干の考察を加えて報告する。

2 調査方法

2-1 供試材

表4に示す。調査鉄滓は、土坑2が3点、土坑3が2点である。

表4 供試材の履歴と調査項目

符 号	試 料	出土位置	推定年代	計 測 値		調 査 項 目	
				大きさ (mm)	重量 (g)	顕微鏡組織	化学組成
Z-881	鉄 滓	建物2 土坑2 №9	中 世	50×20×15	30	○	○
Z-882	〃	〃 〃 №10	〃	50×40×20	45	○	○
Z-883	〃	〃 〃 №14	〃	65×35×25	65	○	○
Z-884	〃	〃 土坑3 №18	〃	30×30×20	32	○	○
Z-885	〃	〃 〃 №20	〃	50×50×20	100	○	○

2-2 調査項目

(1) 肉眼観察

(2) 顕微鏡組織

鉄滓は、水道水で十分に洗滌、乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150, #320, #600, #1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3μと1μで仕上げ、顕微鏡観察を行なった。

(3) 化学組成

鉄滓の分析は次の方法で行なっている。

重クロム酸使用の重量法：酸化第1鉄 (FeO)、二酸化珪素 (SiO₂)、

赤外吸収法：炭素 (C)、硫黄 (S)、

原子吸光法：全鉄分 (Total Fe)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化クロム (Cr₂O₃)、バナジウム (V)、銅 (Cu)

中和滴定法：五酸化燐 (P₂O₅)

3 調査結果と考察

(1) Z-881鉄滓：土坑2出土

① 肉眼観察

表裏共に赤褐色の鉄錆に覆われた小片である。粗鬆な肌に木炭痕を残す。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の①②に示す。鉱物組成は、白色粒状のヅスタイト (Wüstite: FeO) と、淡灰色木ずれ状のファイヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。なおヅスタイト粒内には、灰黒色斑点状のヘーシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) が

少量析出しているのが認められる。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ 化学組成

表5に示す。鉄分が多くてガラス質の少ない成分系である。全鉄分(Total Fe)は、58.4%、このうち、酸化第1鉄(FeO)が56.1%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)が21.14%の割合である。錆化鉄を少し含む。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO)は21.16%包蔵し、この中で塩基性成分(CaO+MgO)が2.59%と鍛冶滓としては高めである。次に砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)は0.37%、バナジウム(V)0.014%と低減されるのが鍛冶滓の特徴である。他の随伴微量元素らもおしなべて少なく、酸化マンガン(MnO)0.10%、酸化クロム(Cr₂O₃)0.01%、硫黄(S)0.034%、銅(Cu)0.005%であり五酸化燐(P₂O₅)のみは若干高めの0.29%であった。

(2) Z-882鉄滓：土坑2出土

① 肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈し、表側の肌は、気泡を露出し、木炭痕を残して荒れている。裏面は黒褐色地の赤褐色の鉄銹を産し、反応痕の凹凸が認められる。鍛冶炉の炉底に堆積された超小型の楕形滓である。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の③④に示す。鉱物組成は、前述したZ-881鉄滓に準ずるもので、ヴスタイト(Wüstite: FeO)とファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。ヴスタイト粒内にはやはりヘーシナイト(Hercynite: FeO·Al₂O₃)を析出している。鍛錬鍛冶滓である。

③ 化学組成

表5に示す。成分系も、やはりZ-881鉄滓に近似する。二酸化チタン(TiO₂)は0.63%と若干高めであって、他あまり差異がない。鍛錬鍛冶滓の成分系であった。

(3) Z-883鉄滓：土坑2出土

① 肉眼観察

表裏は黒褐色を呈し、やや楕円状を有する。鉄滓一部の端部は、高温にあつて滴下状にたれさがった個所があり、全体的に荒れは少ない。なお、気泡は散発している。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の⑤に示す。該品の鉱物組成もヴスタイトとファイヤライト、これらに基地の暗黒色ガラス質スラグが加わる。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ 化学組成

表5に示す。該品も前述したZ-881鉄滓の成分系に近似する。

(4) Z-884鉄滓：土坑3出土

① 肉眼観察

超ミニ碗形滓が1/4の破片に割れている。表裏共に赤褐色錆に覆われた粗鬆肌に気泡を多く発した鉄滓である。

② 顕微鏡組織

Photo. 2の①②に示す。鉱物組成は微細結晶のヴスタイト(Wüstite: FeO)とファイヤライト、暗黒色ガラス質スラグらである。該品は急冷された為、ヴスタイトが成長しきっていない。鍛錬鍛冶滓に分類される。

③ 化学組成

表5に示す。該品も、前述した土坑2出土の3点の鉄滓と大きな差異のあるものではなく、成分的にも近似する。

(5) Z-885鉄滓：土坑3出土

① 肉眼観察

当遺跡出土品としては、大振り品に属する含鉄鉄滓である。鉄錆まじりの赤褐色を呈している。木炭痕も残す一種の碗形滓であった。

② 顕微鏡組織

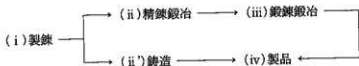
Photo. 2の③～⑥に示す。金属鉄が錆化鉄のゲーサイト(Goethite: α -FeO·OH)となつて大半を占める。③④の灰白色から淡褐色部がゲーサイトである。⑤⑥の縞模様はファイヤライトとガラス質である。一部に雪結晶に似た微小マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)が認められた。鍛冶滓組織として、時にはみられる。やはり鍛錬鍛冶滓に分類できて、該品は金属鉄を鉄滓側に逃がしている。技術的にうまく操業できなかった代物と考えられる。

③ 化学組成

表5に示す。全体の鉄分としての全鉄分(Total Fe)は、51.1%と大差なく、酸化第1鉄(FeO)が15.88%と少なく、錆化鉄成分の酸化第2鉄(Fe₂O₃)が55.4%と大きくなっている。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO)は20.57%と従来品と大差なく、二酸化チタン(TiO₂)は0.39%、バナジウム(V)0.007%はやゝ低めであった。他の随伴微量元素のうち硫黄(S)0.047%、炭素(C)0.69%は高めで、汚染物質の影響と考えられる。酸化マンガン(MnO)0.08%、酸化クロム(Cr₂O₃)0.01%、五酸化燐(P₂O₅)の0.11%らは少ない。しかし、銅(Cu)は鉄中に固溶するので、錆化鉄の多いことから0.008%とやゝ高めであった。しかし、全体の成分傾向は、他の鉄滓と大きく外れることはない。

4 まとめ

鉄生産の工程を大綱みに表わすと次の様になる。



まず(i)製鉄とは、砂鉄や鉱石を木炭でもって還元し、荒鉄とも言うべき鉄塊を得る作業である。荒鉄は言い替えると、製鉄生成鉄で表皮に鉄滓を附着し、捲き込みスラグや炉材粘土らの不純物を含む原料鉄(鉄塊系遺物)である。この荒鉄の不純物を取り除き、炭素(C)の偏析をなくす工程の成分調整が(ii)の精錬鍛冶である。この精錬鍛冶は幾度か繰返されて棒状や板状(鉄錠状)の鉄素材となったものが鉄器製作される。この鉄器製作時の鍛接折り返し曲げらの高温加熱時に排出される鉄滓が安平遺跡出土鉄滓でみられた(iii)の鍛錬鍛冶滓である。(鍛錬鍛冶滓は他にも熱処理酸化防止用粘土汁の使用でガラス滓があるがここでは触れない。)

上記各作業工程で排出された鉄滓は、鉱物組成と化学組成に、それぞれ特徴をもつ。砂鉄を製鉄原料とした場合、母岩の影響から地域差をもつが、例えば国東半島賦存砂鉄であれば、砂鉄特有元素は瀬井海岸浜砂鉄でみられる様に二酸化チタン(TiO_2)が11.14%、これを製鉄すると二酸化チタン(TiO_2)は濃縮されて14~23%台まで上昇する。(表5参照)

この時の製鉄滓の鉱物組成は鉄とチタンの化合物のウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、イルミナイト(Ilmenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、プッシュドブルーカイト(Pseudbrookite: $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$)らである。

次に(ii)の精錬鍛冶になると二酸化チタン(TiO_2)は減少し、ワラミノ遺跡でみられる様に4.34~10.96%まで低減される。鉱物組成はヴスタイト(Wüstite: FeO)とウルボスピネルの混在した組織となる。

これが、(iii)の鍛錬鍛冶になると更に二酸化チタン(TiO_2)は減少し、安平遺跡出土鉄滓の如き1%以下にまで下降する。鉱物組成は、酸化鉄のヴスタイトとファイヤライトを基本組成とし、これに粒内に析出物を含むケースも起つてる。(粒内析出物は精錬鍛冶滓ではチタン系があり、鍛錬鍛冶滓ではヘーシナイトがありうるので要注意)^④

以上の各工程の砂鉄特有元素のチタン(Ti)とバナジウム(V)について相関図をとったのが、第20図である。この場合、指数として $^{Ti}/_{Total} \text{Fe}$ と $^{V}/_{Total} \text{Fe}$ を採用した。Ti・Vの相関図は、過去に他地域のデータを幾つか解析してきた。多くは地域ごとに或る纏りをもって位置づけられている。

第20図は国東半島出土鉄滓を中心として、周辺遺跡を含めたプロットで、ベースデータは、表5と表6である。 $Ti/T_{Total} Fe$ と $V/T_{Total} Fe$ は製鉄工程の進行につけて45°の直線の左下りに分布しつつ漸次減少して行く。すなわち、右上手に製錬滓、左下方へ精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓と下降する。安平遺跡出土鉄滓は、国東半島出土鉄滓の製錬滓と精錬鍛冶滓の延長線上に分布する。この結果から推定して、国東半島周辺で製錬された鉄素材が安平遺跡へ搬入された可能性が指摘できる。

今後、国東半島内での鍛錬鍛冶滓や、鍛造剥片、粒状滓、更には鉄塊系遺物をも含めてデータ化してゆけば、大分県下の中世製鉄の実像はより明確化してくると考える次第である。

注

- ① 大分県教育委員会『中津市伊藤田地区遺跡群』（一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財調査概報）1987. 3. 31
 - ② 藤本啓二、大澤正己『国東半島における古代・中世の鉄生産について』『平成3年度九州史学会 考古学部会資料』九州大学1991、12、8
 - ③ (イ) 拙稿「松丸製鉄遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『城井谷1』築城町文化財調査報告書第2集 福岡県築城町教育委員会1992
 - (ロ) 拙稿「長者原田遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『長者原田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集 大分県日田市教育委員会 1992
 - (ハ) 拙稿「矢部奥田遺跡・矢部古墳A・堀越遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『矢部奥田遺跡』（岡山県埋蔵文化財報告 第6集 岡山県古代古備文化財センター1993
 - (ニ) 大境遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査』『大境遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告 第136集（財）栃木県文化振興事業団 1993
 - (ホ) 拙稿、古町B遺跡出土鉄滓の金属学的調査』『古町B遺跡』新潟県吉川町教育委員会 1993
- なお、Ti、V相関については、平井昭司「鉄器とその原料～微量元素からみた製鉄」『第2回トルコ調査研究発表要旨』1992、22がある。こちらは中性子放射化分析法にもとづくデータである。これに対して筆者の分析データは一般の化学分析組成であって、今後両データがどんな対応をとりつづけるのか検討してゆきたいと考えている。

表5 鉄滓の化学組成

試料番号	遺跡名 (地名)	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 珪素 (SiO ₂)	酸化 アルミナ (Al ₂ O ₃)
HRST-1	長者原	7号竪穴住居跡	鍛錬鍛冶滓	8C中～後半	52.83	0.09	49.04	20.91	18.29	6.76
HRST-2	〃	区画溝	〃	中世	64.01	0.10	61.23	23.33	6.22	2.71
AH-1	赤ハゲ	B区1号溝№17	小鉄塊	6C後半 ～7C前半	58.09	11.55	14.59	50.33	6.86	2.16
AH-3	〃	B区4号住居跡№11	鍛錬鍛冶滓	〃	16.20	0.54	5.94	15.79	44.80	15.45
L-901A	由井ヶ池遺跡	1号炉前底部	砂鉄製錬滓	12～13C前後	37.8	—	7.83	45.3	14.04	5.48
L-901B	〃	〃	〃	〃	37.8	—	11.64	41.1	7.76	4.22
L-902	〃	2号遺構	〃	〃	45.9	—	47.0	13.36	12.06	5.39
L-903	〃	1号炉前底部	〃	〃	43.6	—	16.67	43.8	12.10	5.41
B-911	〃	1号製鉄炉前底部	砂鉄付着製錬滓	〃	42.62	1.47	13.02	44.37	15.08	5.75
B-912	〃	〃	鉄塊系遺物	〃	73.99	41.20	17.44	27.50	1.65	0.66
B-913A	〃	〃	砂鉄製錬滓	〃	31.52	3.56	11.42	27.28	27.70	9.07
B-913B	〃	〃	〃	〃	25.45	2.78	17.06	13.43	25.58	9.30
YARA-1A	ワラミノ遺跡	2号製鉄炉炉底滓	砂鉄製錬滓	12～13C前後	35.22	0.47	20.33	27.09	18.03	6.77
2	〃	排滓坑	〃	〃	34.85	0.46	32.29	13.28	16.22	7.70
3	〃	2号遺構	〃	〃	38.57	0.43	41.12	8.83	18.81	6.38
4	〃	1号鍛冶炉炉底内	精錬鍛冶滓	〃	53.05	0.42	48.13	21.76	8.06	3.88
5	〃	前底部	〃	〃	43.88	0.13	33.13	25.73	20.25	7.20
6A	〃	〃	〃	〃	47.73	0.28	49.27	13.09	19.72	6.78
6B	〃	〃	鍛錬鍛冶滓	〃	62.45	0.15	46.00	37.95	7.48	1.89
OQYM-1	大山神社	国東町大字大恩寺採取	砂鉄製錬滓	不明	32.65	0.23	34.12	8.43	16.60	6.78
B-194	西有田赤ハゲ遺跡 C地点	C-2 Grid	砂鉄製錬滓	〃	30.63	0.33	32.67	7.01	21.77	7.54
B-195	〃	〃	〃	〃	30.86	1.52	18.73	21.13	24.71	9.02
W-881	重藤遺跡	SE-3 SPY	砂鉄製錬滓	中世	40.7	—	46.3	6.75	7.08	5.01
W-882	〃	〃	〃	〃	40.0	—	45.0	7.18	15.80	4.62
W-883	〃	〃	〃	〃	50.0	—	48.7	17.36	7.72	3.07
W-884	〃	〃	〃	〃	28.7	—	21.70	15.52	20.02	5.14
W-885	〃	〃	〃	〃	41.0	—	34.6	20.17	16.50	4.68
M-901	吉木園東町採取	砂鉄製錬滓	不明	27.8	—	34.3	1.53	22.54	7.41	
M-902	〃	〃	〃	〃	32.0	—	39.1	2.28	24.44	7.91
L-904	網井海岸	浜砂鉄	砂鉄	現在	56.5	—	20.55	57.9	3.36	2.29
Z-881	安平遺跡	土坑2	鍛錬鍛冶滓	14C後半 ～15C前半	58.4	—	56.1	21.14	14.18	4.39
Z-882	〃	〃	№10	〃	53.9	—	55.8	15.17	19.42	5.36
Z-883	〃	〃	№14	〃	54.9	—	44.9	28.6	16.50	4.54
Z-884	〃	土坑3	№18	〃	51.6	—	54.0	13.80	19.42	6.19
Z-885	〃	〃	№20	〃	51.1	—	15.88	55.4	14.56	4.64
A	石丸	大田村採取(船状)	砂鉄製錬滓	不明	42.17	0.34	43.18	11.82	18.28	6.70
B	〃	〃(多孔質)	〃	〃	26.53	2.90	12.79	19.57	23.28	7.80
C	譜田	安岐町採取(船状)	〃	〃	41.33	0.42	47.85	5.32	16.91	5.86
D	〃	〃(多孔質)	〃	〃	22.34	0.64	17.36	11.38	30.75	13.80
E	浜崎	国東町採取(船状)	〃	〃	38.26	0.32	31.73	31.73	18.02	6.24
F	〃	〃(多孔質)	〃	〃	34.35	0.11	19.23	19.23	20.43	7.64

① 大澤正己「長者原遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『長者原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集 日田市教育委員会 1992

② 大澤正己「西有田赤ハゲ遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『西有田赤ハゲ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第7集 日田市教育委員会 1992

③ 国東町教育委員会「国東地区遺跡群発掘調査概報1」(1990)

④ 国東町教育委員会「は場整備に伴う調査」1991.8～1991.10

⑤ 国東町教育委員会「は場整備に伴う調査」1991.9～1991.1

⑥ 国東町教育委員会「重藤遺跡」(「重藤遺跡・安平遺跡」, 1991)

酸化 CaO	酸化 MgO	酸化 K ₂ O	酸化 Na ₂ O	酸化 MnO	二酸化 チタン TiO ₂	酸化 クロム Cr ₂ O ₃	硫 黄 S	五酸化 リン P ₂ O ₅	炭 素 C	窒 素 N	銅 Cu	造 成 分	造 成 分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	注
0.94	0.73	0.428	0.322	0.10	0.52	0.01	0.031	0.20	0.08	0.01	0.006	27.47	0.520	0.010	①
0.70	0.41	0.194	0.072	0.10	0.13	0.01	0.024	0.37	0.10	0.02	0.006	10.306	0.161	0.019	
0.30	0.15	0.17	0.047	0.05	0.11	0.01	0.128	0.13	1.38	0.001	0.008	9.687	0.167	0.002	②
4.28	1.54	2.40	1.92	0.19	0.87	0.02	0.063	0.43	0.83	0.008	0.012	70.39	4.345	0.054	
1.12	1.99	0.10	0.01	0.51	14.04	0.03	0.015	0.23	0.43	0.20	0.026	22.74	0.602	0.371	③
0.59	2.48	0.12	0.01	0.71	21.97	0.02	0.044	0.040	0.29	0.11	0.023	15.18	0.402	0.581	
1.37	2.28	0.44	0.20	0.58	14.99	0.03	0.036	0.21	0.09	0.22	0.025	21.74	0.474	0.327	
0.94	1.62	0.01	0.01	0.43	11.72	0.03	0.024	0.33	0.59	0.17	0.027	20.09	0.461	0.269	
1.07	1.32	0.421	0.373	0.33	8.19	0.01	0.080	0.40	0.48	0.11	0.004	47.23	1.108	0.192	
0.18	0.18	0.057	0.035	0.05	0.66	0.03	0.178	0.67	1.91	0.01	0.005	2.762	0.037	0.009	
1.52	1.55	1.11	0.673	0.34	8.32	0.04	0.056	0.40	0.26	0.11	0.005	41.823	1.321	0.264	
3.07	3.09	1.38	0.737	0.71	20.09	0.03	0.046	0.27	0.08	0.25	0.005	43.157	1.696	0.789	
2.66	2.82	0.77	0.64	0.66	15.15	0.04	0.020	0.299	0.45	0.22	0.006	31.69	0.900	0.430	④
2.74	3.29	0.89	0.59	0.72	20.18	0.10	0.030	0.236	0.06	0.42	0.008	31.43	0.902	0.579	
2.79	3.43	1.31	0.54	0.71	14.40	0.02	0.030	0.404	0.07	0.14	0.006	32.63	0.846	0.373	
1.14	1.81	0.38	0.16	0.42	10.96	0.03	0.041	0.299	0.11	0.19	0.006	15.48	0.292	0.196	
1.84	1.35	0.44	0.69	0.21	4.94	0.02	0.035	0.350	0.18	0.09	0.006	31.77	0.724	0.113	
2.13	1.46	0.69	0.44	0.20	4.34	0.02	0.027	0.246	0.06	0.08	0.006	31.22	0.654	0.091	
0.44	0.36	0.14	0.084	0.06	0.85	0.01	0.031	0.189	0.25	0.02	0.008	10.394	0.159	0.014	
3.09	4.15	1.09	0.38	0.92	23.31	0.09	0.031	0.317	0.06	0.31	0.008	32.09	0.983	0.714	
2.65	4.04	0.944	0.588	0.78	18.85	0.03	0.027	0.23	0.02	0.22	0.004	37.532	1.225	0.615	⑤
2.47	2.46	1.14	0.607	0.58	12.16	0.04	0.043	0.31	0.10	0.10	0.004	40.407	1.309	0.394	
2.51	3.71	—	—	1.00	19.77	0.07	0.038	0.22	0.03	0.33	0.008	18.31	0.450	0.486	⑥
3.01	3.79	—	—	0.97	18.57	0.05	0.041	0.087	0.06	0.17	0.006	27.22	0.681	0.464	
1.46	2.87	—	—	0.80	16.03	0.08	0.037	0.24	0.05	0.33	0.011	15.12	0.302	0.321	
4.84	4.63	—	—	1.09	19.30	0.10	0.043	0.13	0.38	0.49	0.009	34.64	1.207	0.673	
2.79	2.64	—	—	0.79	15.03	0.08	0.064	0.36	0.15	0.33	0.005	26.61	0.649	0.367	
3.39	4.18	0.90	0.29	0.92	20.94	0.04	0.052	0.14	0.02	0.24	0.025	38.71	1.392	0.753	⑦
3.96	3.74	0.36	0.17	0.74	16.54	0.03	0.040	0.16	0.08	0.19	0.026	38.58	1.206	0.517	
0.58	2.10	0.01	Nil	0.59	11.14	0.04	0.035	0.17	0.10	0.22	0.023	8.34	0.148	0.197	⑧
1.99	0.60	—	—	0.10	0.37	0.01	0.034	0.29	0.20	0.014	0.005	21.16	0.362	0.006	⑨
1.24	0.63	—	—	0.15	0.63	0.01	0.021	0.18	0.09	0.011	0.004	26.65	0.494	0.012	
1.70	0.80	—	—	0.07	0.35	0.01	0.040	0.16	0.12	0.006	0.005	23.54	0.429	0.006	
2.87	0.84	—	—	0.12	0.58	0.02	0.035	0.34	0.06	0.018	0.004	29.32	0.568	0.011	
0.96	0.41	—	—	0.08	0.39	0.01	0.047	0.11	0.69	0.007	0.008	20.57	0.403	0.008	
2.19	2.82	0.96	0.60	0.57	11.14	—	0.023	—	—	0.160	—	31.55	0.748	0.264	⑩
2.85	4.02	1.38	0.50	0.72	15.10	—	0.045	—	—	0.270	—	39.83	1.501	0.569	
2.36	3.24	0.88	0.64	0.70	13.40	—	0.050	—	—	0.206	—	29.89	0.723	0.324	
3.76	3.00	1.34	1.80	0.50	10.87	—	0.028	—	—	0.164	—	54.45	2.437	0.487	
1.28	1.82	0.34	0.38	0.42	10.50	—	0.132	—	—	0.166	—	28.08	0.734	0.274	
2.60	3.12	0.60	0.60	0.76	14.46	—	0.034	—	—	0.186	—	34.99	1.019	0.421	

①⑩ 大澤正己表面採取

② 大分県教育委員会「安宇遺跡」(「中津市伊藤田地区遺跡群」, 1987)

③ 結城明孝「国東半島の製鉄と銅冶の遺跡」『国東半島』～自然・社会・教育～大分大学教育学部 1983. 3. 31

なお、Table 2の国東半島出土鉄滓の化学組成は下記の発表資料である。

藤本啓二・大澤正己「国東半島における古代・中世の鉄生産について」

『九州史学会大会研究発表要旨』1991. 12. 7 九州大学

表6 鉄滓、砂鉄の分析結果

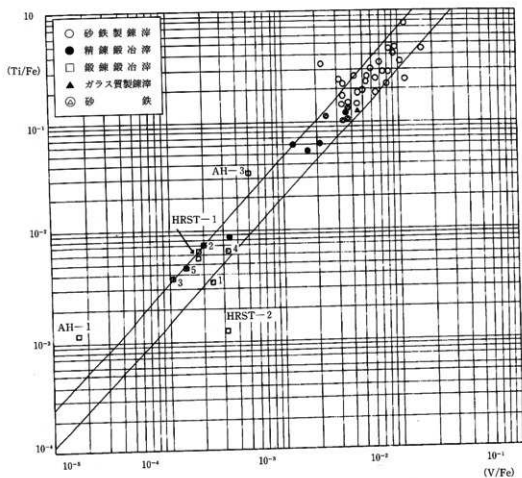
符号	遺跡名	区分	全鉄 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)
R-91	臼杵石仏群地域	鍛錬鍛冶滓	52.62	Trace	55.50	13.55	22.69	3.67	1.61
T-No1	国東町下成仏字天神	精錬鍛冶滓	49.03	—	56.44	7.38	19.56	6.34	—
2R-6	宇佐市野森窯跡	製錬滓 (ガラス質)	14.69	0.42	8.19	11.30	37.26	20.67	2.70
YO	杵築市大内・吉川氏宅	製錬滓	13.26	—	12.58	5.87	29.08	13.46	15.06
D	国東半島重藤海岸	砂鉄	55.21	—	24.40	51.82	1.58	2.59	—
備考 値	下毛郡大新田一帯海岸	〃	54.11	—	32.85	40.86	3.46	2.60	0.71
	〃 大橋村東浜部	〃	57.74	—	28.54	50.85			
	国東・南糸原赤壳	製錬滓	40.86	0.99	47.69	4.04	14.16	7.30	1.12
	国東・武蔵町草場	〃	36.99	1.39	40.74		22.00	7.81	6.58
	国東町末浦工寺B	鉄滓	46.51				16.60	11.85	Trace
	国東町野田行平タカラ屋敷	〃	41.26				23.70	14.04	1.40
	国東町下成仏虚空蔵A	〃	35.46				20.75	23.60	1.40
	〃	〃	28.45				25.10	25.40	2.80
	国東町末浦下長塩尻	〃	27.90				43.70	11.44	2.80
	国見町赤根タラガ迫	〃	11.73				59.70	20.06	1.54
	国東町下成仏虚空蔵A	〃	8.71				61.65	22.51	0.65
	国見町赤根タラガ迫	〃	5.71				68.05	21.68	0.28

註

- A. 後藤宗俊・渋谷忠章・菊田徹「臼杵石仏群地域遺跡」Ⅲ (昭和53年度発掘調査概報) 臼杵市教育委員会 1978
- B. 中山光夫氏表面採取品
- C. 小倉正五「野森窯跡の調査」『鶴見古墳—宇佐地方の裝飾横穴・赤塚石棺・野森窯跡—』(宇佐市文化財報告書 第1集) 1975
- D. 長谷川熊彦「砂鉄」技術書院 1963
- E. 窪田蔵郎「鉄の考古学」雄山閣 1973
- F. 和島誠二「鉄器の成分」『月の輪古墳』近藤義郎編 月の輪古墳刊行会 1960

酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造 滓 成 分	造 滓 成 分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	註
0.69	0.12	0.57	0.01	0.012	0.25	0.21	0.01	0.002	28.66	0.545	0.011	A
1.76	0.22	4.82	0.018	0.035	0.415	0.14	0.067	0.001	27.66	0.564	0.098	B
1.88	0.37	3.26	0.018	0.277	0.240	0.060	0.067	0.0082	62.51	4.255	0.222	C
4.49	1.08	16.98	0.027	0.013	0.859	0.24	0.165	0.002	62.09	4.683	1.281	B
2.15	0.62	16.71	0.024	0.008	0.220	0.05	0.189	0.001	—	—	—	B
2.75	0.82	17.38		0.070	0.155			0.026	—	—	—	D
		9.71					0.208		—	—	—	D
0.20	0.67	16.00	—	0.048	0.239	—			22.78	0.558	0.392	E
3.38		10.18							39.77	1.075	0.275	E
4.56		Trace							33.01	0.709		F
1.81		#							40.95	0.992		F
3.50		#							49.25	1.389		F
5.92		#							59.22	2.082		F
2.20		#							60.14	2.156		F
1.95		#							83.25	7.097		F
2.74		#							87.55	10.052		F
1.81		#							91.82	16.080		F

造滓成分=SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO



第20図 大分県出土製鉄関連遺物のTiとVの相関図

1～5：安平遺跡出土鉄滓（Z 881～Z 885に対応する）

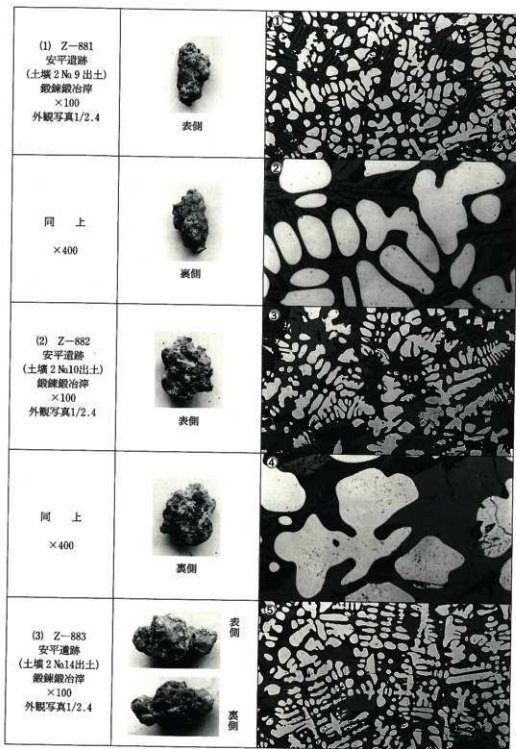


Photo.1 鉄滓の顕微鏡組織

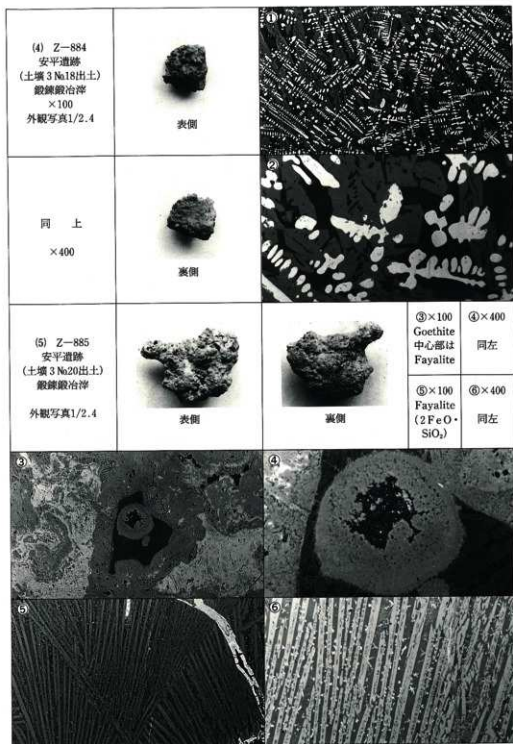


Photo.2 鉄滓の顕微鏡組織

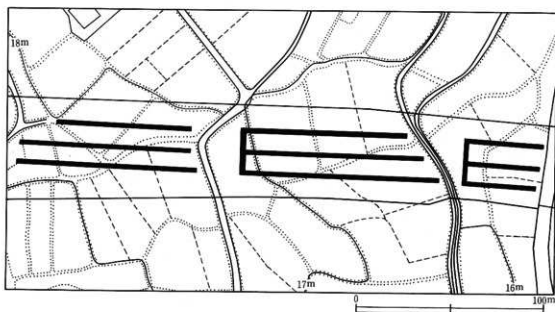
第2節 居屋敷地区

居屋敷地区は、東を城山丘陵、西を寺迫丘陵に挟まれた谷の平野部に位置する。標高18m前後となっている。寺迫丘陵の緩斜面に位置する安平遺跡と東接する範囲である。城山丘陵側は城山窯跡群・城山横穴墓群の隣接地の平坦面であるため、当初は灰原・工房跡・集落など窯の関連遺構の存在が想定されていた。調査対象範囲は6000m²であった。

調査は、2m幅のトレンチを調査区全域を網羅するように、11本設定し、重機による試掘を実施した。土層の堆積状態は、上層から1) 灰褐色土層(耕作土)、2) 粗粒黄褐色土層(床土)、3) 黄褐色粘質土層、4) 明灰色土層、5) 混礫茶褐色土層、6) 暗青灰色粘土層、7) 礫層となっており、最下層約1mであった。ほとんどのトレンチにおいてこのような層序を確認した。

遺物は、耕作土中などから中・近世の土器細片が出土したが明確な遺構や包含層をしめすものではなかった。

したがって、居屋敷地区の調査対象地においては遺構の存在は確認していない。



第21図 居屋敷地区トレンチ配置図および周辺地形図

第3節 城山遺跡

城山遺跡は、城山丘陵の先端からやや谷奥部方向に入った部分に位置する。標高20m~30m、西向き斜面での傾斜角10度前後である。この丘陵には、西向き斜面側に城山窯跡群、城山横穴群、東斜面側に草場窯跡群などが所在しており、とくに窯業関連遺跡の集中が顕著な地区として知られている。

調査は、対象地全域について重機で表土剥ぐことから始め、人力により遺構の確認調査を行った。

調査の結果、土坑、ピットをそれぞれ1基確認した。土坑は調査区東側の中央寄りに検出した。大きさは長辺2.1m、短辺1.4m、深さ0.5mで、長方形を呈していた。土坑内部には漆喰が塗布されていた。ピットは一辺0.9m、深さ0.35mの方形を呈していた。土坑、ピットともに出土遺物は確認されていない。したがって遺構の時期は不明である。

ただ、この地区は現在伊藤田窯跡群の中でも最も窯の集中するところであり、今回の調査でも窯の存在が想定されていたが、窯に関する遺構を確認することはできなかった。このことは、丘陵先端付近の状況は不明ながら調査地区以南に濃密な窯の分布が確認されていることからみて明らかにこの付近が窯の分布を区画する空白地帯になっているものといえる。周辺丘陵の築窯の状況を見ると谷の先端から奥にかけての展開が一般的であり、城山遺跡に関しては別の規制の働いたことが想定される。



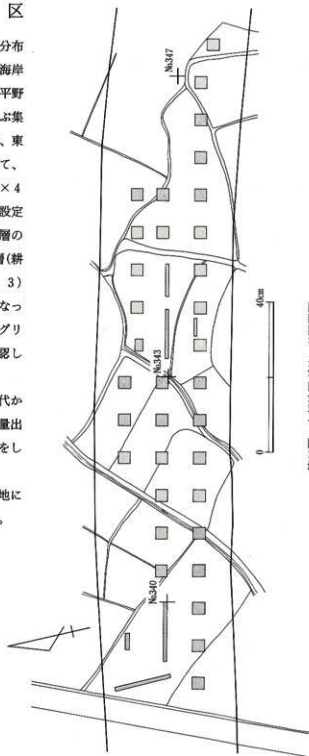
第22図 城山遺跡および周辺地形図

第4節 木部地区

木部地区は、南に伊藤田窯跡群が分布する丘陵となっており、これ以北は海岸まで平野が広がる。調査対象地区は平野部となっており、当初各時代におよぶ集落の存在が想定されていた。調査は、東西180m、南北30mの範囲を対象として、4m～16mのトレンチを6本、4m×4mのグリッド34を調査区全域に11本設定し、人力による試掘を実施した。土層の堆積状態は、上層から1) 灰褐色土層(耕作土)、2) 粗粒黄褐色土層(床土)、3) 黄褐色粘質土層、4) 明灰色土層となっていた。ほとんどのトレンチおよびグリッドにおいてこのような層序を確認した。

遺物は、耕作土中などから弥生時代から中・近世におよぶ土器の細片が少量出土したが明確な遺構や包含層の存在をしめすものではなかった。

したがって、この地区の調査対象地においては遺構はないものと思われる。



第23図 木部地区グリッド配置図

第5節 大根川遺跡

遺跡は北西から南東方向に380mにわたっており、便宜上北西からA、B、C、Dの各地区に区分した。(第24図)

A地区(第25図・26図)

検出した遺構は溝2条、土坑、ピット列である。

溝1は、調査区内での長さ18m、幅1.1m~1.7m、深さ0.45m~0.55mである。断面形は逆台形を呈している。溝内の土層は8層に区分でき上層より、1)混黄褐色土小ブロック・マンガン粒、硬質灰褐色土層、2)混マンガン粒、粘質暗灰褐色土層、3)混マンガン粒、粘質黒灰色土層、4)混マンガン粒、淡褐色土層、5)混黄褐色土小ブロック・マンガン粒、暗灰褐色土層、6)粘質暗灰色土層、7)黄褐色土・粘質暗灰色土ブロック層、8)混マンガン粒粘質灰褐色土層となっている。

溝2は、確認長17m、幅1.0m~1.3m、深さ0.35m~0.45mである。断面形は溝1と同様に逆台形である。2条の溝は北西に隣接する五十石川と並行しており、南から北方向へと傾斜して伸びる。また南半部で小溝が接続する。

出土遺物には14世紀後半~15世紀の土師質土器などがある。

土坑は4基を確認した。規模は1.2m~2m×0.6m~1.3mで、深さは浅く0.1m程度である。平面形は不整形円形を呈する。

ピットは約200確認された。これらは0.3m~1m×0.2m~0.4m、深さ0.1m~0.2mである。平面形は円形および楕円形を呈している。

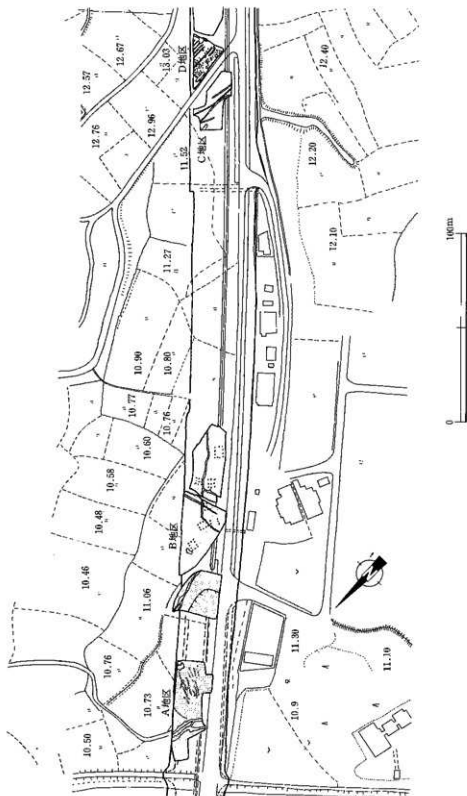
これらのピットは特徴のある配列をもつ。つまり東西方向に緩く湾曲して列をなす。ピットは7列を確認でき、南側の谷の縁辺に配列されている。ピット内には柱痕跡を残す例が若干みられるが、建物を示す配置とはなっていない。したがって杭列を伴うことも考慮すべきであるが類似する例から「道状遺構」の可能性を考えておきたい。

この遺構は古代の勅使街道に想定される位置にあるが、限られた調査範囲と遺物の僅少さからこれとの関連を積極的に示すことはできない。なお類例として、日田市上野第1遺跡野間地区で検出された8世紀前葉の道状遺構がある。

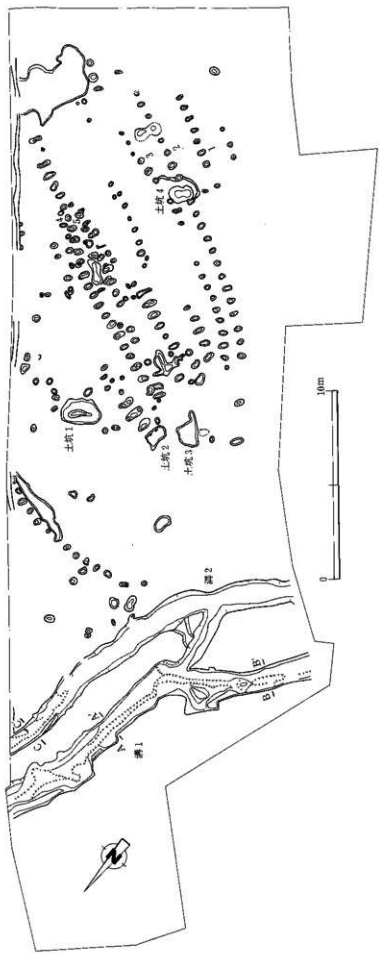
出土遺物(第27図)

出土遺物はほとんどが溝から出土したもので大半は磨滅した小破片であった。このうち7点について図示した。このうち、2が溝1・2出土の破片が接合したもので、ほかは溝2から出土した。

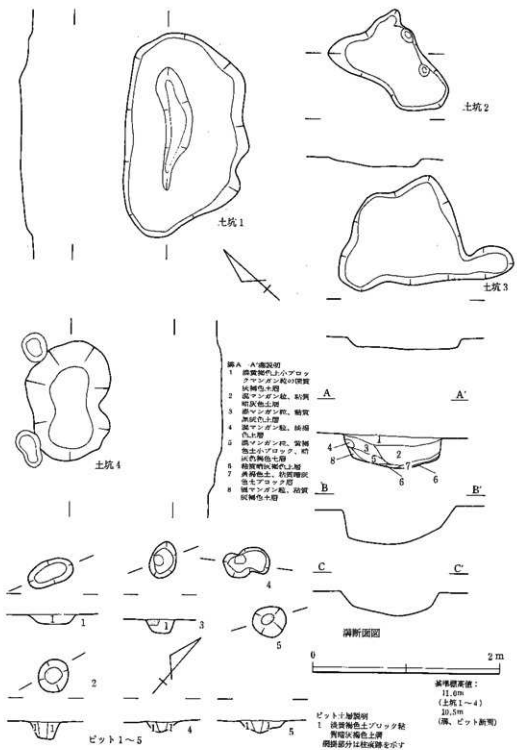
1は細頸壺の口縁~頸部の残欠である。大きさは口径7.4cm、現存高4.4cmである。胎土は砂粒を微量含み、焼成は良好で堅緻、色調は灰褐色を基調とするが口縁の内外面に黒褐色の自然釉



第24図 大根川遺跡各地区位置図

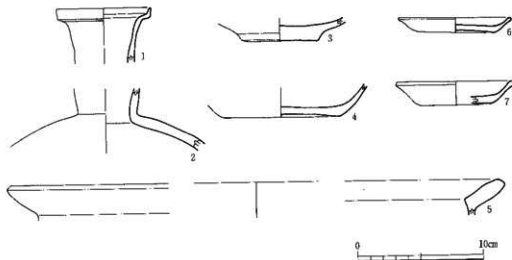


第25図 大槻川遺跡A地区遺構分布図



第26図 大根川遺跡A地区土坑、ピット、溝1、2断面図

が付いている。2は細頸壺の頸部～肩部の破片である。1と同一個体になると思われる。胎土は砂粒を微量含み、焼成は良好で堅緻、色調は灰褐色を基調とする。肩部外面に被熱し白色化した自然釉と焼成時に融着した付着物がみられる。底径6cmである。3は須恵質の小形品である。底部は回転糸切りで切り離され、板状の圧痕が僅かに残る。大きさは底径6cmである。胎土は砂粒を若干含み、焼成は堅緻であるが、半還元状態となっている。色調は灰白色を呈す。4は須恵器環で口縁部を欠失する。体部下端は丸みを帯び口縁に向かって緩く立ち上がる。底部は回転糸切りで切り離され、板状の圧痕が残る。大きさは底径9.6cmである。胎土は角閃石粒・砂粒を若干含み、焼成は通有で、灰褐色を呈す。5は土師器壺の口縁破片である。口縁はくの字状に屈曲する。器壁は肥厚し、端部に平坦面をもつ。6・7は土師質土器の小皿である。6は1/2個体を残す。口縁部は端部でやや丸みを帯び、体部は底部に比べ器壁が薄い。大きさは口径8.6cm、器高1.2cm、底径6.4cmと低い形態をもつ。底部は回転糸きりと板状圧痕が僅かに認められる。胎土は細砂を微量含み、焼成は通有で、淡黄褐色を呈す。7は1/4個体を残す。口縁部は端部で肥厚し丸みを帯びる。大きさは復元口径8.8cm、器高1.8cm、復元径6cmとやや器高の高い形態をもつ。胎土・焼成・色調は6とほぼ同様である。出土土器の時期は須恵器(1・2)が8世紀後半以降、土師質小皿は14世紀後半～15世紀に比定できる。このうち7は溝の底面付近の出土であり、溝の時期を示す可能性が高い。



第27図 大根川遺跡A地区出土遺物実測図

B地区 (第29図～第35図)

A地区の南東部に位置する。確認された遺構は、掘立柱建物9棟、溝4条、他に不整形の落ち込み、ピットなどがある。

掘立柱建物は調査区のほぼ全域に広がる。建物の柱間は、2間×3間が6棟、2間×2間が3棟で内2棟は総柱の建物である。主軸方位からみた建物のグループは、建物1・2・6、建物3・5、建物8・9、建物7の4群に纏まる。

掘立柱建物の規模は以下のようになる。

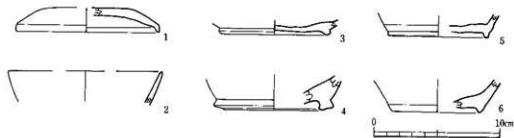
建物1	2間 (3.3m) × 3間 (4.3m)、柱穴径0.2m～0.3m、柱穴の深さ0.3m～0.4m
建物2	2間 (3.1m) × 3間 (4.6m)、柱穴径0.3m～0.4m、柱穴の深さ0.2m～0.3m
建物3	2間 (3.3m) × 3間 (4.5m)、柱穴径0.4m～0.5m、柱穴の深さ0.2m～0.3m
建物4	2間 (3.6m) × 3間 (5m)、柱穴径0.3m～0.4m、柱穴の深さ0.2m～0.3m
建物5	2間 (3.1m) × 3間 (4.2m)、柱穴径0.3m～0.4m、柱穴の深さ0.2m～0.3m
建物6	2間 (3.6m) × 2間 (?), 柱穴径0.2m～0.3m、柱穴の深さ0.1m～0.15m
建物7	2間 (2.7m) × 2間 (2.9m)、柱穴径0.25m～0.35m、柱穴の深さ0.25m～0.4m
建物8	2間 (3.2m) × 2間 (3.8m)、柱穴径約0.4m、柱穴の深さ約0.3m
建物9	2間 (4.1m) × 3間 (5.3m)、柱穴径0.2m～0.3m、柱穴の深さ0.1m～0.3m

溝は南北方向に伸びる溝1・4、南東から北西方向に伸び、北西部で西に曲がる溝2・3がある。このうち溝1は溝2を、溝3は溝4を切断して造られている。

出土遺物 (第28図)

この調査地区の出土遺物は僅少であった。6点を図示できた。このうち、2が建物5の柱穴から、ほかは溝3から出土したものである。

1は須恵器蓋の口縁部～天井部破片で鈕を欠失する。天井部はやや高く口縁部は短く折れる。大きさは復元口径11.2cm、天井部の高さ3cmである。胎土には細砂を若干含む。焼成は良好で



第28図 大根川遺跡B地区出土遺物実測図

暗灰褐色を呈す。

2は須恵器環口縁部～体部の小破片である。体部は直線的に立ち上がるものと思われる。器壁は薄い。胎土には細砂を微量含む。焼成はやや不良で淡灰褐色を呈す。3、5、6は須恵器高台付環の底部付近破片である。

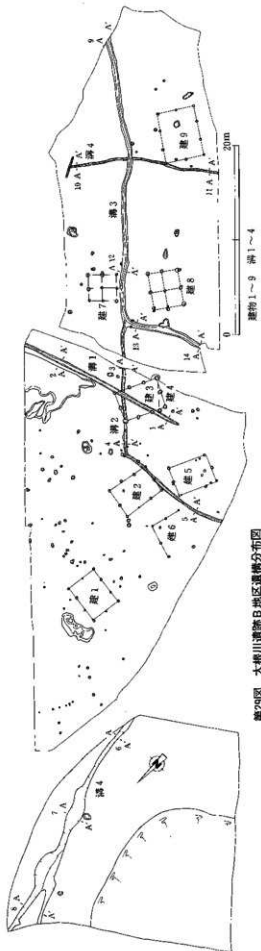
3は高台が体部下端に付き、低く丸みを帯びた形態を呈す。高台径は8.3cmである。胎土には砂粒を若干含む。焼成は良好で灰褐色を呈す。

5は短い高台が体部下端に付く。胎土には砂粒をほとんど含まない。焼成は良好で灰褐色を呈す。

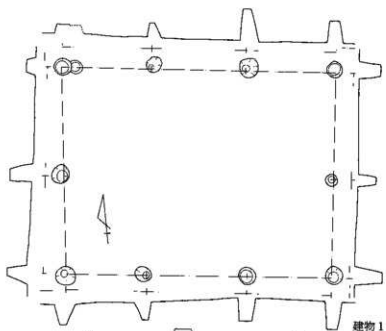
6は高台が体部下端で明瞭な境をもたずに口縁部に向かって直線的に立上ると思われる。胎土に角閃石粒を含む。焼成は良好で灰褐色を呈す。

4は壺の底部破片である。高台は低く両端がやや肥厚し、内縁部が接地する。底部の器壁は厚い。高台径は9.5cmである。胎土には砂粒を多量含む。焼成は良好で暗灰褐色を呈す。

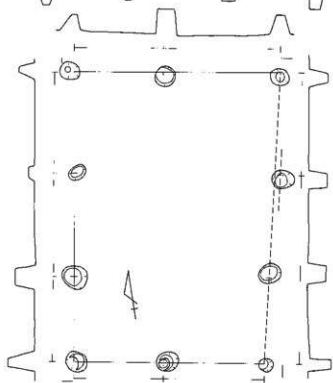
出土した遺物は8世紀前半から9世紀代におよぶものである。したがって溝はこれ以降に掘削されたものといえよう。また時期については、建物5が柱穴出土土器から8世紀後半～9世紀代と考えられる。



第29図 大槻川遺跡B地区遺構分布図



建物1

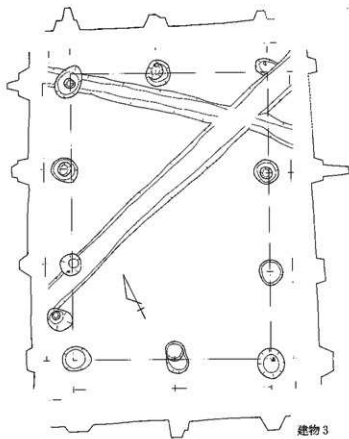


建物2

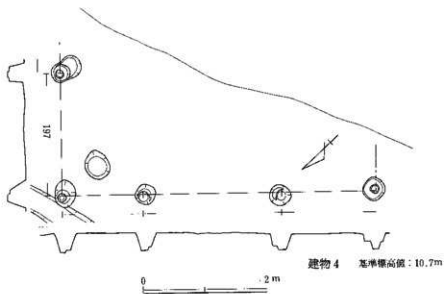


基準標高値：10.7m

第30図 大根川遺跡B地区建物1, 2実測図

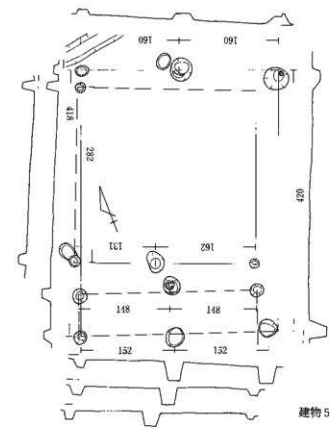


建物3

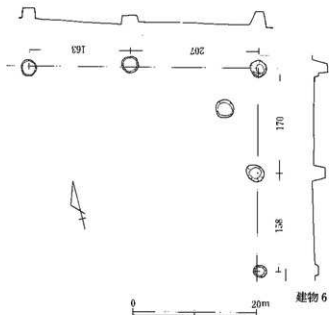


建物4 基準標高値: 10.7m

第31図 大槻川遺跡B地区建物3、4実測図



建物 5

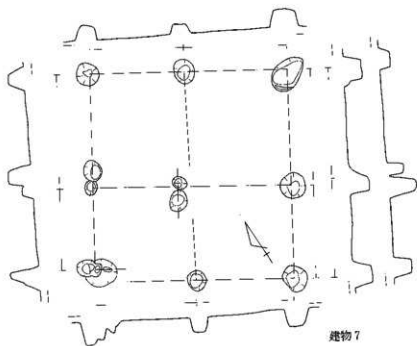


建物 6

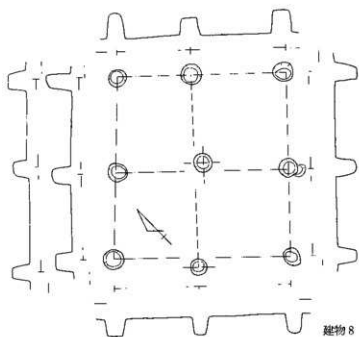
0 20m

第32図 大根川B地区遺跡建物5, 6

基準標高値：10.7m



建物7

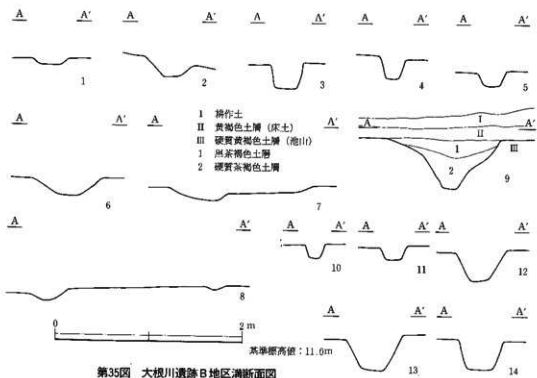
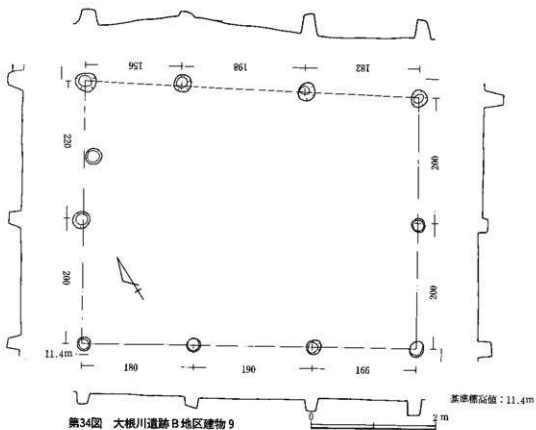


建物8

基準標高値：11.4m



第33図 大根川遺跡B地区建物7, 8



C地区 (第36図・37図)

調査の結果確認された遺構は、溝3条、畦状の高まりなどである。溝は南東から溝1、2、3と位置し、溝1と溝2の間に畦状の高まりがある

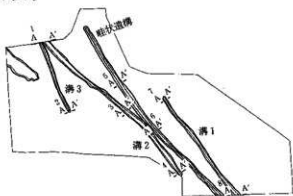
溝1は、確認長13m、幅約0.5m、深さ約0.2mで、南から北へ伸びるが北端部は削られている。

溝2は、確認長20m、幅約0.6m、深さ約0.25mで、北から南へ伸びるが南端部は削られている。

溝3は、確認長8m、幅約0.4m、深さ約0.17mで、北から南へ伸びるが南端部は削られている。

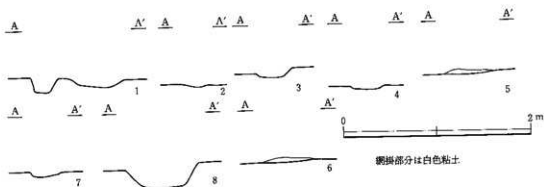
畦状の高まりは溝1と並行し南北方向に構築されている。規模は確認長23m、幅約0.7mである。高まりは白色粘土を0.05mほど盛って形成されている。

遺構の時期については、溝2が底面から出土した土師質土器からみて12世紀代に比定できるものの、ほかは不明確である。



0 20m

第36図 大根川遺跡C地区遺構分布図



0 2m 畦状部分は白色粘土

第37図 大根川遺跡C地区溝、畦状遺構断面図

出土遺物 (第38図)

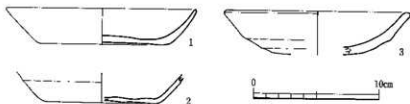
この調査地区の出土遺物は少なく3点を図示した。このうち、1・2が溝2から、3は調査区北端部から出土したものである。

1・2は土師質土器の坏である。1は口縁部の大半を欠くが形態はほぼ確認できる。体部は丸みをもつ下端から緩く内湾気味に立ち上がる。調整は体部にナデが施されている。底部は回転糸切りの痕跡が残る。大きさは口径15cm、器高2.9cm、底径10cmである。胎土に砂粒を若干含み、焼成は脆弱で不良であり、淡黄褐色を呈する。

2は底部付近の破片である。体部は下端部が丸みをもつ。底径は9cm程である。

3は瓦質土器の塊の口縁部～底部の破片である。体部は緩く内湾気味に立ち上がり、浅い器形となっている。器壁は厚く、体部外面の中段に稜をもつ。底部は完存しないため高台の有無は不明であるが、恐らく無高台と思われる。胎土に角閃石粒を若干、白色砂粒をやや多量に含む。焼成は堅緻であるが、口縁部が淡黄褐色、体部は暗灰色を呈す。

出土遺物の時期は、1・2が12世紀代、3は14世紀後半に比定できよう。



第38図 大根川遺跡C地区出土遺物実測図

4 D地区

D地区は市道や農道を避け、I～III区に分けて調査を行った。その結果、西端のI区で東西方向に延びる溝や土坑、ピット群で構成される比較的高密度の部分を確認した。しかし、II・III区は土坑などが検出されたものの遺構密度は低い。さらに、III区は東側に隣接する向野遺跡兵後畑地区との連続性が観察された。このため、I区を大根川遺跡の東端と考え、II区の西半分の無遺構部分を境にII・III区を向野遺跡の西端の遺構群ととらえた。

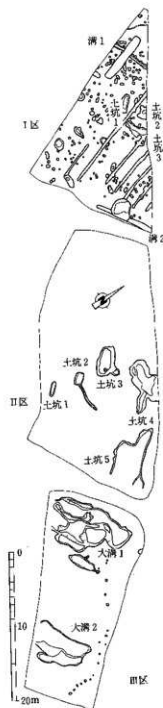
そこで、大根川遺跡D地区の遺構を見ると、溝1の方向はほぼ東西方向で、両端は調査区外に延びている。規模は長さ5m、幅0.5m、深さも0.5mである。また溝2は溝1に比較するとやや北側に傾き、西端が切れ、東側は調査区外に延びている。検出された規模は、長さ8m、幅0.5mであるが、深さは0.05mと浅い。

調査区内での大型の掘り込みを土坑とし、柱穴状のピットと区別した。土坑は3基確認した。土坑1は南北方向の細長い掘り込みで、長さ2.6m、幅1m、深さ0.3mである。土坑2は一部が調査区外に延びており、形態は不定形で最大幅は1.6m、深さは最深部0.8mである。土坑3も、一部が調査区外にかかるが、長さ3m、幅0.8m、最深部は0.5mである。これらの遺構からは、弥生時代から中世にいたる土器片が出土している。

柱穴状のピットは、調査区の全面で検出された。その規模や深さには規格性や方向性などは認められず、検討した結果でも掘立柱建物を確認することは出来なかった。

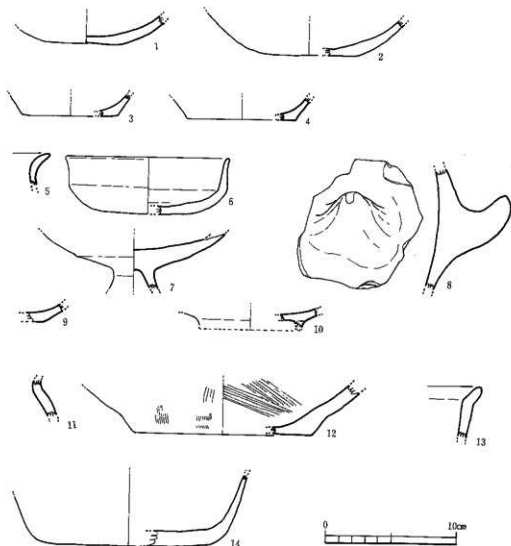
なお、調査区内に認められる南北方向の7条の溝は近世以降に刻まれたものである。

第40図に図示した土器はD地区の各調査区から出土

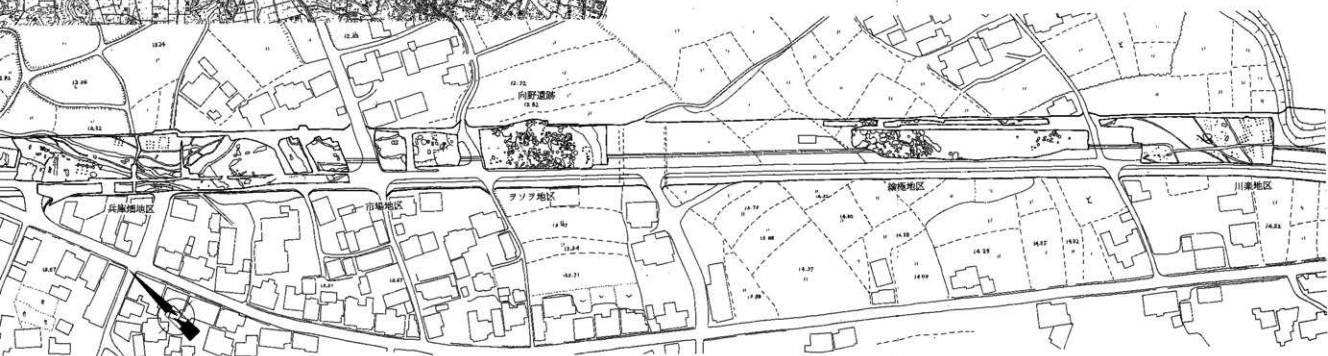


第39図 大根川遺跡D地区遺構配置図

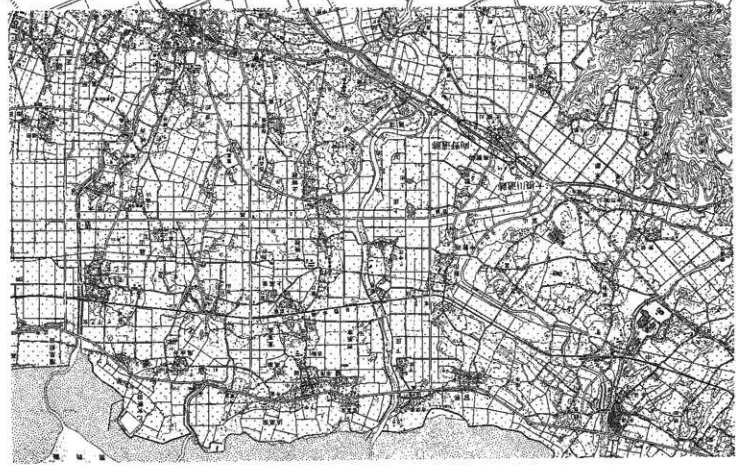
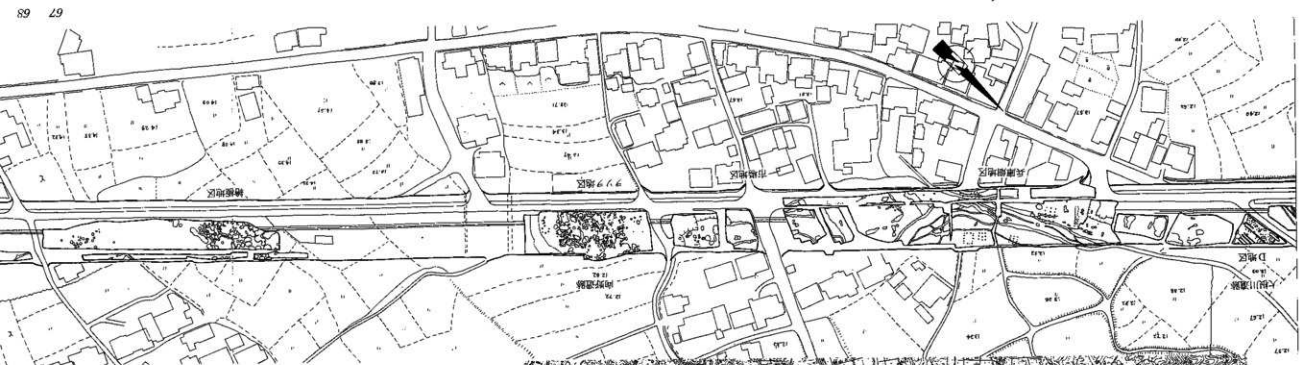
したものである。1・2の底部は1区の土坑1からの出土である。器面調整は撫で仕上げで、両者とも平底から丸底化する過渡期的な様相を示す。弥生時代後期後半のものである。3・4は土坑3出土で、残された部分は撫で調整しか観察出来ないが、土師質土器の坏の可能性が高い。5は甕形土器の口縁部で、胎土に角閃石を多く含み、撫で仕上げである。6は口径12.2cm、器高4.3cmの坏である。器面は横撫でで、底面には板状の圧痕が付いている。7は須恵器の高坏である。胎土に石英を含む。8は甕の把手で、内面には縦方向の削り状の撫でが認められる。9は須恵器の底部である。10は小破片であるが高台付きの底部である。11は甕形土器の胴部と考えられる。12は内外面に鋭い刷毛目状の器面調整がある大型の甕形土器の底部である。13は口縁部が屈曲する土器で器形は不明である。14は底面が回転篋削りで、他は撫で仕上げである。



第40図 大根川遺跡D地区出土土器実測図



第41图 向野道各調基地区位置图



第6節 向野遺跡

宇佐市南敷田には広範囲に遺物が散布することが知られており、向野遺跡と呼ばれていた。ところが、この遺跡の中央部分を通過する国道10号線が中津バイパス建設工事の一部として、北側に拡張することになった。そこで、向野遺跡の発掘調査を行ったが、遺跡が広範囲にわたり、しかも微地形が、微高地と低湿地が連続して繰り返すことがわかった。このため遺構の所在する部分のみを調査を行い、それぞれ、西側から兵後畑地区、市場地区、ヲソヲ地区、繪極地区、川楽地区と小字名を冠し区別を行った。(第41図参照)

調査は、昭和63年度から平成元年度にかけて兵後畑地区・市場地区・ヲソヲ地区・繪極地区・川楽地区の調査を行い、平成2年度に兵後畑地区と市場地区の残りの部分の調査を行い終了した。以下各地区の報告を行うが、調査当時の地区名を遺構の連続性から考えて一部変更を行った。

1 兵後畑地区

(1)遺跡の立地

一見平坦に見える宇佐平野もよく見ると、ほぼ南北に延びる微高地と低湿地が交互に繰り返されており、低湿地の始まる部分には灌漑用の池も構築されている。また、微高地には弥生時代から中世にかけての遺物が散布していることが多く、遺跡が立地する場所として良く知られている。兵後畑地区と隣接する市場地区もこうした微高地上に立地し、標高は約13mである。そして掘立柱遺構や井戸・墓地などの生活の痕跡が残されている。

一方、この地区を挟む東側と西側は低湿地となっており、試掘の結果も住居跡や貯蔵穴などの生活遺構は検出されなかった。おそらく、弥生時代以降は水田などの生産の場所として活用されていたものと推定できる。

(2)調査の経過

調査は、昭和63年から平成元年にかけて兵後畑地区Ⅰ区の調査を行い、隣接する市場地区Ⅰ～Ⅳ区の調査も行った。そして、平成2年度に兵後畑Ⅰ区の西側に連続する部分を兵後畑地区Ⅱ区として調査をおこなった。さらに、国道10号線の路線付け替え工事を行ったあと、現状の道路下の調査も実施した。そうした結果、兵後畑地区の遺構の広がり、兵後畑地区のⅠ・Ⅱ区と南側の現道部はもとより、市場地区Ⅰ地区とした場所まで連続して続くことが判った。そこで、兵後畑地区は、平成3年3月に刊行した概報の兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区と市場地区Ⅰ区までとする。そして、市場地区Ⅰ地区の東側が遺構希薄地帯となっており、ここで市場地区との線引を行う。

(3)調査の成果

兵後畑地区は約5600m²の範囲の調査を実施した。その結果、弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺構と遺物を検出した。弥生時代の遺構は弥生中期の墓地とそれに伴う祭祀遺構、弥生後期の土坑である。古墳時代の遺構は明確でないが、遺物が包含層から出土している。そして、主体となるのが古代の溝と掘立柱建物群である。

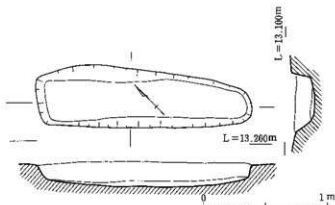
1) 弥生時代

兵後畑地区において、土坑墓は9基検出した。その内の7基(1~5・7・9号)は主軸を東西方向に取り、他の2基(6・8号)は主軸を南北方向に取る。両者ともに列状に並んでいる。このような土坑墓の配置は地形等に制約されているものではなく、その被葬者の生前における集団間の差などによるものと考えられる。であれば兵後畑地区の土坑墓群はその方向や立地により1・2・5号と3・4・9号および6・8号の3グループに分けられよう。

(a)土坑墓

1号土坑墓

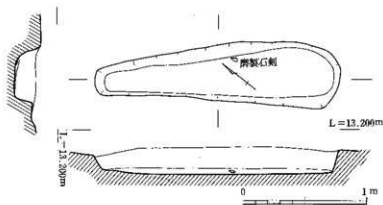
調査区をやや西側の中央に位置する。主軸はN-45°-Wである。上部は削平を受けておりその構造は不明である。内法は床面で長さ162m、深さ15cm、幅は底面西小口で31cm、東小口で17cmを測り、西小口が広いことから頭位は北西方向と考えられる。これらの規模から成人用土坑墓と考えられる。遺物は出土していない。



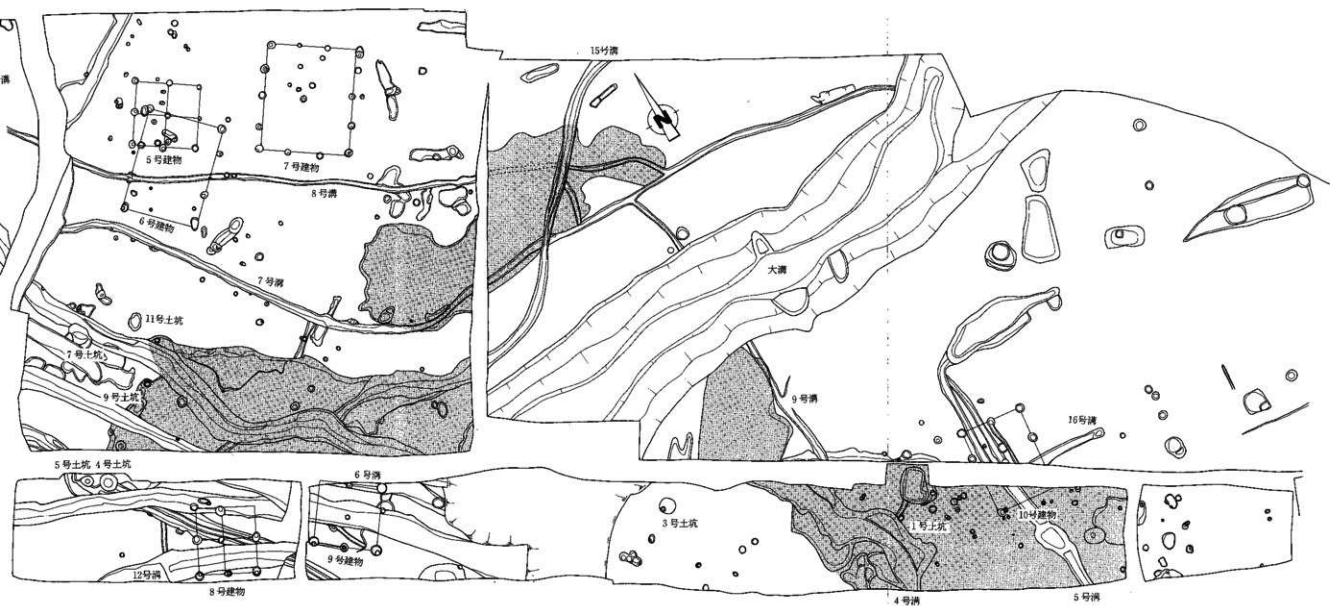
第42図 向野遺跡兵後畑地区1号土坑墓実測図 (S = $\frac{1}{30}$)

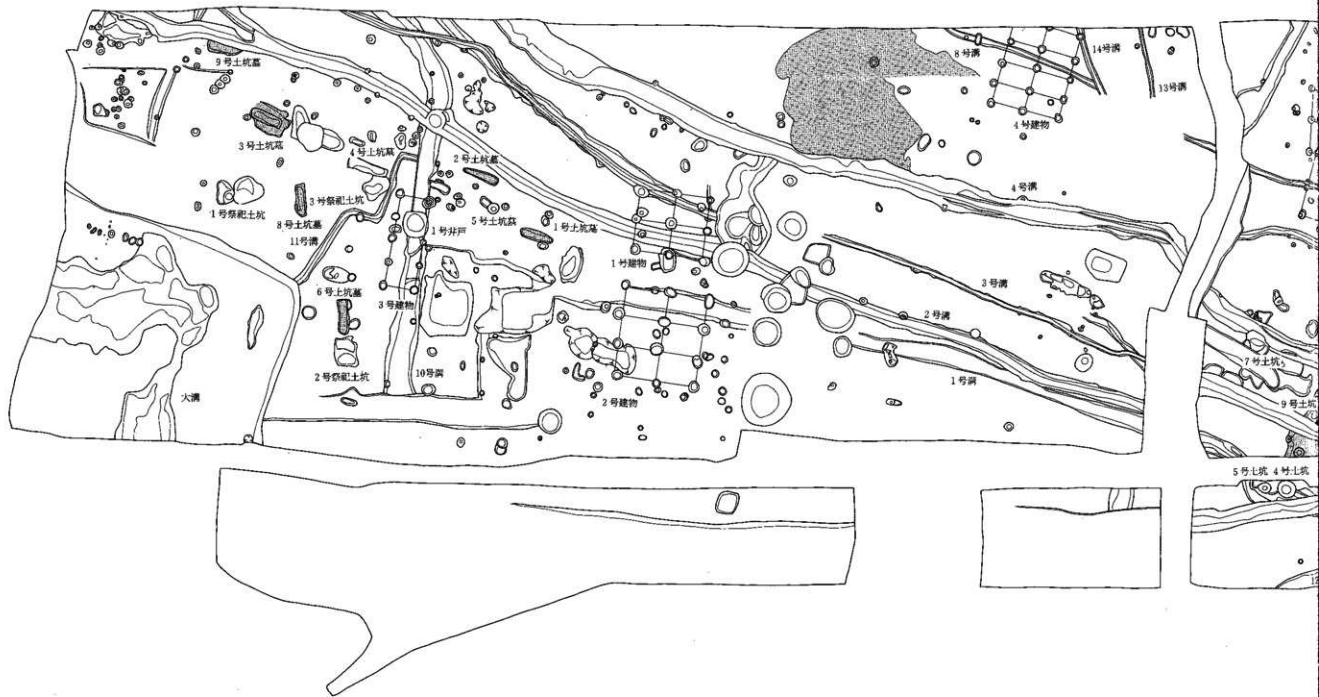
2号土坑墓

調査区のほぼ中央北側に位置する。主軸はN 40°-Wである。上部は削平を受けておりそ



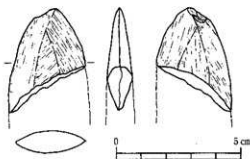
第43図 向野遺跡兵後畑地区2号土坑墓実測図





第44图 向野遺跡兵後畑地区遺構配置图

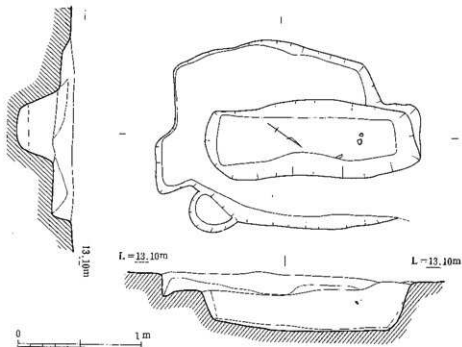
の構造は不明である。内法は床面で長さ185cm、幅は底面西小口で14cm、東小口で35cm、深さ22cmを測り、東小口が広いことから頭位は東南方向と考えられる。これらの規模から成人用土坑墓と考えられる。出土遺物は、中央北側の床面直上で磨製石剣の先端部を1点検出した。この磨製石剣はその形状から硬い障害物にあたった結果、先端部で折れ、さらにその剣先に強い圧力が加かったため剥離したものと考えられる。また出土状態は剣先が土坑の内側を向いている所から人体の右腰骨付近に刺さっていた可能性もある。



第45図 向野遺跡兵後畑地区2号土坑墓出土石剣尖実測図

3号土坑墓

調査区の西側に位置する。主軸はN・45°・Wである。残存状態がほぼ良好な二段掘りのものであるが、一段目墓坑の北西側は削平を受けている。墓坑は上面で長さ200cm以上、幅145cm前後の方形を呈すると考えられる。土坑は墓坑に対して平行に掘られている。内法は床面で長さ

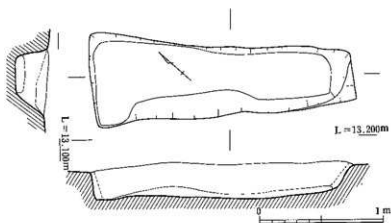


第46図 向野遺跡兵後畑地区3号土坑墓実測図

145cm、幅は底面西小口で25cm、東小口で40cm、深さ30cmを測り、東小口が広いことから頭位は東南方向と考えられる。出土遺物は、埋土上層で弥生土器片が3点出土した。

4号土坑墓

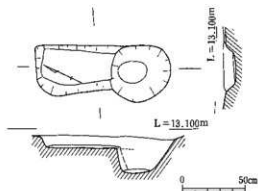
調査区のほぼ中央北側に位置する。主軸はN-42°-Wである。上部は削平を受けておりその構造は不明である。内法は床面で長さ190cm、幅は底面西小口で66cm、東小口で26cm、深さ27cmを測り、西小口が広いことから頭位は北西方向と考えられる。これらの規模から成人用の土坑墓と考えられる。遺物は、出土していない。



第47図 向野遺跡兵後畑4号土坑墓実測図 (S = $\frac{1}{30}$)

5号土坑墓

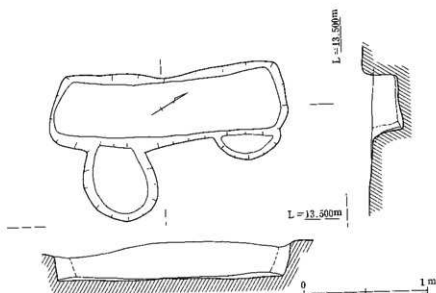
調査区のほぼ中央、1号土坑墓の北側1.5mの所に位置する。主軸はN-25°-Wである。上部は削平を受けておりその構造は不明である。内法も東南側がピットによって削平されている。床面で長さ57cm以上、95cm以下、幅は底面西小口で25cm、深さ10cmを測る。これらの規模から小児用の土坑墓と考えられる。遺物は、出土していない。



第48図 向野遺跡兵後畑地区5号土坑墓実測図

6号土坑墓

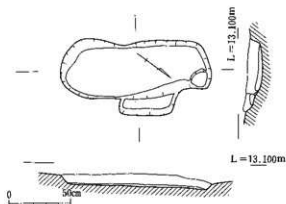
調査区のほぼ中央南側に位置する。主軸はN-60°-Eの東南方向である。上部は削平を受けておりその構造は不明である。内法は床面で長さ185cm、深さ30cm、幅は底面西小口で48cm、東小口で42cmを測る。両小口がともほぼ同じであるから頭位は不明である。これらの規模から成人用の土坑墓と考えられる。遺物は、出土していない。



第49図 向野遺跡兵後畑地区6号土坑墓実測図

7号土坑墓

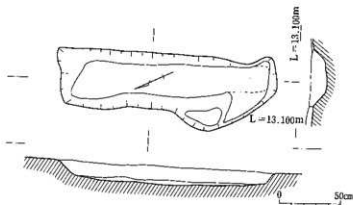
調査区のほぼ中央、5号土坑墓の北西1.5mの所に位置する。主軸はN-35°-Wの東西方向である。上部は削平を受け、北西隅と北辺の一部は覆乱されている。内法は床面で長さ111cm、深さ10cm、幅は底面西小口で17~25cm前後、東小口で33cmを測る。東小口が広いことから頭位は東南方向と考えられる。これらの規模から小児用土坑墓と考えられる。遺物は、出土していない。



第50図 向野遺跡兵後畑地区7号土坑墓実測図

8号土坑墓

調査区のほぼ中央、北西側6号土坑墓の北側5mに位置する。主軸はN-25°Eの南北方向である。上部は削平を受け、東南付近は攪乱されている。内法は床面で長さ153cm、深さ15cm、幅は底面西小口で30cm、東小口で25cmを測る。両小口ともほぼ同じであるから頭位は不明である。これらの規模から成人用土坑墓と考えられる。遺物は、出土していない。



第51図 向野遺跡兵後畑地区8号土坑墓実測図

9号土坑墓

調査区の北西側、3号土坑墓の北約3mのところに位置する。大部分が2号溝でカットされ、墓坑等の規模は不明である。

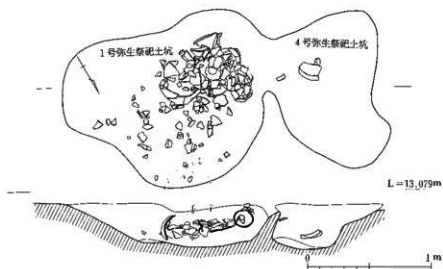
(b) 祭祀土坑

1号祭祀土坑

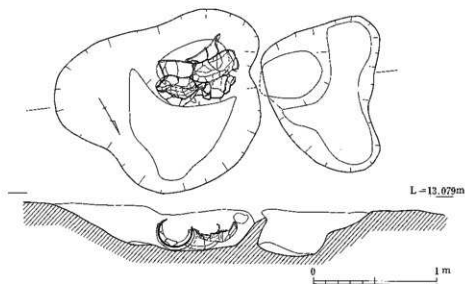
調査区の北西側、3号土坑墓の南西約1.5cm、8号土坑墓の北西約2mに位置し、4号祭祀土坑に接している。その前後の関係は不明であるが、1号土坑墓の東辺の一部が4号土坑墓の西辺を避けるように屈曲していることから、4号→1号の順に掘られた可能性もあろう。1号祭祀土坑の規模と形態は、上面が長径160cm、短径130cmのやや歪な隅丸三角形、底面は長径60cm、短径35cmの楕円形を呈している。上面から底面にかけての傾斜は20°前後の緩やかなカーブで落ちている。遺物は、土坑内東壁ぎわの床面直上にはほぼ完形の壺形土器を3個体並べて、その上に壺形土器の胴部片を土坑全体に破砕散布した状態で出土した。

出土土器(第54図)の1はほぼ完形の口縁部が朝顔状に広がる壺形土器である。口径31cm、器高33cmで胴部最大径は中位よりやや上であり、口縁端部の断面は方形に肥厚する。胴部下位に焼成後の穿孔がある。器面調整は口縁部周辺は横撫きで、胴部下位は横方向のヘラ磨きであ

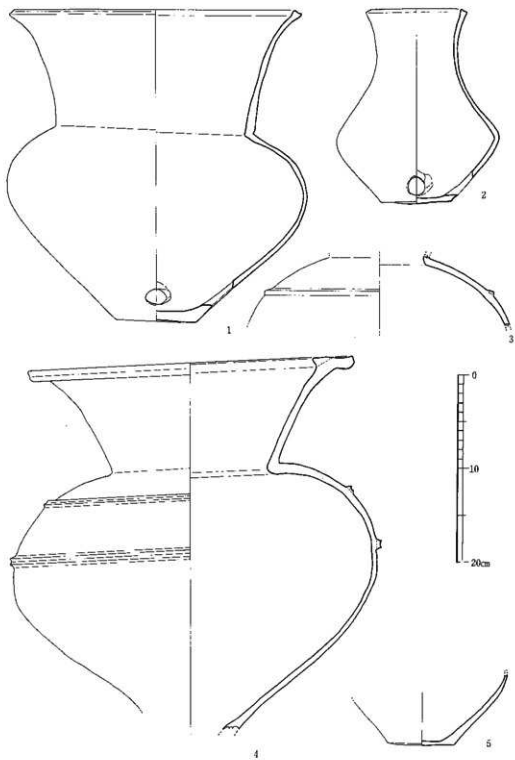
る。胎土には斜長石と角閃石を含み、特に角閃石は底部周辺に目立つ。2もほぼ完形の長頸の壺形土器である。口径9cm、器高21cmで胴部最大径は中央より下位にある。口縁端部は方形に肥厚し、胴部下位には焼成後の穿孔がある。器面調整は横撫でで、色調は黄褐色を呈する。胎土には角閃石を多く含む。3は壺形土器の胴部の破片である。胴部の上位に断面三角形の突帯



第52図 向野遺跡兵後畑地区1・4号弥生祭祀土坑上層実測図 (1/30)



第53図 向野遺跡兵後畑地区1号・4号弥生祭祀土坑下層実測図 (1/30)



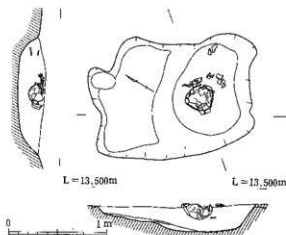
第54図 向野遺跡兵後畑地区1号弥生時代祭祀土坑出土土器実測図 (1/4)

が1条巡る。器面は横撫でで、胎土に角閃石・斜長石を含む。色調は茶褐色である。4は底部を欠くが、鋤先口縁を持つ壺形土器である。胴部最大径部とその上位に断面M字の突帯が巡る。器面調整は口縁部周辺が横撫でで、底部付近にはヘラ磨きが観察される。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は茶褐色である。5は壺形土器の底部と考えられる。器面は横撫でで、茶褐色を呈する。この土坑の時期は、これらの遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

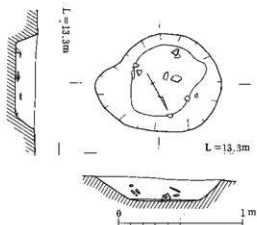
2号祭祀土坑

調査区の中央の南西側、6号土坑墓の南約40cmと近接している。祭祀土坑の規模と形態は、南北150cm、東西115cmのやや歪な隅丸長方形、底面は南北68cm、東西92cmのやや歪な楕円形を呈している。上面から底面にかけての傾斜は、北方向が10°前後の緩やかな勾配で、それ以外の部分は50°前後で落ちている。遺物は、土坑内南東中央で床面から20cm浮いた状態で、第57図1に図示した、ほぼ完形品の壺形土器が1点出土した。

この土器は、全体の半分が残っており、復元口径24.5cm、器高32.5cmの壺形土器である。底部は径8.5cm、のやや上げ底気味平底を呈している。胴部最大径は中位にあり、32cmを測る。頸部から口縁部にかけては明瞭なくびれはなく、口縁部に向かって鋭く外反する。口縁端部は、やや丸味を帯びるが断面が方形に肥厚する。器面には口縁部外面に縦方向の刷毛目調整が残っている。



第55図 向野遺跡兵後畑地区2号祭祀土坑実測図



第56図 向野遺跡兵後畑地区3号祭祀土坑実測図

3号祭祀土坑

調査区の西北側中央、4号土坑墓の東約40cmと近接している。祭祀土坑の規模と形態は、南北80cm、東西90cmのやや歪な楕円形、底面は南北55cm、東西60cmのやや歪な隅丸方形を呈している。上面から底面にかけての傾斜は、北方向が110°前後の勾配で落ちている。遺物は土坑内全体に壺形土器の胴部の小片が10点出土した。その中には断面三角形の突帯も見られた。

4号祭祀土坑

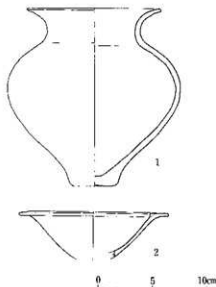
調査区の北西側、1号祭祀土坑の西側にほとんど接している。祭祀土坑の規模と形態は上面が南北120cm、東西95cmのやや歪な隅丸三角形、底面は不定形な二段掘で、最下段は南北35cm、東西50cmの楕円形を呈している。遺物は、土坑南東側の床面から10cm浮いた状態で第53図2に図示した高坏の口縁部が出土した。

この土器は、坏部が半分だけ残っており、復元口径は21cmを測り、口縁部は平たく内面は若干鋸先状を呈している。

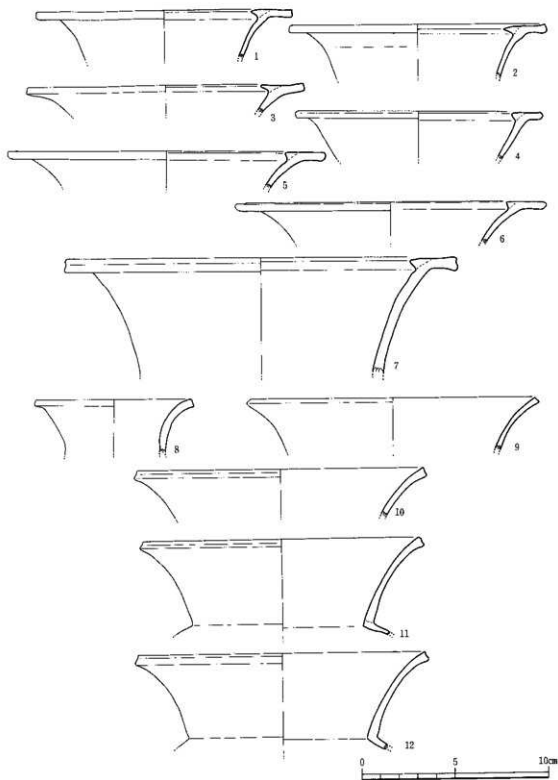
(c) 大溝

調査区の西南側に位置する不定形で大型の溝である。東西長約9m、南北約8mの逆L字状を呈している。出土遺物は、弥生時代中期のもののみであることから、大型の祭祀土坑の可能性はあるが、周辺から土壙墓は検出されていない。

第58・59図はその出土土器であるが、第58図1～7は鋸先状口縁の壺形土器である。口径は小破片のため全て復元径であるが、18cm～32cmまで大小のものが認められる。8～12は口縁部が朝顔状に開く広口の壺形土器である。口径は全て復元径であるが、16cm～31cmまで大小のものが認められる。特に6は口縁部形態が弥生時代中期前半の古い形態を示している。第59図の1～3は壺形土器の胴部で、3の外面にはヘラ書きによる重弧文様が認められる。1は復元胴部最大径44cmを測り、胴部上半と中央に各1条のM字状突帯が巡っている。2は胴部から底部にかけての破片である。胴部最大径は中央よりやや上位にあり、36cmを測る。突帯はやや高い断面M字状のものが胴部最大の所と、その上半に各1条巡らしている。7・8・9は壺形土器の底部と考えられ、厚さ5mmの薄い平底を呈している。4～6は壺形土器の底部と考えられるもので、厚さ3cmの厚い平底を呈している。



第57図 向野遺跡兵後畑地区2・4号祭祀土坑出土土器実測図

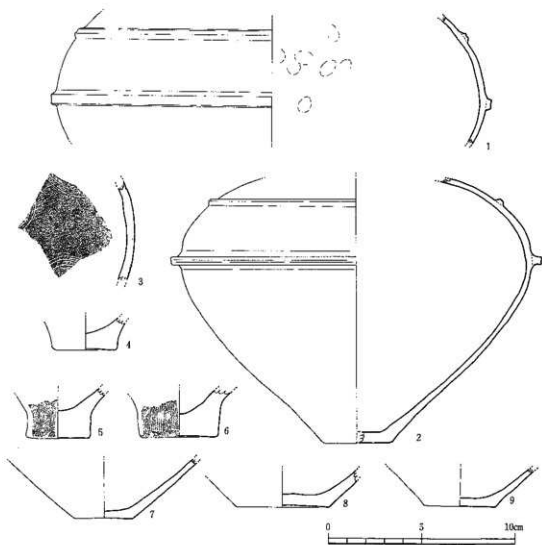


第58図 向野遺跡兵後畑地区大溝出土土器実測図(1)

(d) 土坑

弥生時代の土坑は3号土坑と4号土坑の2基が確認されている。

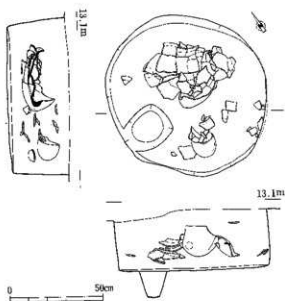
3号土坑は平面観が直径90cmのほぼ円形を呈し、検出面から約30cmの深さで、平坦な床面に達する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。内部からは床面から約10cm浮いた状態で甕形土器と椀形土器の完形が出土した。2・3は甕形土器である。3は口径22cm、器高33cmの甕形土器で、胴部外面にはススが付着している。口縁部と内面は無で仕上げであるが、全体的に摩滅している。2は胴部下位から底部にかけての資料で、3と同様器面は摩滅している。2点とも底部は小さな平底である。1の椀形土器は、口径12cm、器高11cmで、丸底である。器面は無で仕上げで、



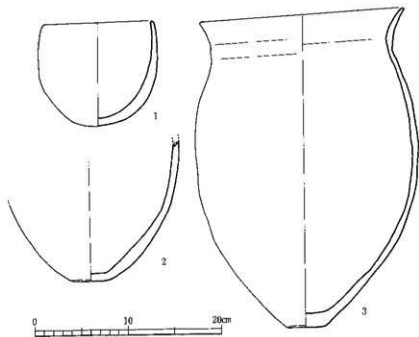
第59図 向野遺跡兵後畑地区大溝出土土器実測図(2)

黒色斑がある。これらの土器から、3号土坑は弥生時代後期中頃から後半にかけての時期と考えられる。

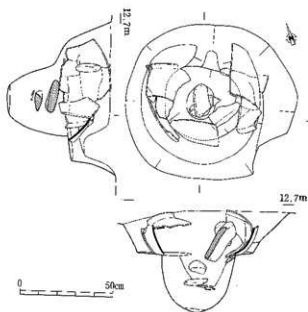
4号土坑は、直径90cmのほぼ円形に近い平面観で、検出面から25cmで、段が付き、さらに直径40cm、深さ30cmの掘り込みがあり、底は丸くなっている。作り出された段上には土坑を覆うように割られた埴形土器が配置されており、土器蓋土坑墓の可能性もある。内部からは扁平な川原石3点が流れ込んだような状態で検出された。第4図は覆っていた埴形土器で口径46.8cm、底部は不明であるが器高は45cm以上ある。器面は撫で仕上げである。土器の形態から、弥生時代後期後半以降と考えられる。



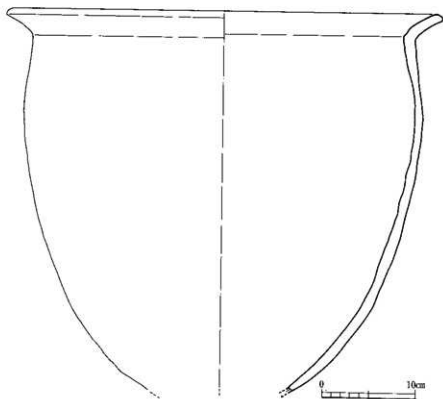
第60図 向野遺跡兵後畑地区3号土坑実測図



第61図 向野遺跡兵後畑地区3号土坑出土土器実測図



第62図 向野遺跡兵後畑地区4号土坑実測図



第63図 向野遺跡兵後畑地区4号土坑出土土器実測図

2) 古代

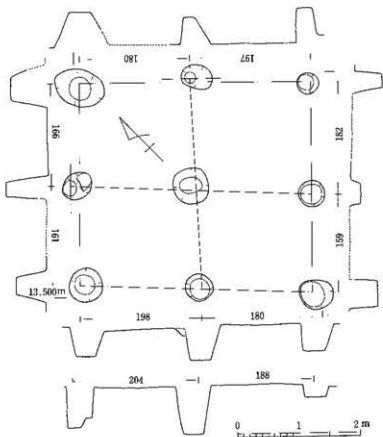
向野遺跡兵後畑地区で明確な遺構が検出されたのは、すでに述べた弥生時代の墓地や祭祀遺構・土坑の他は、古墳時代から律令時代にかけての数条の溝がある。それぞれの溝の時期は出土遺物もあり時期は明確である。しかし、掘立柱建物は、柱穴から遺物がほとんど出土せず、時期については、明確に断定は出来ない。しかし、掘立柱建物の形態、柱穴の埋土の状態からここでは溝とほぼ同時期と考え報告を行う。

掘立柱建物は、倉庫と考えられる総柱建物や、南北に細長い建物などバラエティに富む。そしてその分布は、調査区の中央を東南方向から北西方向へ延びる3条の溝の両側に展開するよう検出されている。時期は出土遺物から8～9世紀の可能性が強く、3条の溝もほぼ同時期であり、これらの遺構がどのように関係するか注目される。

(a) 建物遺構

1号建物

調査区のほぼ中央西寄りに位置する。建物の中央部で2号溝、北部で3号溝と重複している。しかし、土層では先後関係は確認出来なかった。規模は梁間2間、桁行2間の総柱建物である。主軸はN40°Wで柱筋は若干歪んでいる。梁間平均185cm、桁間平均160cmを測る。柱穴は上面直径50～70cmで、深さは検出面から20～70cmを測る。柱痕は土層断面で確認出来なかった。



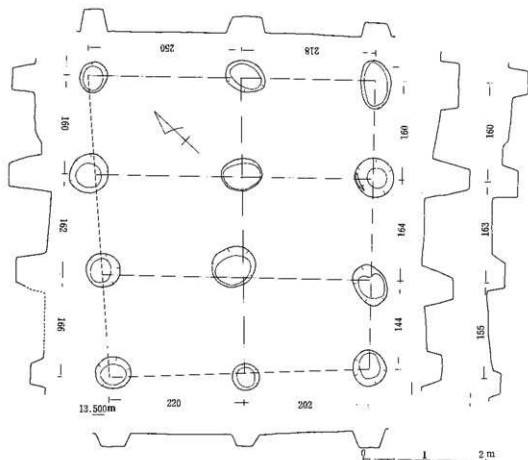
第64図 向野遺跡兵後畑地区1号建物実測図

2号建物

1号建物の南側約1.5mのところの位置する。北側の一部は、1号溝と切り合い関係にあるが、先後関係は判断出来なかった。規模は梁行2間、桁行3間の総柱建物である。主軸はN35°Wで柱筋は直角ではない。梁間平均210cm、桁間平均160cmを測る。柱筋は歪んでいる。柱穴は上面直径60~80cmで、深さは検出面から20~60cmを測る。柱痕は土層断面で確認出来なかった。

3号建物

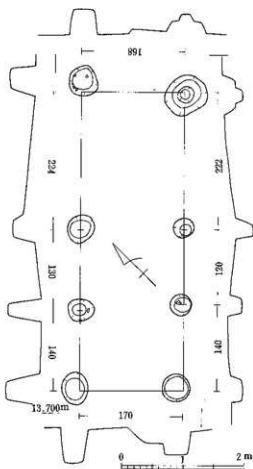
1・2号建物の北西約10mのところの位置する。遺構の主軸に沿って浅い溝が掘り込まれているが、両遺構の先後関係は不明である。建物の規模は梁行1間、桁行3間の南北棟建物である。主軸はN40°Wで柱筋は直角である。梁間平均170cm、桁間平均120~140cmのものと、224cmのものがあり、後者は1間分の柱穴が削平されたものであろうか。柱穴は上面直径60~80cmで、深さは検出面から20~60cmを測る。柱痕は土層断面で確認出来なかった。



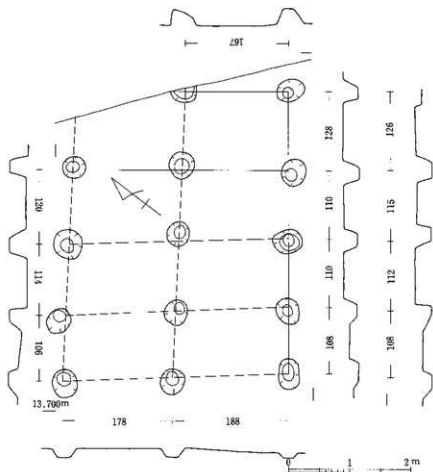
第65図 向野遺跡兵後畑地区2号建物実測図

4号建物

調査区のほぼ中央の北側辺に位置し、北西隅は調査区外である。遺構の中央と東北隅で細い溝と重複するが両者の先後関係は不明である。建物の規模は梁間2間、桁行4間以上の総柱建物である。主軸はN55°Eで柱筋はほぼ直角である。梁間平均184cm、桁間平均110cmを測るが、北東側の1間は検出できなかった。柱穴は上面直径60~80cmで、深さは検出面から20cmを測る。柱痕は土層断面で確認出来なかった。



第66図 向野遺跡兵後畑地区3号建物実測図



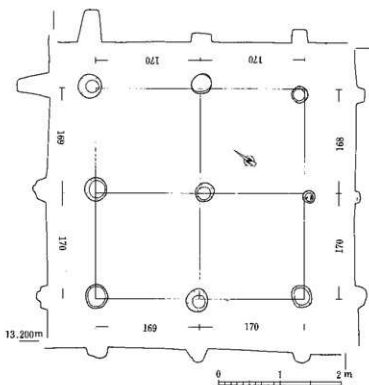
第67図 向野遺跡兵後畑地区4号建物実測図

5号建物

調査区のほぼ中央に位置する。梁行2間、桁行2間の総柱建物である。主軸はN40°Wで柱筋は若干歪んでいる。梁間平均185cm、桁間平均160cmを測る。柱穴は上面直径50~70cmで、深さは検出面から20cm~70cmを測る。柱痕は土層断面で確認出来なかった。

6号建物

調査区の中央東側、5号建物と北側が重複するが、両者の先後関係は判明できなかった。検出された建物の規模は梁行1間、桁行4間の南北棟建物であるが、一部柱穴が削平され梁行2間、桁行4間の建物の可能性もある。主軸はN56°Eで柱筋は直角である。梁間平均400cm、桁間平均177cmを測る。柱穴は上面直径60~80cmで、深さは検出面から20~60cmを測る。南側の柱穴は削平により不明である。柱痕は土層断面で確認出来なかった。



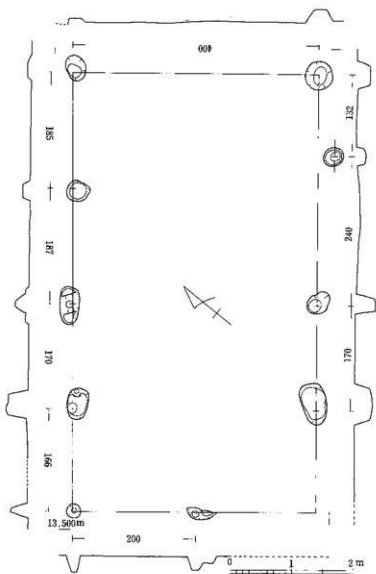
第68図 向野遺跡兵後畑地区5号建物実測図

7号建物

建物5の東側に隣接し、主軸をほぼ同じくした建物である。梁行3間で約480cm、桁行4間で約570cmの建物である。主軸はN40°Wで柱筋はほぼ直角である。梁間平均160cm、桁間平均137cmを測る。柱穴は上面直径60～80cmで、深さは検出面から20～60cmを測る。柱痕は土層断面で確認出来なかった。5号建物と7号建物は主軸の方向の一致や建物の間隔・規模などから同時に立っていた住居と倉庫の可能性はある。

8号建物

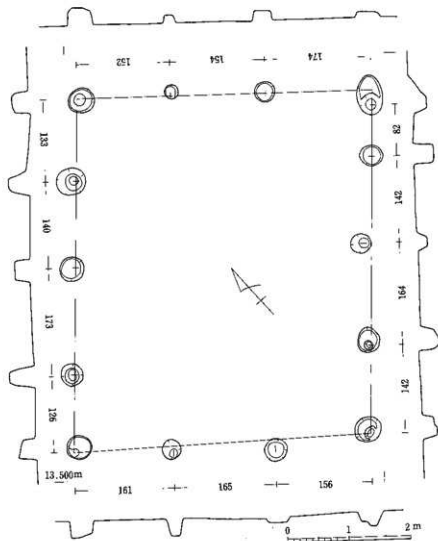
調査区の中央の南側端に位置する。建物の規模は梁行2間、桁行2間の総柱建物であるが、1号溝や2号溝をはじめいくつかの溝が複雑に交差する場所であるため、一部の柱穴は検出出来なかった。主軸はN35°Eで柱筋はほぼ直角である。梁間平均146cm、桁間平均187cmを測るが、東北部分の1間は検出できなかった。柱穴は上面直径60～80cmで、深さは検出面から20～60cmを測る。柱痕は土層断面で確認出来なかった。



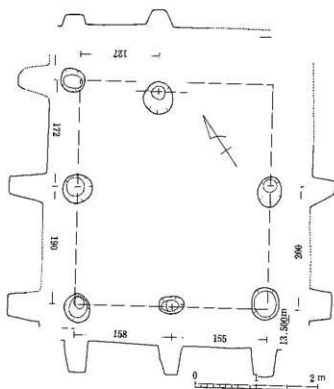
第69图 向野遺跡兵後畑地区6号建物実測図

9号建物

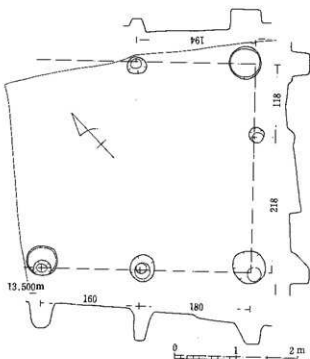
調査区の中央の南側、8号建物の東に隣接して検出されたが、主軸が異なる。梁行2間、桁行2間の総柱建物であろうが、3号溝が遺構の中央部で切り合っている。また北側の柱穴は、調査区間の間の未調査区にあたり不明である。主軸はN42°Eで柱筋はほぼ直角である。梁間平均170cmで340cm、桁間平均約170cmで約340cmを測る。柱穴は上面直径60~80cmで、深さは検出面から20~60cmを測る。柱痕は土層断面で確認出来なかった。



第70図 向野遺跡兵後畑地区7号建物実測図



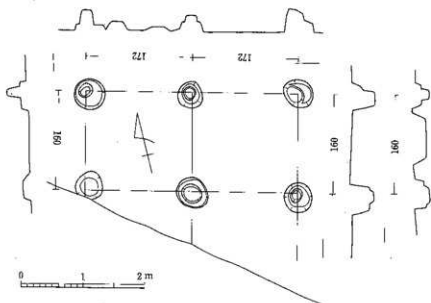
第71图 向野遺跡兵後畑地区8号建物実測图



第72图 向野遺跡兵後畑地区9号建物実測图

10号建物

兵後畑地区のいちばん東側に位置する建物である。建物の主軸に沿って、5号溝が重複するが、先後関係は不明である。また、遺構の南側は調査区域の未調査区がある。このため、全ての柱穴を検出することは出来なかった。検出した柱穴の位置から推測すると、建物の規模は、梁行2間で約340cm、桁行3間で約480cmを測る。主軸はN75°Wで柱筋はほぼ直角である。柱穴は上面径40～60cmで、深さは検出面から10～40cmを測り、ほとんどが二段掘である。柱痕は土層観察で確認できなかった。



第73図 向野遺跡兵後畑地区10号建物実測図

3) 各遺構および包含層出土遺物

(a) 土坑 (第74図)

第74図1～6は5号土坑から出土したものである。1・2は須恵器の坏蓋で、1は口径12cm、器高3.2cmのほぼ完形品である。2は摘みを欠損するもので復元口径16.3cmで、口縁部はほぼ直角に折れ、その長さはやや深い。3～6は須恵器の坏で4・6は高台付きのもので、4は高台から底部にかけては湾曲するのに対して、6は直線的にのびるのが特徴である。これは時代的な差と考えられ、後者が新しい時期のものであり、この土坑は8世紀末から9世紀初頭に廃棄されたと考える。

7は7号土坑から出土した土師器の壺形土器の資料である。形態は胴部から口縁部にかけては逆L字状をなし、口縁端部は断面方形である。時期は8世紀末～9世紀初頭であろう。

8・9は9号土坑出土の須恵器の坏の蓋と身である。8は復元口径13.5cmで頂部には摘みを持たないタイプのものであろうか。口縁部は外側に折れる。9は口径12cm、器高3.5cmを測る。これらの須恵器の時期は8世紀後半のものであろう。

10・11は11号土坑より出土した須恵器の坏蓋と土師器の皿である。10は復元口径17.5cmを測る。口縁部は短く折れている。11は復元口径11.5cm、器高1.2cmと浅い形態のものである。

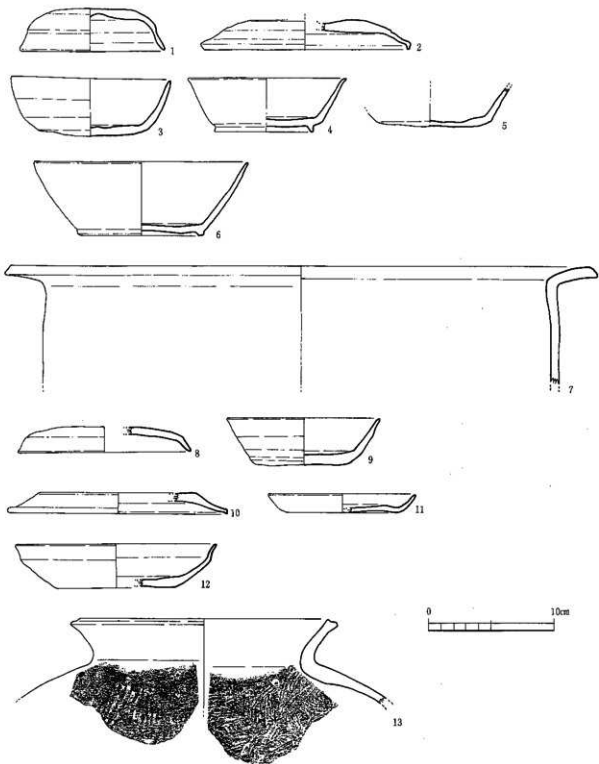
12は12号土坑から出土した須恵器の坏である。復元口径16cm、器高3.1cmを測り、口縁部が屈曲しているのが特徴である。

13は現道2号土坑出土の須恵器の壺の胴部から口縁部の資料である。頸部から口縁部は段を持たずに外反する。口縁端部断面は方形で、口唇部は窪んでいるのが特徴である。調整の特徴としては胴部外面は平行叩きの後撫で消して、内面は同心円叩きの後撫で消してある。

(b) 溝遺構 (第75図)

兵後畑遺跡からは幾条もの溝が検出されたが、調査が3年度に渡り、溝遺構の名称に混乱が生じてしまった。そこで最終年度に全ての遺構の全容が判明した段階で、これらの調整を行い、改めた1号溝から5号溝の名称を付けた。今回はさらにこの溝に6号溝から15号溝までの名称を付け、報告を行う。溝の底はほとんど平坦であるが、周辺の地形から見ると、東南から北西へ流れていたものと考えられる。

1号溝出土の遺物は第75図と第79図1～3である。第75図の1は須恵器の蓋で口縁部は欠損する。胴部はやや卵形で、底部は丸底である。頸部はやや外側にひらく。2は須恵器の坏蓋で、摘みは欠損する。口径16cm前後で、口縁部がわずかに折れているのが特徴である。3は赤焼きの須恵器の坏身で、底部の一部が欠損する。復元口径11.5cmを測る。底部はへら切り離してある。4は須恵器の碗で、復元口径17cmを測る。色調は白灰色で焼きはあまい。5～7は須恵器高台付碗である。5はほぼ丸形のもので、口径12.5cm、器高5cmを測る。高台は断面三角形で、体部は直線的に延びる。6は高台が欠損するが、復元口径13cm前後である。7は底部が欠損す



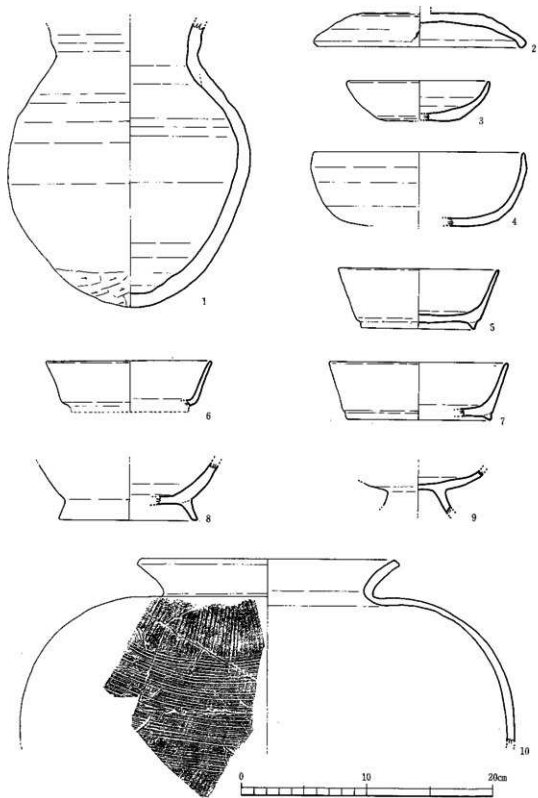
第74图 向野遺跡兵後畑地区各土坑出土土器実測図

るが、5とはほぼ同様な土器である。8は須恵器の高台付壺の底部片であろうか。高台が高いのが特徴である。9は須恵器の高環の脚上部から坏底部の破片である。10は須恵器の胴部上半から口縁部にかけてのものである。胴部はやや肩が張り、頸部は強く屈曲し、外方向にのびる。口縁部は、断面方形の単口縁である。胴部外面の調整は平行叩きのあとカキ目調整を行っているのが特徴である。

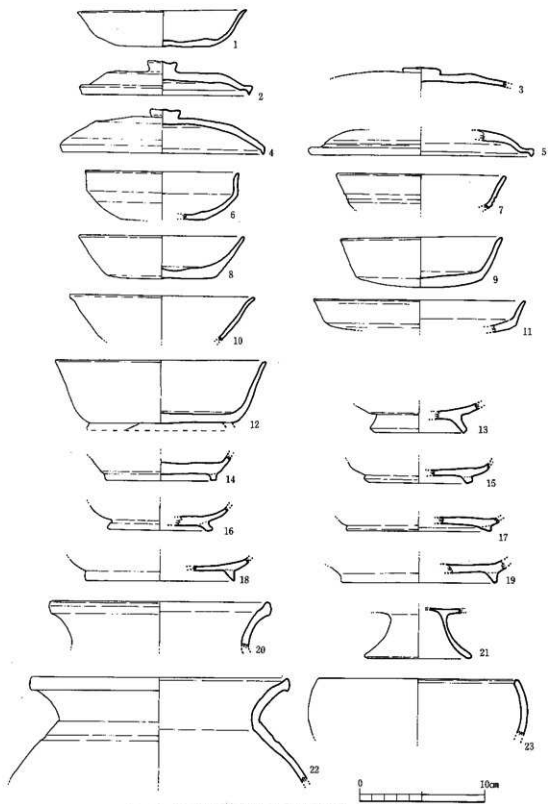
第79図1は復元口径15cm、器高3cmのもので、口縁部はくちばし状に延び、口縁端部は短く折れている。2は復元口径23cm、器高は2.5cmを測る。口縁部は外下方向に延び、端部は断面方形に仕上げている。器形から皿の可能性もある。時期は両者とも、8世紀末から9世紀初頭のものである。3も1号溝から出土した瓦質の土鍋である。復元口径30cm、器高11cmを測る。時期は中世末のもので、後世の流れ込みであろうか。

2号溝から出土した遺物は第79図4である。この土器は復元口径11cm、器高3.5cmを測る小振りのもので、底部はやや丸く、体部から口縁部にかけては緩く外反する。時期は7世紀中頃のものである。

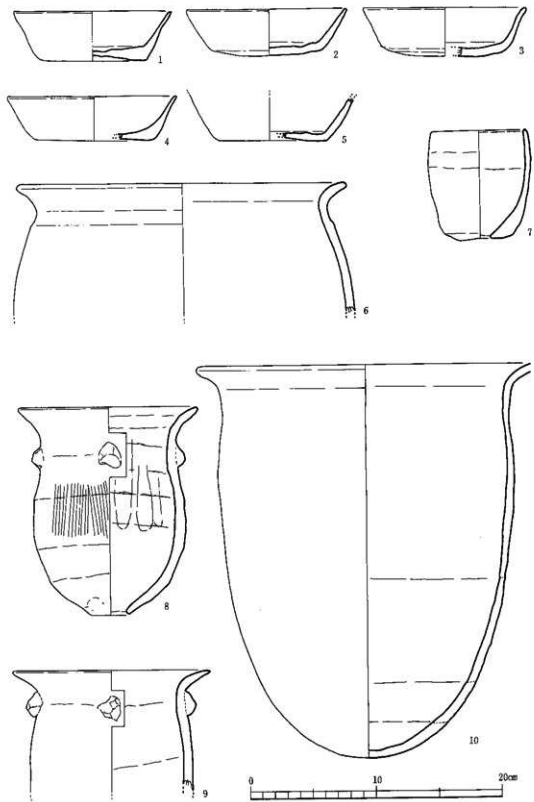
3号溝出土の遺物は第76図に図示した。1はほぼ完形の土師器碗で口径13.2cm、器高2.7cm前後のものである。底部は丸く、口縁端部は丸く肥厚する。調整は底部がヘラ切り難し、他はナデである。2～5は須恵器の蓋である。2は復元口径13.5は、器高2.7cmを測る。口縁部はくちばし状に屈曲する。4は復元口径16.5は、器高3.2cmを測る。口縁部は直角に屈曲する。6～9は坏である。6は復元口径12cmを測る。体部上半が垂直に立ち上がり、口縁端部が若干外反するのが特徴である。8は口径12.9cm、器高3.4cmを測る。底部から体部への変化は丸い。9は完形の土師器の坏である。口径12.7cm、器高4cmを測る。底部は丸味を持ち、底部から体部への変化は緩い。12～19は高台付碗である。13の高台は高いが、それ以外は低い。高台断面も方形のもの(13～16)と三角形のもの(17～19)とがある。20・21は須恵器の甕片である。両者とも頸部は短く外反し、口縁端部は断面三角形に肥厚する特徴を持つ。21は須恵器の高環の脚部である。脚部は短く大きく開き、端部は丸く納めている。23は須恵器の鉄鉢の胴部上半から口縁部にかけてのものである。口縁部は内湾し、口縁端部は段状をなしている。以上が10号溝から出土した主要遺物であるが、これらの遺物の時期より溝は9世紀初頭前後に埋没したものと考えられる。4号溝から出土した土器は第77・78図と第79図5～9に図示した。第77図1～5は土師器の坏である。1は復元口径12.5cm、器高4cmを測る。底部は上げ底で、体部との屈曲は鋭い。口縁部は若干外反している。2は復元口径12.6cm、器高4cmを測る。底部と体部とは丸くカーブしている。3は復元口径12.7cm、器高3.8cmを測る。底部と体部とは丸くカーブし、口縁端部は若干外反している。4は復元口径13cm、器高3.5cmを測る。1～5は底部はヘラ切り難しで他はナデ調整である。7～9はイイダコ甕と考えられる。7は口径7.4cm、器高8.6cmを測る。底部に径2cmの焼成前の穿孔が認められる。8は口径14cm、器高16.5cmを



第75图 向野遺跡兵後畑地区1号溝出土土器実測図



第76图 向野遺跡兵後畑地区3号溝遺構出土土器実測図



第77图 向野遺跡兵後畑地区4号溝出土土器実測图(1)

測る。形態は甕形土器であるが、頸部に幅 2cmほどの瘤状突起が4ヶ所認められ、底部に径 2cmほどの焼成前の穿孔があることから、イダコ壺と想定した。9は8と同じ形態の胴部上半の資料である。10は口径26cm、器高31cmの甕である。底部は丸底で体部のふくらみも小さい。口縁部は外反し、端部は厚く丸いのが特徴である。胴部に粘土紐痕が残る粗製のものである。

第78図1～5は須恵器の口蓋である。1は口径12cm、器高 4.5cmを測る。頂部外面に向転ヘラケズリが認められる。2は復元口径11.5cm、器高 1.5cm以上を測る。内面に短い返りが付いている。3・4は口縁端部が短く折れるタイプのものである。5は口径18cm、器高 3.6cmを測る。口縁端部はくちばし状に短く折れる。頂部にボタン状の柄杓が付いているのが特徴である。7～11は皿である。7はほぼ完形のもので、口径 9cm、器高 2.5cmを測る。8は復元口径16cmを測り、口縁端部が外反するのが特徴である。10・11は口径11cm、器高 2.5cmを測る。底部はやや丸味を帯びているのが特徴である。12～19は、椀である。口径13～17cmを測る。高台は全体に短く断面は方形(13・15)のものと同形(14・16・19)のものと同が認められる。底部から体部への変化は直線的に延びるものと(14・15)と湾曲するもの(16・18・19)とが認められる。20～25は高坏である。脚部は全体に短く、裾部が広いのが特徴である。脚端部はくちばし状になるものと、断面方形になるものがある。

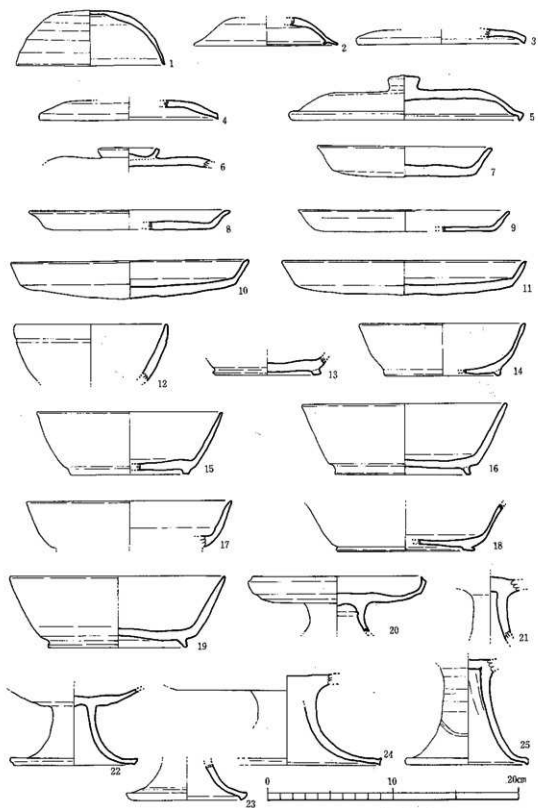
第79図の5～9も4号溝から出土したもので、5～7は甕の口縁部である。5は口縁部下端に2条の突帯を巡らせ、その下に櫛描波状文を施文している。時期は6世紀後半から末前後のものである。6は復元口径23cm、器高 5cmを測る。頸部は緩やかに外側に延び、口縁端部は台形状をなす。7は復元口径21.5cm、器高 2.5cmを測る。頸部は大きく外反して口縁部はやや内湾し、端部は方形形状をなす。8は脚付壺の底部から脚部にかけてのものである。脚底復元径14cmを測る。脚部は長く外方に延び、接地面は脚端部の内側のみである。以上の出土遺物から4号溝の埋没時期は8世紀末から9世紀初頭である。

5号溝から出土した土器は第80図8に図示した。この土器は、須恵器の大甕の口縁部から頸部の資料である。頸部は緩やかに立ち上がり、口縁端部は瘤状に肥厚させる。頸部には櫛描波状文等の文様は見られない。時期は6世紀末～7世紀初頭のものであろう。

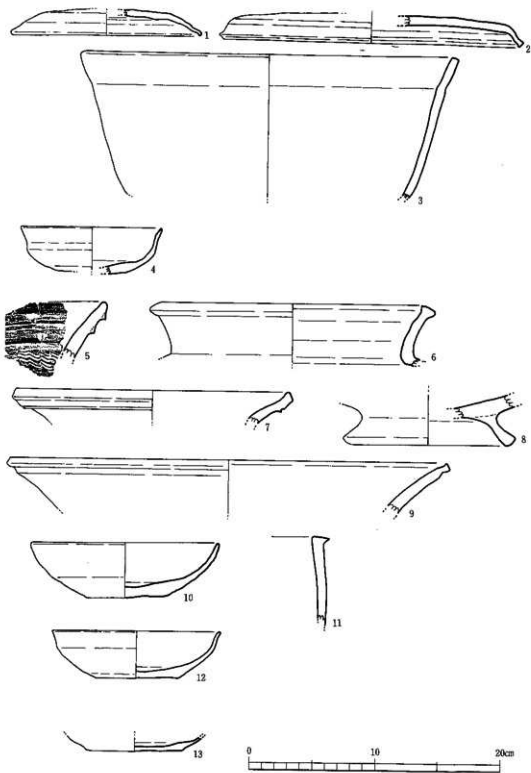
6号溝から出土した土器は第79図10・11に図示した。10は須恵器の坏身で、口径15cm、器高 4.5cmを測る。底部調整はヘラ切り離し、器形は体部から口縁部にかけてはやや内湾しながら外側に延びる。口径・器形から坏蓋の可能性が高い。11は弥生時代中期前半の土器で、この溝の時期は6世紀末から7世紀初頭のものである。

7号溝出土の土器は第79図12に図示した。この須恵器は10の器形に類似するが、口縁部が屈曲するのが特徴である。時期は6号溝と同じであらう。

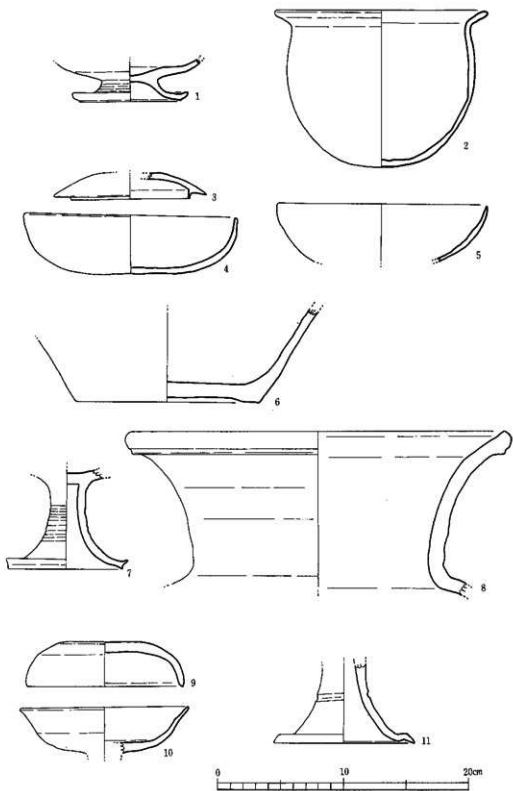
8号溝出土の土器は第79図13に図示した。この土器は須恵器の坏身の底部で、底面の調整はヘラ切り離しである。時期も6・7号溝と同じであらう。



第78図 向野遺跡兵後畑地区4号溝遺構出土土器実測図(2)



第79图 向野遺跡兵後畑地区各溝遺構出土土器実測図(1)



第80图 向野遺跡兵後畑地区各溝遺構出土土器実測図(2)

9号溝出土の土器は第80図1・2に図示した。1は須恵器の高坏脚部で、短脚である。脚底部径8cm、器高4.5cmを測る。脚端部が外側に跳ね上がるのが特徴である。2は土師器の甕形土器で口径16.5cm、器高12.5cmを測る。底部は丸底で、胴部はあまり張らず、口縁部は外側に強く屈曲する特徴を持つ。時期は1の高坏から7世紀後半のものであろう。

12号溝出土の土器は第80図3～5に図示した。3は須恵器の坏蓋で、復元口径9.5cm、器高2cmを測る。器形は蓋返りが内側に付いているのが特徴である。4・5は土師器の椀で、4は口径17cm、器高4.5cmを測る。底部は平たい丸底で、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。5もほぼ同様な器形である。時期は3の須恵器から、7世紀後半のものであろう。

14号溝出土の土器は第80図6に図示した。この土器は須恵器の壺の底部と考えられるものである。底部径15cmを測り、体部は直線的に外側に延びている。調整は回転ヘラ切りである。時期は8世紀末から9世紀初頭のものであろうか。

15号溝出土の土器は第80図9～11に図示した。9は坏蓋で口径12cm、器高4.5cmを測る。調整は天井部に回転ヘラ削りが認められる。10は高坏の坏部である。復元口径13cm、器高4.5cmを測る。体部から口縁部にかけて若干屈曲する。11は高坏の脚部で、10と同一個体の可能性もある。脚部中央に1条の沈線があり、脚端部はくちばし状に延びる。時期は、6世紀後半から末にかけてのものであろう。

16号溝出土土器は第80図7に図示した。これは須恵器の高坏の脚部である。底部径9cm、器高7.5cmを測る。脚部中央に6条の沈線があり、脚端部が外側に跳ねる。時期は6世紀末から7世紀初頭のものであろう。

(c)その他の遺構

第81図1は兵後畑地区の柱穴状のピットから出土した土師器の甕形土器の上半分である。復元口径22cm、器高12cm以上を測る。胴部はやや張り、頸部から口縁部にかけては大きく外反する。調整は、内面に縦方向のヘラ削りが認められる。時期は7～8世紀のものであろう。2も同様の柱穴状のピットから出土した土師器の甕形土器の上半分である。復元口径25cm、器高18cm以上を測る。胴部はほとんど張らず、口縁部は「く」の字状に屈曲する。時期は1とほぼ同様であろう。3も柱穴状のピットから出土した弥生時代中期中頃の須玖式土器の甕形土器の口縁部片である。4は、土師器の坏で、復元口径12cm、器高3.5cmを測る。器形は底部から体部にかけては丸く屈曲し、口縁部は若干外反する。時期は8世紀後半のものであろう。5は現道部の柱穴状のピットから出土した土師器の椀で、復元口径15cm、器高5cmを測る。底部は丸底で、口縁部は若干内傾し、時期は5世紀後半から末のものであろうか。6は兵後畑地区II区の井戸から出土した瓦質の火鉢である。復元口径23.5cmで、口縁部外側を削り出して成形し、内面は段状になっている。時期は中世末から近世初頭のものであろう。

(d)各道構混入及び包含層出土土器

第82図は1・2・4・7・10は兵後畑地区Ⅱ区の5号土坑出土の土器である。1は高坏の坏部で、復元口径18cm、口縁部の形態は鋤先状になる。2は甕形土器の上部で、復元口径は21cmである。4は甕形土器の上半部で復元口径24cmで、胴部はやや張り、口縁部は「く」の字状に屈曲し、やや長い。7は甕形土器の底部である。底径は6.5cmで、形態は上げ底、器壁は厚い。10は、器台の底部で、復元底径は12.5cmを測る。時期は、1・2・7・10が弥生時代中期後半から後期初頭のものであるが、4は弥生時代後期末から古墳時代初頭のものであろう。

3は1号溝から出土した甕形土器で、復元口径は17.5cmである。器形は4に類似することから、弥生時代後期末から古墳時代初頭のものであろう。5は包含層から出土した甕形土器で、口径36cmを測る。胴部は張らず、口縁部は如意状に開き、端部は摘み上げ状になっている。6は9号土坑から出土した甕形土器で、復元口径42cmである。胴部はやや張り、口縁部は「く」の字状に折れ、端部は若干肥厚している。8は2号溝から出土した甕形土器の底部である。底径7cmを測り、平底で器壁は薄い。5・6・8の時期は弥生時代中期中頃から後半であらう。9は12号溝から出土した甕形土器の底部である。底径は7cmを測り、上げ底で器壁は厚い。時期は弥生時代中期前半から中頃であらう。11は、包含層から出土した甕形土器で口径21cm、器高18.5cmを測るほぼ完形である。底部は丸底で胴部もあまり張らず、口縁部は大きく外反し、器壁は薄い。時期は6世紀から7世紀のものであろう。

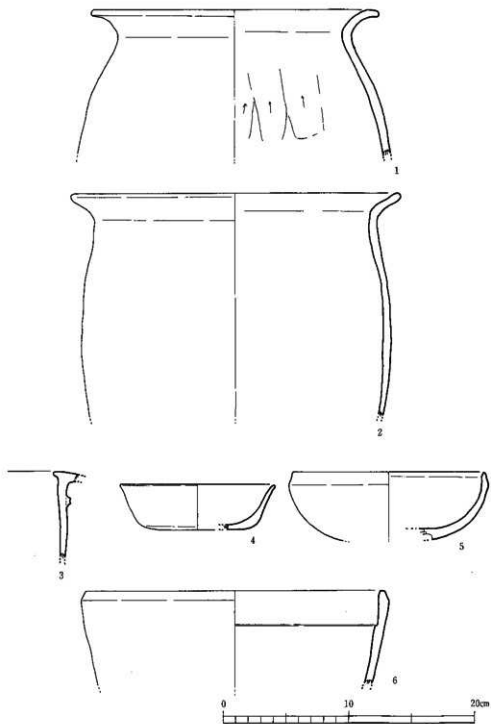
第83～86図は包含層出土の土器で、第83図は1は須恵器の坏蓋で、天井部は回転ヘラ削り痕があり口径は13.8cmを測る。2は土師器の皿で、口径14cm、器高1.8cmである。口縁部は短く、外反する。3～11・13は土師器の坏である。いずれも体部は横撫で、底部は回転ヘラ切り痕が残る。ただ、7と高台が付く11は、焼成の悪い須恵器の可能性が強い。それぞれの法量は、3が口径11.8cm、器高3.7cm、4が口径13cm、器高3.5cm、5が口径13.4cm、器高3cm、6が口径13.8cm、器高4.1cm、7が口径14.2cm、器高3.7cm、8が口径14.5cm、器高4.1cm、9が口径14.9cm、器高3cm、10が口径15.3cm、器高4cmである。13は口径14.7cm、器高3.1cmである。そして11の底部は底径7.1cmである。

12はイダゴ壺である。てづくねの撫で仕上げで、直径1.5cmの焼成前の穿孔がある。器高7.8cm、口径6.2cmである。

14・15は土師器の皿である。14の口唇部内側はヘラによる面取りが行われ、胎土に角閃石を多く含む。法量は、口径16.6cmである。15は口径18.4cm、器高約3cmである。

16は口縁部が如意状に外反する鍋状の土師器である。底部近くは摩滅している。口径は25.6cmである。

第84図は、須恵器の坏蓋と身である。1～17は蓋であるが、大きく3タイプに別れる。1～4は摘みのないものである。天井部は回転ヘラ削りで、他の部分は撫で仕上げである。法量は1



第81图 向野遺跡兵後畑地区各遺構出土土器実測図

が口径11.8cm、器高約4cm、2は口径14cm、器高3.5cm、3は口径12.8cm、器高約4cm、4は口径11.1cm、器高2.6cmである。時期は6世紀後半代である。

5～15は天井部に宝珠形の握みが付き蓋で、口縁端部がくちばし状に屈曲する。成形は天井部に回転ヘラ削り痕が付き、他は撫で仕上げである。法量は5が口径14.8cm、握みを除く器高1.9cm、6は口径16.8cm、7は口径16.2cm、8は口径16.6cm、握みを除く器高は2.6cm、9は口径15cm、器高約2.4cm、10は口径17.5cm、器高2.1cm、11は口径19.2cm、器高2cm、12は口径16.6cm、13は口径17cmである。いずれも口縁端部は断面三角形になる。これらの時期は、13が8世紀前半、他は8世紀中頃～後半と考えられる。16・17は天井部に握みが付き、平坦な天井部から口縁部にかけて直角に屈曲し、端部断面は方形になる。法量は16が口径は14.6cm、握みを除く器高2.5cm、17は口径15cm、器高2.8cmである。これらの時期は8世紀中頃と考えられる。

18～28は坏身である。これも底部が丸底、平底、高台付きの3タイプが認められる。18・19は丸味のある底部に整形され、底部は回転ヘラ削りで、それ以外は撫で仕上げである。19は受部が付く。法量は18が口径14.6cm、器高4.5cm、19が口径9.8cm、器高3.2cmである。時期は18が8世紀前半で、19は6世紀後半と考えられる。

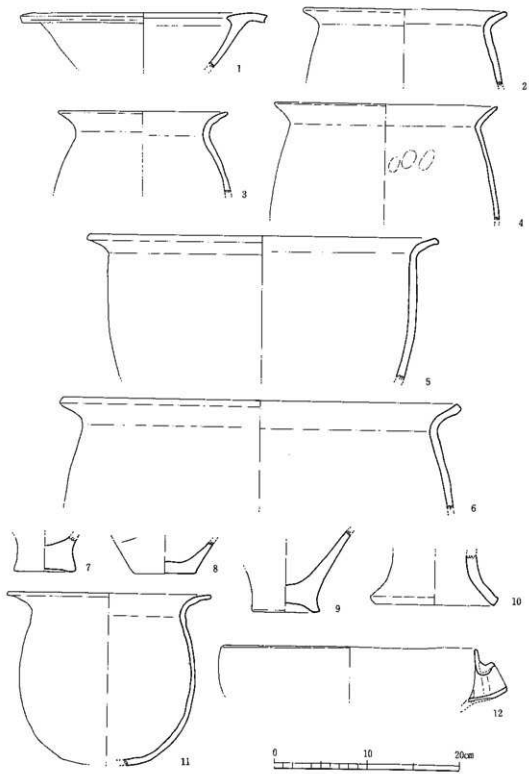
20～23は底部が平底で、体部は底部から直線的に延びる。調整は底部が回転ヘラ削りで、他は撫で仕上げである。法量は、20が口径29.8cm、器高4.2cm、21は口径29.9cm、器高4cm、22は口径15.6cm、器高4.9cm、23はやや上げ底で、口径15.7cm、器高3.5cmである。これらの時期は22・23が8世紀前半、20・21が8世紀中頃～後半と考えられる。

24～28は20～23の器形に高台を付けた形態である。このため器面調整は同じである。24は口径12.9cm、器高4.8cm、底径8cmである。25は口径16.8cm、器高5.5cm、底径11.1cmである。26は口径17.3cm、器高5.8cm、底径12cmである。口縁部を欠く27・28の底径は、27が8.4cm、28が6.8cmである。これらの土器の時期は28が7世紀末、27が8世紀中葉、24～26が8世紀後半代である。

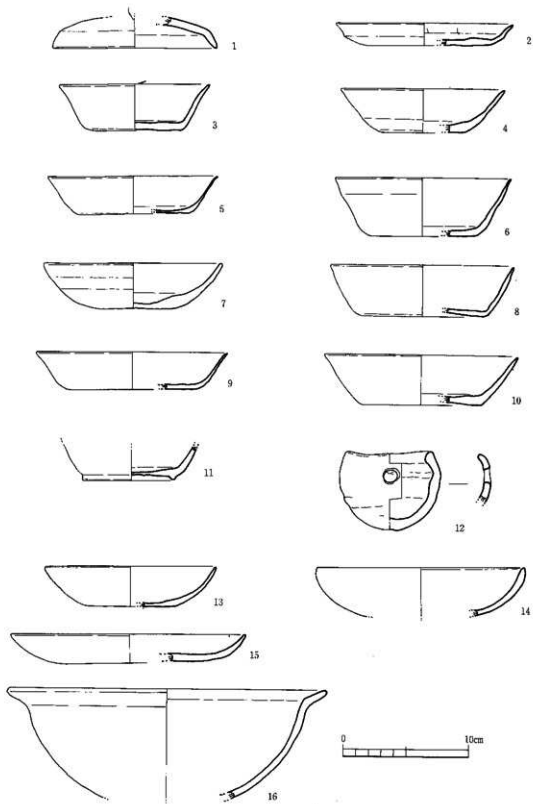
第85図は、須恵器の坏以外の器種である。1～9は皿である。底部は接地面の広い平底で、口縁部は斜めに短く立ち上がる。器面は底部が回転ヘラ削りの痕ナデで、他の部分は撫で仕上げである。法量は、1が口径12.5cm、器高は1.8cmである。2は口径14cm、器高2.3cmで、3は口径14.6cm、器高1.9cm、4は口径14.7cm、器高2.5cm、5は口径15cm、器高2cmである。6は口径16.2cm、器高2.1cm、7は口径17cm、器高2cm、8は口径19cm、器高3.2cm、9は口径20.2cm、器高2cmである。

10・11は大ききから壺類の底部と考えられる。底部には高台が付き、撫で仕上げである。底径は、10が12.2cm、11が15.9cmである。

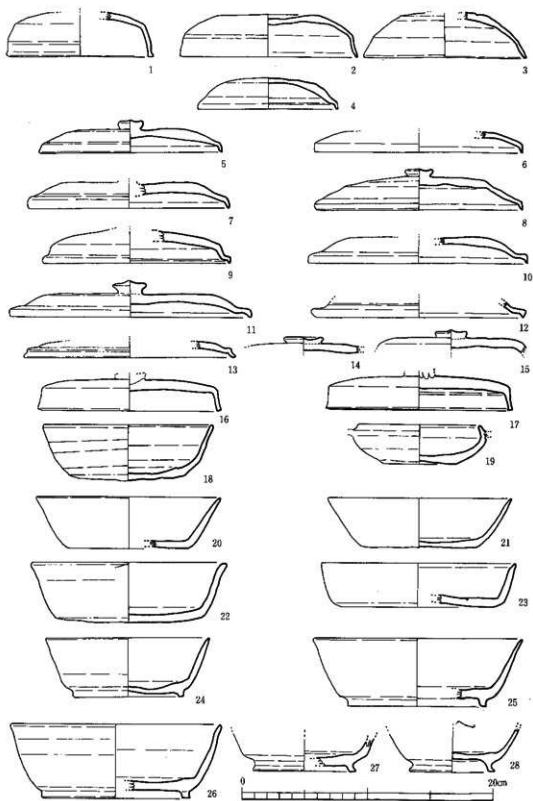
12～19は高坏である。12は脚端部を欠く高坏で、坏底部内面が平坦で口縁部は短く直角に立



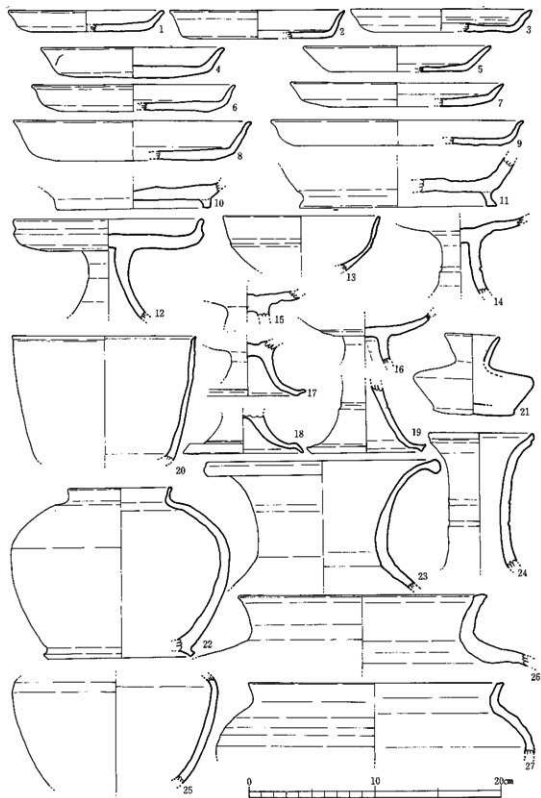
第82图 向野遺跡兵後畑地区出土土器実測图(1)



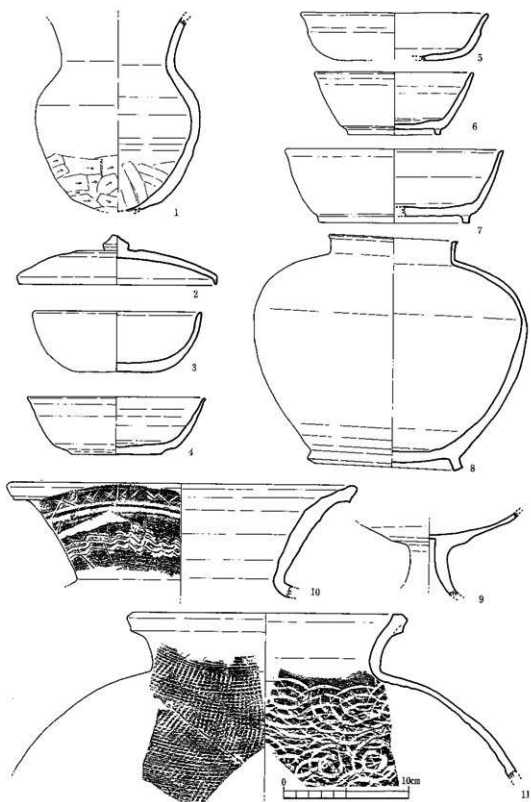
第83図 向野遺跡兵後畑地区出土土器実測図(2)



第84図 向野遺跡兵後畑地区包含層出土土器実測図(3)



第85図 向野遺跡兵後畑地区包含層出土土器実測図(4)



第86図 向野遺跡現道部包含層出土土器実測図(5)

ち上がる。口径は15.3cmを測る。13は坏部の口縁部である。胴部外面に2条の平行沈線が巡る。口径は12.8cmである。14～16は、坏部と脚部の接合部である。14の脚には沈線が1条巡る。17～19は脚部の資料である。17の脚端部は反り、内面が接地面となっている。18の脚端部は内湾気味に屈曲し、端部は尖る。底径は9.7cmである。19の脚端部は肥厚し、断面三角形になる。中位には沈線が1条巡る。底径は8.5cmである。

20は鉢である。器面は撫で仕上げである。口縁部は端部が尖り、口径14.8cmである。

21～27は各種の壺である。21は、完形品の小型の平底の壺である。底部は回転ヘラ切りで他は撫で仕上げである。口径は4.4cm、器高は6.4cmである。22は高台付きの広口壺である。調整は横撫でで、口径は8.2cm、器高13.3cmである。23は口縁端部外面が肥厚する長胴の壺と考えられる。口径は18cmである。24は細頸の長頸壺である。頸部中位に2条の平行沈線が巡る。口径は8.5cmである。25は壺の胴部である。器面は撫で仕上げで、胴部最大径は上位にあり、16.5cmを測る。26・27は広口壺である。器面は両者とも横ナデである。口径は、26が20cm、27は20.5cmである。これらの時期は幅があるが8世紀中頃から後半である。

第86図は5号溝周辺に形成された包含層からまよって出土した遺物である。1は口縁部と底部を欠く壺で、器面調整は底部外面がヘラ削りで、他は回転横撫で仕上げである。胎土には石英を含む。胴部最大径は13.3cmである。

2は摘みのある坏蓋である。天井部は回転ヘラ削りで、他は撫で仕上げである。口縁端部は短く屈曲し、端部は断面三角形になる。口径は15.7cmで、摘みを除く器高は2.7cmである。

3～7は坏の身である。器面調整は底部が回転ヘラ削りで、その他の部位は横撫でである。3は口径13.2cm、器高4.8cm、4は口径14.4cm、器高4.5cmで、5は口径15cm、器高約4cm、6は口径12.8cm、器高5cm、底径7.5cm、7は口径17.5cm、器高5.8cm、底径12cmである。

8は、高台付きの壺で、器面は撫で仕上げである。焼きは全体的に甘く軟質である。直立する口縁外端部は小さく突出し、肥厚している。口径15cm、器高18.2cm、底径11cmである。

9は高坏で坏部と脚部の接合部である。器面は横ナデで、赤焼きの須恵器である。

10・11は大壺である。10は口縁下端が肥厚し、細い突帯が巡る。その肥厚部にはヘラ描きによる「×」印の文様と、その下位に縞描波状文が施文されている。口径は41cmである。11も口縁部外面が肥厚し、突帯状の粘土が付着する。器面調整は、口縁部周辺は横ナデで、外面が平行叩きのあと撫で、内面には同心円の当具痕が残る。口径は21cmである。

以上の土器からこの包含層の形成時期は8世紀代と考えられる。

1 市場地区

(1)調査の経過と概要

向野遺跡市場地区は、兵後畑地区の東側に遺構希薄部分を挟んで隣接する。すなわち立地する地形的な環境も同じで、宇佐平野に展開する微高地上である。こうした微高地上は現在でも集落がいとなまれており、家屋やそれに続く市道や里道が入り組んでいる。このため調査は、この生活道路を避けながら行われた。

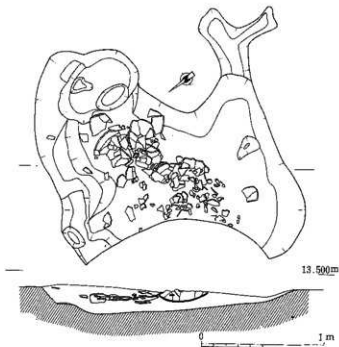
市場地区の発掘調査は主として昭和63年度と平成元年度に実施され、平成2年度に兵後畑地区と同じく、国道10号線の切り替え工事に伴い現道部分を調査した。そして、生活道路に分析されながら設定した調査区名は西側からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区と命名した。しかし、兵後畑地区の報告でも述べたように、遺構の連続性を見た場合、Ⅰ区は兵後畑地区につながるものが判った。そこで、概報段階でのⅡ・Ⅲ・Ⅳ区を向野遺跡市場地区として報告する。

この市場地区は、兵後畑地区と近接するためか、検出された遺構や出土した遺物はほぼ同じで、弥生時代の土坑と古代の建物遺構が中心である。

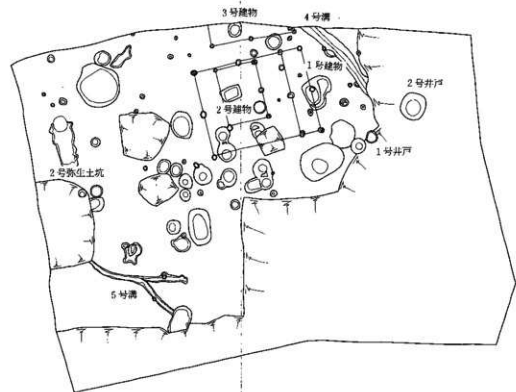
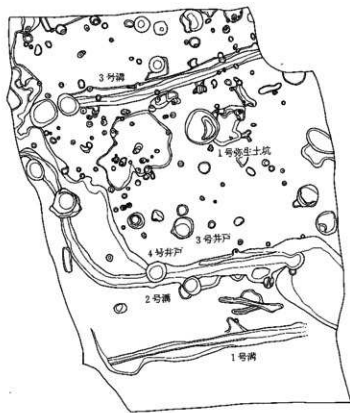
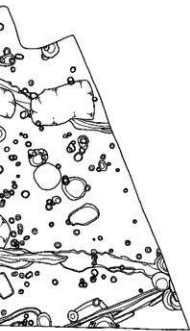
(2)調査の成果

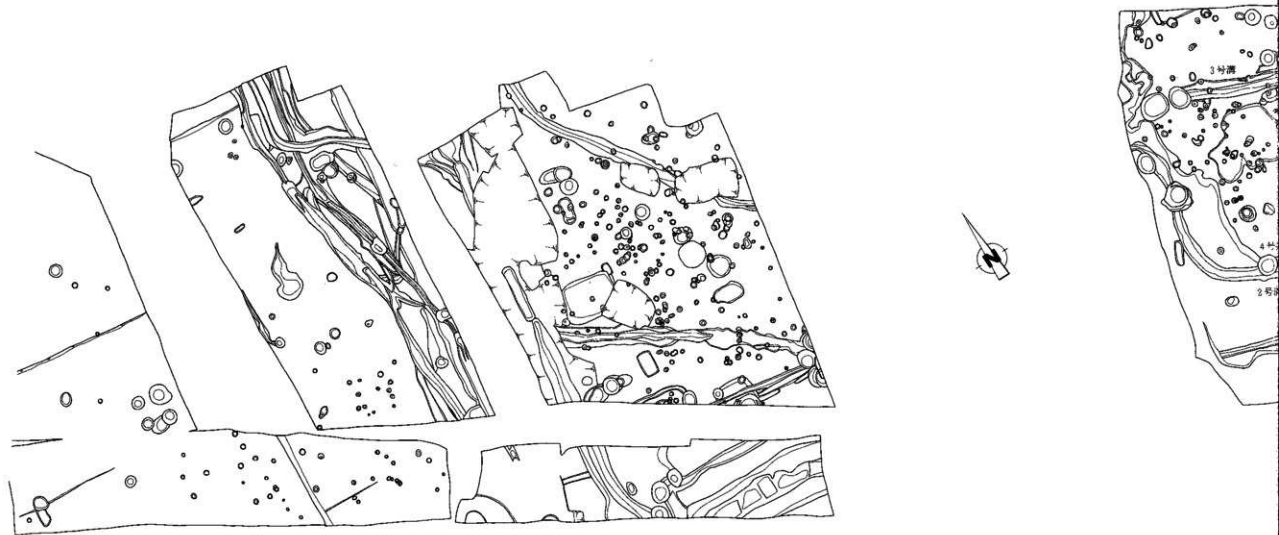
1)弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構はⅣ区で2基の土坑が検出された。Ⅳ区は南北に延びる微高地の東側縁にあたり、すぐ東側は低湿地になっている。2基の弥生時代の土坑はこうした地形に立地する。



第87図 向野遺跡市場地区1号弥生土坑実測図

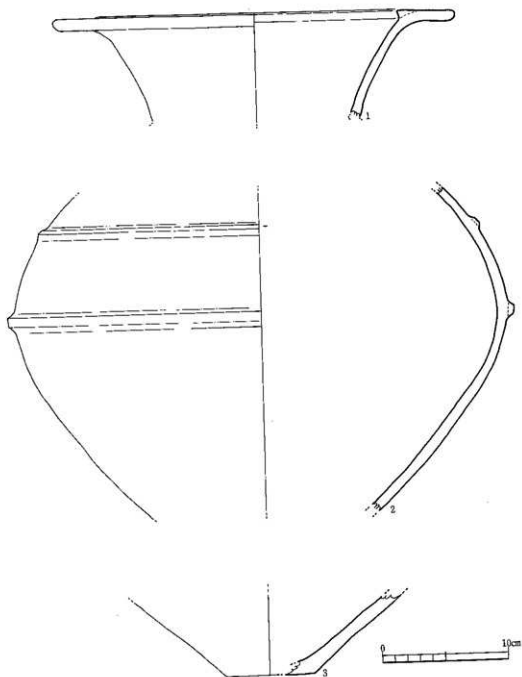




第88図 向野遺跡市場地区遺構配置図

1号土坑

1号土坑は最長部約2m、幅約1mの不定形をした掘り込みである。上部は削平を大きく受けており、深さは最深部でも20cmしか残されていない。底の形状は浅い皿状になる。また遺構



第89図 向野遺跡市場地区1号弥生土坑出土土器実測図

の西側は、近世の遺構で切られている。

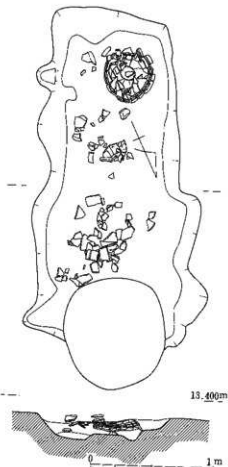
遺物は遺構のほぼ中央部から弥生土器がまとまって出土した。これらの土器は床面から約10cmほど、浮いた状態で出土している。第89図がその土器であるが、壺形土器が1個体と思われる。1の口縁部は鋤先状になる形態で、口径は31.8cmを測る。器面調整は、口縁部周辺から外面は横撫であるが、内面には横方向のヘラ磨き痕が残されている。2は胴部で胴部最大径は約40cmで、その部分と、やや上位に断面台形の突帯が巡っている。器面は内外面とも撫で仕上げである。3は底部である。底径は7cmで器壁は比較的薄い。この土器の色調は淡茶褐色で、胎土に角閃石と斜長石を含む。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

2号土坑

2号土坑は1号土坑から末調査区を挟んで約10m東側に位置する。遺構の規模は、長さ約2.7m、幅約1.3mの南北に長い長方形をしている。土坑の床面は平坦ではないが、検出面から約20cmの深さである。また、遺構の北隅は近世の遺構で切られている。

第91図に図示した遺物は、1が遺構の南側の床面に口縁部を欠いた状態で、底部を上にして倒立した状態で検出された壺形土器である。胴部最大径は約38cmで、その部分と、やや上位に断面「M」字の突帯が巡る。さらに上位の突帯と頸部屈曲部の間には径2cmの焼成後の穿孔が2ヵ所穿かれている。器面調整は、外面は横方向のヘラ磨きを基調とし、突帯と周辺部は横撫で仕上げである。内面は撫で仕上げである。色調は薄茶色をし、胎土には角閃石と斜長石の他、金色の雲母を多量に含む。

2は土坑の中央部から北側にかけて散乱した状態で出土した壺形土器である口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部はやや肥厚する。口径は約27cmで、器高は30cm弱

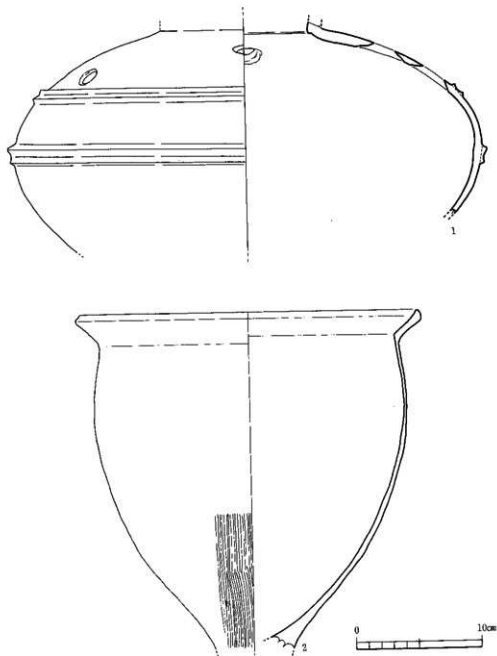


第90図 向野遺跡市場地区2号弥生土坑実測図

であろう。器面調整は、内面と口縁部周辺は無であるが、胴部外面は縦方向の刷毛目で仕上げている。しかし、外面上位の剝落は著しい。色調は茶褐色で、胎土に角閃石と斜長石を含む。これらの土器は、弥生時代中期後半と考えられる。

2) 古代の遺構と遺物

明確な古代の遺構はⅣ区の東端で検出された井戸や溝などがある。これ以外には掘立柱建物



第91図 向野遺跡市場地区2号弥生土坑出土土器実測図

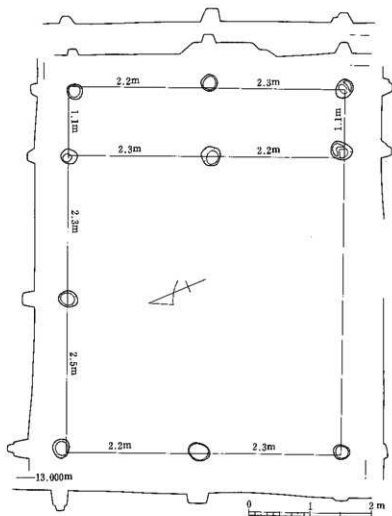
が3軒検出された。この建物群は遺物が明確ではないため、時期の決め手に欠く。しかし、遺構周辺の状況や出土遺物から、古代の遺構と考え報告を行う。

(a)建物遺構

建物遺構は、調査区の東隅で重複あるいは接近した状態で検出された。

1号建物

1号建物は南北2間の4.5m、東西2間で東側に廂が付くと考えられ、長さは5.9mの規模である。柱筋はほとんど直角で、一部後世の削平や掘り込みにより柱穴が失われているが、検出面での柱穴の径は30cm前後である。また、検出面からの深さは、10~35cmである。廂部を入



第92図 向野遺跡市場地区1号建物実測図

れた床面積は26.5㎡である。

2号建物

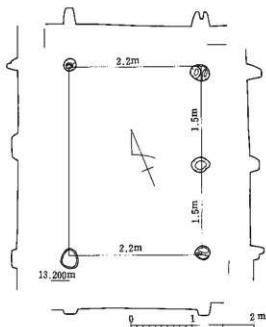
2号建物は、1号建物の北西部で重複する。規模は南北方向に2間で3m、東西方向に1間で2.2mで、床面積 6.6㎡と建物としては小規模である。しかし柱筋はほとんど直角に建てられているが、西側の柱穴は削平を受け不明である。検出面での柱穴の径は20~30cmで、深さは10~30cmである。

3号建物

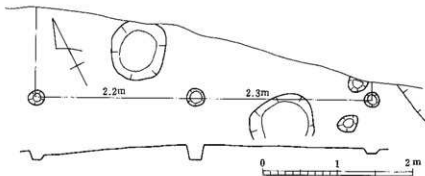
3号建物は、重複して検出された1号建物と2号建物の北側約1mの近接した位置に存在する。しかし、大部分は調査区外に当たり、南側の柱穴列しか検出できなかった。その規模は東西方向に2間で4.5m、柱穴間は2.2mと2.3mである。柱穴の検出面での大きさは、20cm強で、残されている深さは10~20cmである。

(b)井戸遺構

市場地区からは4基の井戸が検出された。この内古代の井戸は1基のみで、他は遺物が出土しなかったが、状況から見て中世や近世の井戸と考えられる。このことは、微高地が長期にわたり継続的に集落として存続してきたことを示している。



第93図 向野遺跡市場地区2号建物実測図



第94図 向野遺跡市場地区3号建物実測図

ここに報告する井戸は市場地区Ⅳ区の東端、すなわち微高地の東縁、微高地を見下ろす位置に立地する。このため井戸の検出面の東側は低湿地に続く斜面になっている。井戸の規模は、検出上面は直径 1.4m のほぼ円形で、検出面から掘り込み底面までの深さは約 1m で、直径 1.1m であるが、東側が約 15cm 高くなっている。

この掘り込みの中には、直径 70cm 以上の丸太を厚さ 5cm に削り貫いた井戸枠が据えられている。この井戸枠は掘り込み底面より約 10cm 浮かせた状態で設置されている。井戸枠の検出状況は、半載された状態であったが、本来は円筒形の井戸枠が割れたものか、あらかじめ半載されたものか、または異なる半載井戸枠を組み合わせたものかは不明である。また、井戸枠の東側には直立した木材も検出された。なお概報では、井戸枠の下に川原石が敷き詰められていたと報告されている。

遺物は、井戸枠内から出土した。出土状態は、井戸枠底面から約 15cm 上位の位置で土師器の皿や坏が割れた状態で出土した。1・

2・6 は井戸中層出土の土器である。

底部は回転ヘラ切りで、他の部分は横

撫で仕上げである。1 は口径 8.4cm、

器高 1.7cm、2 は口径は 14.6cm、器高

1.6cm で、3 は口径 16cm、器高 4.6cm、

底径 7.3cm である。いずれの土器にも

角閃石・斜長石を含む。色調は、1・

3 は明茶色、2 は白茶色である。3

～5・7 は土師器の坏である。器面は

底部が回転ヘラ切りで、他は撫で仕

上げである。3 は口径 12.4cm、器高 4.1

cm、4 は口径 12.8cm、5 は口径 12.8cm、

器高 3.7cm、7 は口径 15.4cm、器高 3.7

cm である。いずれも角閃石・斜長石を

含み、色調は 3・5・7 が明茶色で、

6 は白茶色である。8～10 は高台付き

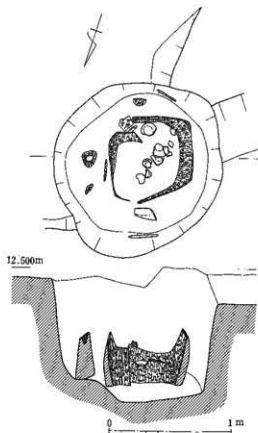
の底部である。底径は、8 が 7.8cm、

9 は 7.1cm、10 も 7.1cm である。胎土

にはいずれも角閃石・斜長石を含む。

色調は外面は白茶色であるが、8・9

は内面が黒色の、いわゆる内黒土器で



第95図 向野遺跡市場地区2号井戸実測図

ある。これらの遺物から、この井戸は9世紀に構築された遺構と考えられる。

(c)溝

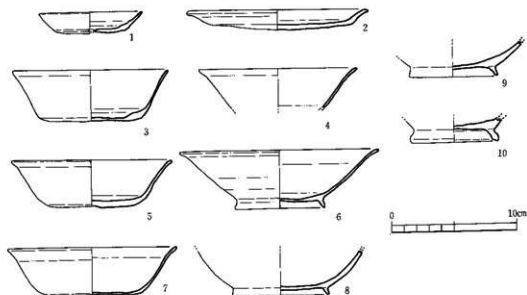
第97図は市場地区で数条検出された溝から出土した土器である。

1号溝からは1・2が出土した。1は須恵器の見受け付きの坏蓋である。口径は10cmである。器面は天井部はヘラ切りで、他は横撫である。胎土に石英を含む。2は底部が回転ヘラ切りの土師器の坏である。口径は13.3cmで、器高は3.6cmである。

2号溝からは3～6が出土した。3は高台付きの須恵器の坏で、口径は13.4cmで、器高は4.4cmである。4は土師器の皿である。口径14.2cm、器高1.7cmで撫で仕上げである。5は須恵器の壺形土器と考えられる。器面は撫で仕上げで、口径は15cmである。6は口縁部が外反し、胴部が直線的になる壺形土器である。口径24cmで、胎土には角閃石。斜長石を含み、器面は撫で仕上げである。

3号溝からは7が出土した。底部は回転ヘラ切りである。色調は黄茶色で、胎土に角閃石と多量の赤色粒子を含む。

5号溝からの出土は8～15である。8は身受けのある坏蓋である。器面は天井部が回転ヘラ切りで、他は横撫である。口径は9cmである。9～14は高台の付く坏である。器面は底部が回転ヘラ切りで、他は横撫である。9は口径9.3cm、器高3.6cm、底径6cmで、10は口径13cm、器高4.8cm、底径9.4cm、11は口径12.4cm、12は底径9.8cm、13は底径10.3cm、14は口径12.3cm、器高4.4cm、底径8cmである。15は口縁部が外反する土師器の壺形土器である。口径



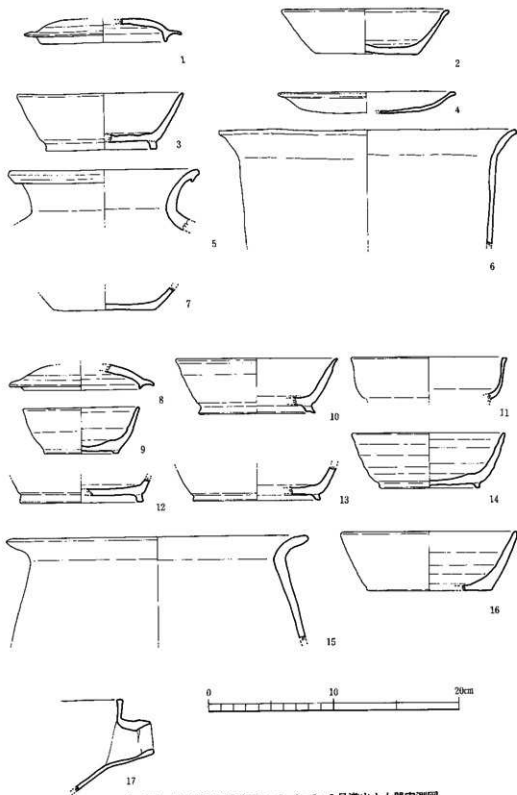
第96図 向野遺跡市場地区2号井戸出土土器実測図

は23.6cmで、器面調整は外面は撫でであるが、内面は縦方向の削り状の調整である。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は茶褐色である。16は、土師器の坏である。底部には糸切り痕があり、口径14.3cm、器高は4.7cmで、器面は横撫でである。この土器は混入の可能性が高い。

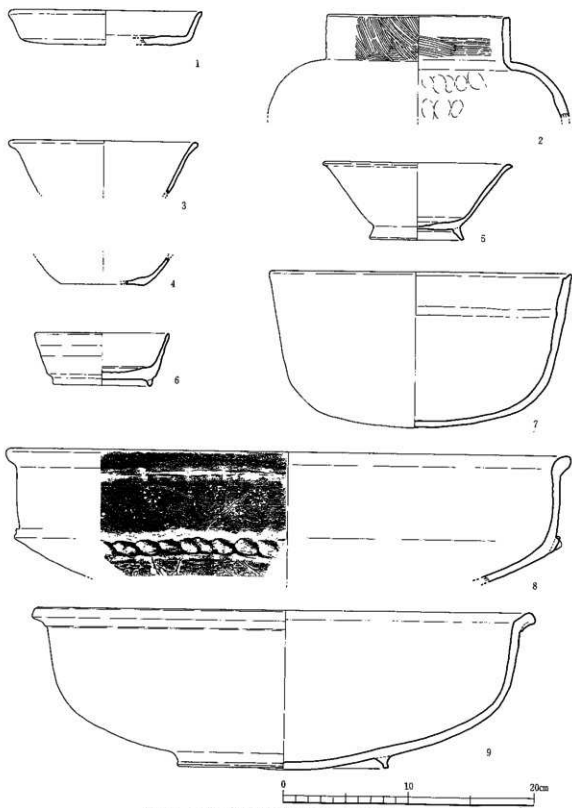
6号溝からは16が出土した。この土器は薄く、器面は削りや横撫でで調整されている。胎土には角閃石の他、金色の雲母も認められる。

(d)市場地区出土土器

第98図は市場地区の各遺構出土の土器である。1は包含層出土の須恵器である。広い底部から短い体部が立ち上がる。口径は15.4cm、器高は2.7cmで、器面は横なでである。2は、1号井戸に混入していた土器である。口径14.7cmで、器面は口縁部周辺が刷毛目、胴部は外面が撫で、内面には指圧痕が残る。また外面にはススが付着している。弥生後期の土器と考えられる。3・4は柱穴状の掘り込みから出土した土師器の坏である。3の口径は15.2cmで器面は撫で仕上げである。4は底径6.6cmで器面は撫で調整されている。5は高い高台の付く坏である。口径15.3cm、器高6.1cm、底径7.7cmで、白茶色を呈する。6は、高台付きの須恵器の坏である。器面は底部が回転ヘラ削りの後撫で、他の部分は撫でである。口径は10.7cm、器高は4.2cm、底径は8cmを測る。7は口径24cm、器高12.4cmである。直線的に立つ口縁は端部で尖るように成形されている。底部は丸底で鍋状を呈している。このため、外面にはススが多量に付着する。8は直線的に体部に沿って伸び口玉縁状の口縁部を形成する。丸い底部と体部の屈曲部には斜めの太い刻目を加えた突帯が巡る。口径は30cmである。9は6号土坑出土の高台の付く大鉢である。器面は撫で調整されている。底部には高台が付くが、丸い底部の先端が高台より下に出る。このため不安定である。明茶色を呈する。8・9は近世のものと考えられる。



第97图 向野遺跡市場地区1・2・3・5・6号清出土土器実測图



第98図 向野遺跡市場地区各遺構出土土器実測図

3 ラソワ地区の調査

(1) 調査の概要

向野遺跡ラソワ地区は市場地区の東に隣接して設定された調査区である。調査区は微高地である西側の市場地区と、同じく微高地である繪極地区の西側に挟まれた低地である。調査区の規模は国道10号線に沿った長さ60m、幅25mの範囲である。調査区内からは東西に延びる細い溝と南北に延びる幅の広い溝が検出されたほか、200基を越す土坑群が検出された。

遺物は土坑群を中心に出土し、一部は土坑内に埋置された状態であった。

(2) 調査の成果

1) 遺構

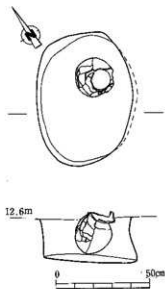
① 土坑 (第99図、第101図、第102図)

検出された土坑は調査区内の約1000㎡の狭い範囲に集中的に掘り込まれている。第100図に見られる不定形な掘り込みは、その底面の観察から、複数の円形土坑が複雑に切り合っ形成していることが認められた。しかし、土層の観察からは新旧の関係を明らかにすることはできなかった。各土坑の規模は、小さいもので直径60cm、大きいもので直径180cmを測るが、直径約1m程度の規模の土坑が多い。また遺構の深さは検出面から約10cmから20cmである。形態は円形や楕円形を呈するものが多い。

1号土坑 1号土坑は長さ70cm、短径50cmの楕円形を呈し、床面は平坦である。検出面からの深さは20cmをはかる。遺物は、ほぼ直立した壺形土器が意図的に埋置された状態で出土した。この他、遺構内を調査中に大きな土器片もまとめて出土した。こうした土器からこの遺構は古墳時代初頭に位置付けられる。

101号土坑 群集して検出した土坑群の西北隅で検出され遺構である。直径約60cmのほぼ円形の土坑で、検出面からの深さは約25cmである。床面はほぼ平坦であるが、西隅が長さ30cm、幅10cm、深さ5cmで掘り下げられている。遺物は床面から5cm浮いた状態で、甕形土器の口縁部から胴部にかけての大きな破片が出土した。この土器から遺構の時期は弥生時代後期末と考えられる。

304号土坑 土坑群の西端で検出した大型の土坑である。上面の長径約170cm、短径140cmの楕円形を呈する。検出面から約30cmで床面になり、床面は中央部が窪む。遺物は土坑内の東側で、甕形土器の口縁部と底部が、床面から約10cm浮いた状態で出土



第99図 向野遺跡ラソワ地区
1号土坑実測図

した。これらの土器から、この遺構は古墳時代初頭に位置付けられる。

② 溝遺構

溝遺構 調査区の西壁から東に向けて延びる溝が確認された。規模は長さ10m、幅60cmで検出面からの深さは10cmである。遺構内から遺物はまったく出土しなかった。

大溝 調査区の東端で南北に延びる大きな溝状遺構が検出された。遺構の規模は、確認された長さ20m、幅5～7mで、検出面からの深さは約30cmである。遺物はわずかに出土したが、時期を決定できる良好な資料はなかった。

2) 遺物

向野遺跡ヲソフ地区からは、遺構検出時や土坑内から土器や石器が出土した。出土量は多くはないが、この地区の遺構の時期を決定するには十分な資料であった。

① 土器

第103図の1～4は1号土坑出土の土器である。1・3は口縁部がやや外反する短頸の壺形土器である。1に比較すると、3は胴部が球状に張る。2点とも器面は摩滅しており、調整は不明である。明茶色を呈し、胎土に角閃石・斜長石を含む。2は長胴の変形土器である。器面はやはり摩滅しており、調整は判らない。白灰色で胎土に角閃石・斜長石を含む。4は平底で器壁の厚い変形土器の底部である。この土器の摩滅しており、器面調整は不明である。胎土に角閃石・斜長石を含み、白茶色を呈す。この底部は他の土器と時期が異なり、弥生時代中期前半である。

5・6は203号土坑出土で、5は鉢形土器である。外面は摩滅しているが底部近くに叩きの跡が見られる。内面は撫で仕上げである。淡褐色で胎土に角閃石を多量に含む。6は丸底の底部である。器面は摩滅している。白茶色で胎土に角閃石と斜長石を含む。

7は304号土坑出土で、器面調整は、撫でが胴部の内外面と口縁端部、刷毛目が口縁部の外側は縦方向、内面は横方向で仕上げられている。白茶色を呈し、胎土に角閃石・斜長石を含む。

8は305号土坑出土の丸底の底部である。内外面とも刷毛目による器面調整で、明茶色を呈し、角閃石・斜長石を含む。

第104図の1は313号土坑出土の短頸の壺形土器である。頸部は直立し、胴部は球状に張る。器面調整は口縁部が内外面とも横撫で、胴部は外面撫で、内面は撫での後筧磨きされている。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は明茶色を含む。

2は314号土坑出土の壺形土器である。口縁部はやや肥厚し、器面調整は摩滅しており不明である。胎土に角閃石・斜長石を含み茶褐色を含む。

3は318号土坑出土の底部である。底部は平面の名残が残るレンズ状になる。器面は摩滅し、胎土に角閃石・斜長石を含み、白茶色を呈する。

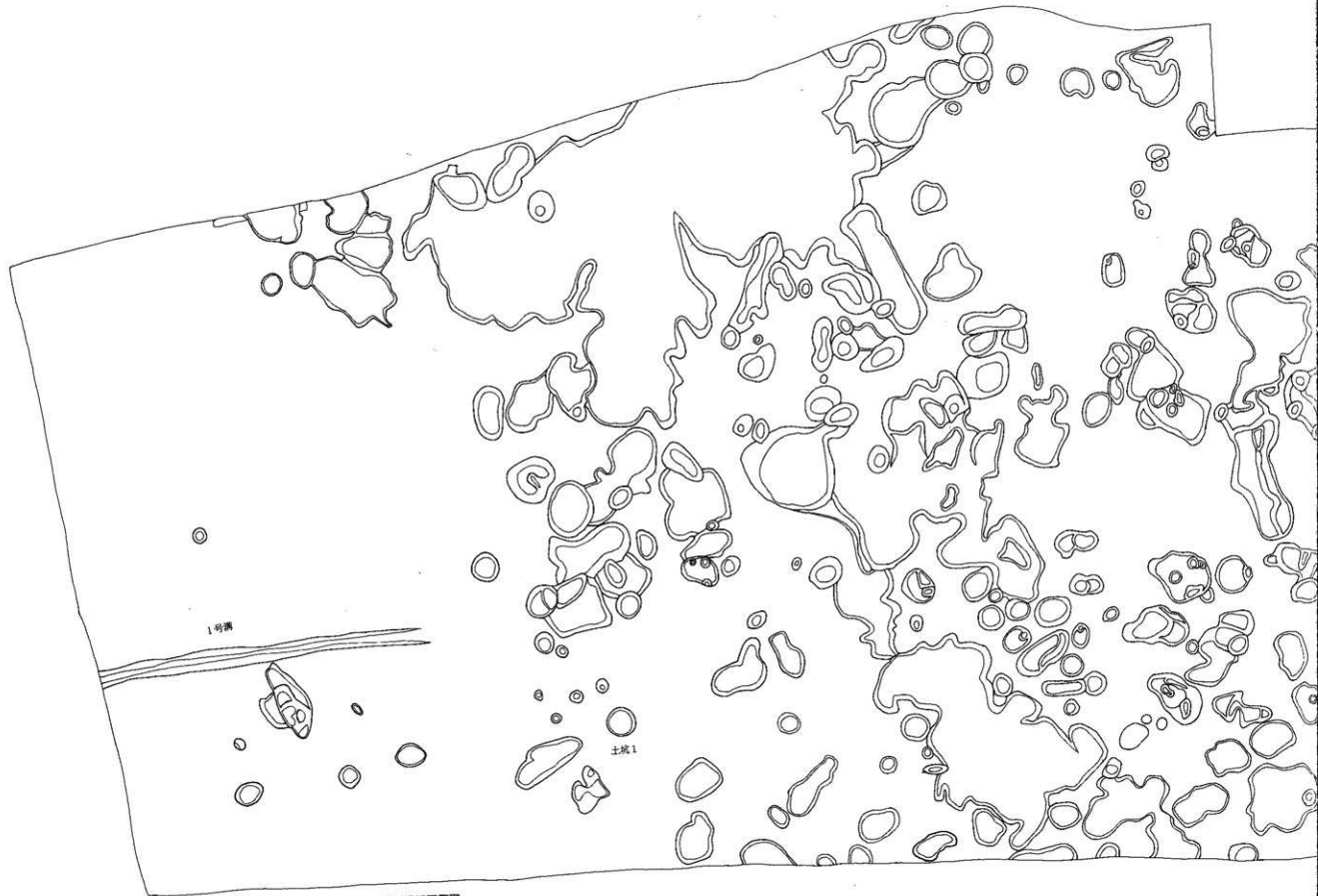
4～6は319号土坑出土の土器である。4は口径の大きい鉢形土器と思われる。器面は摩滅し



大溝

10

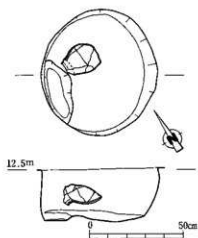
20m



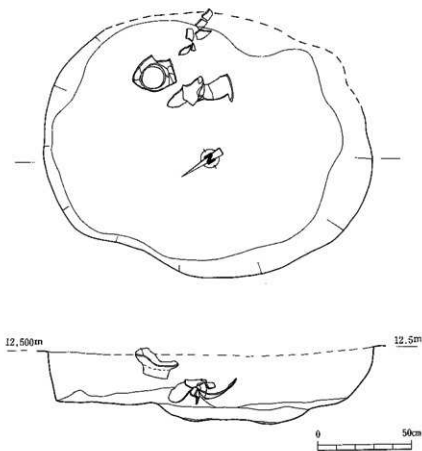
第100図 向野遺跡マソラ地区遺構配置図

ているが、口縁部は横撫である。5は壺形土器で器面調整は、内外面とも刷毛目のあと口縁部は横撫で、胴部内面も撫で仕上げである。6も壺形土器の不安定な形態の底部である。器面調整は外面が粗い刷毛目、内面は撫で仕上げである。また内面には煮コグのあとがある。3点とも胎土に角閃石・斜長石を含むが、4には特に多く含まれる。色調は4は灰褐色、5・6は薄茶色を呈する。

7は402号土坑出土の壺形土器である。口縁部は直



第101図 向野遺跡ヲソフ地区101号土坑実測図



第102図 向野遺跡ヲソフ地区304号土坑実測図

立し、胴部は球状に張る。器面調整は口縁部が内外面横撫で、胴部の外面は撫でのあと筥磨きで、内面は刷毛目のあと撫で仕上げである。胎土に角閃石・斜長石を含み、白茶色を呈する。

第105図1は403号土坑出土の長胴の壺形土器である。器面は口縁部が横撫で、胴部は内外面撫でのあと筥磨きであるが、内面は横方向の筥磨きで仕上げられている。胎土の角閃石・斜長石を含み、白茶色を呈する。

2は405号土坑出土の胴部が球状に張る壺形土器である。器面調整は口縁部が横撫で、胴部外面中位から下にかけて叩きが見られ、内面は削りのあと撫で仕上げである。また、外面にはスガが付着している。胎土に角閃石を含み、白茶色を呈する。

3は315号土坑出土の壺形土器である。器面調整は前面横撫で、胎土の角閃石・斜長石を含み、灰褐色を呈する。

4は422号土坑出土の壺形土器である。器面は口縁部が横撫で、胴部外面が刷毛目調整で、胴部内面は削りのあと撫で仕上げである。胴部中位にはスガが付着している。胎土に角閃石・斜長石を含み、白茶色を呈する。

5は424号土坑出土の丸底の鉢形土器である。器面は撫で仕上げで、底部は二次的に被熱しており、その上位にスガが付着している。胎土に角閃石・斜長石を含み、白茶色を呈する。

第106図の1は419号土坑出土の壺形土器で、内外面撫で仕上げである。胎土に角閃石・斜長石を含み、白茶色を呈する。

2は425号土坑出土の壺形土器で、器面は全面撫で仕上げである。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は白茶色を呈する。

3は425号土坑出土の胴部が球状に張る壺形土器で、器面調整は口縁部から胴部内面は横撫で、胴部外面は細かい刷毛目調整で仕上げられている。また、胴部の下位にはスガが付着している。胎土に角閃石・斜長石を含み、茶褐色を呈する。

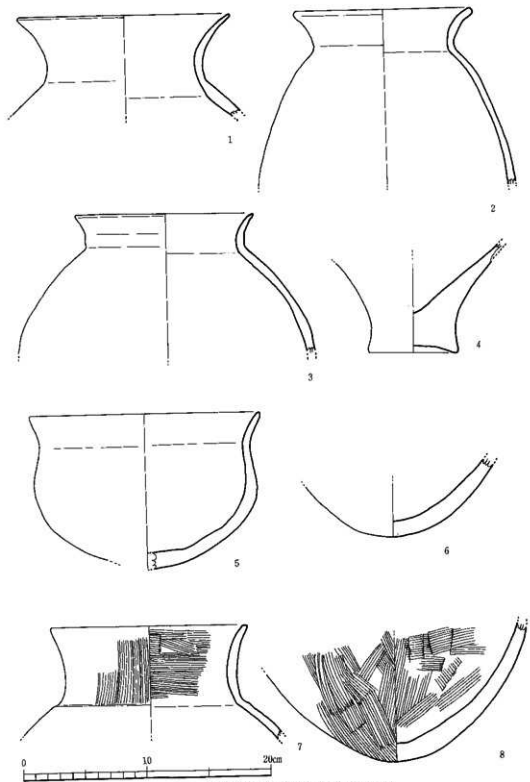
4は503号土坑出土の平底の壺形土器と考えられる。内外面撫で仕上げで、胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は内面が白茶色、外面が赤茶色である。

5は504号土坑出土の短頸の壺形土器と考えられる。器面は撫で仕上げで、胎土に角閃石・斜長石を含み白茶色を呈する。

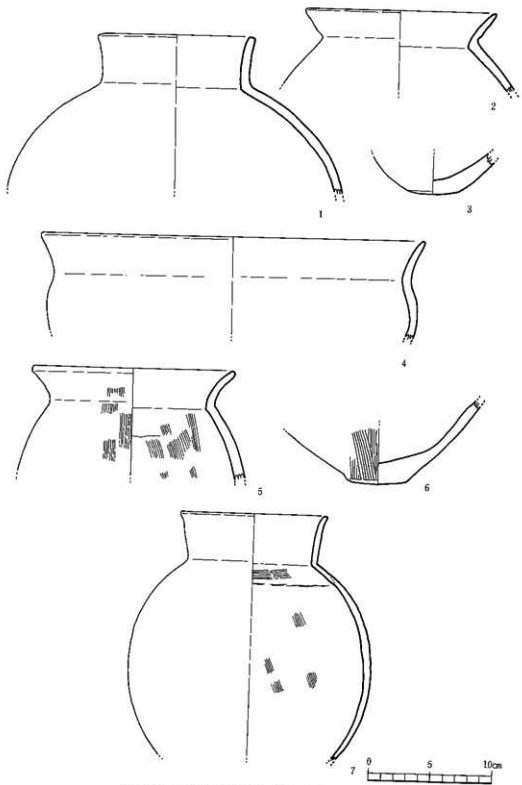
6は508-A号土坑出土の椀形土器である。器面は撫で仕上げで、胎土に角閃石・斜長石のほか姫島産黒曜石も含まれる。色調は黄褐色を呈する。

7・8は508-B号土坑出土の土器である。7は鉢形土器で、器面調整は口縁部から胴部外面が刷毛目のあと撫で仕上げであるが、胴部内面は撫で調整で、指圧痕も認められる。

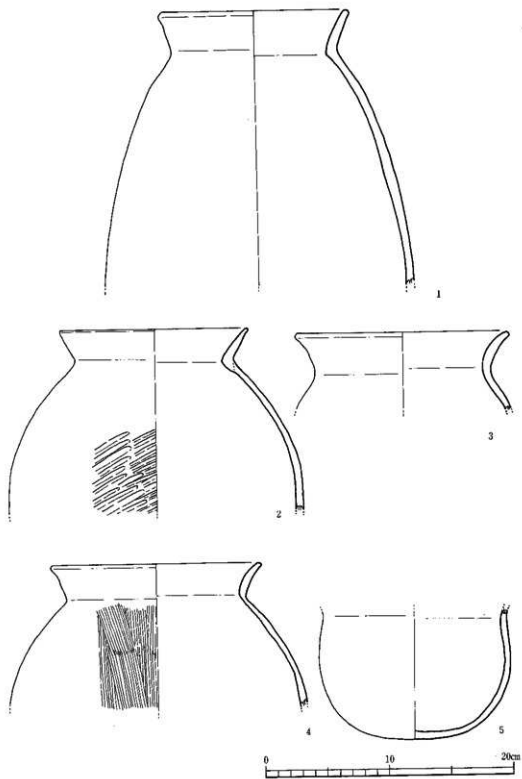
8は壺形土器である。器面調整は摩滅しており不明であるが、頸部内面には指圧痕ご残り、胴部内面中位には粘土の継目も観察される。粘土に角閃石・斜長石を含むが、8には多く含まれる。2点とも白茶色を呈する。



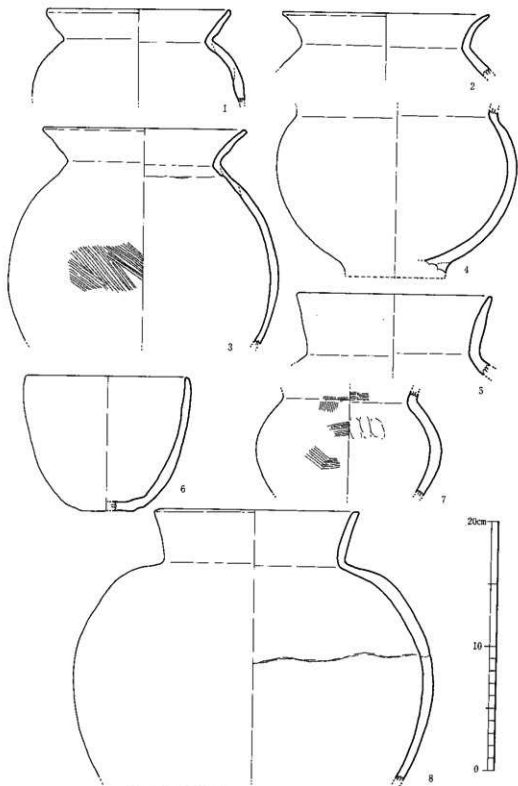
第103図 向野遺跡ヲソヲ地区出土土器実測図(1)



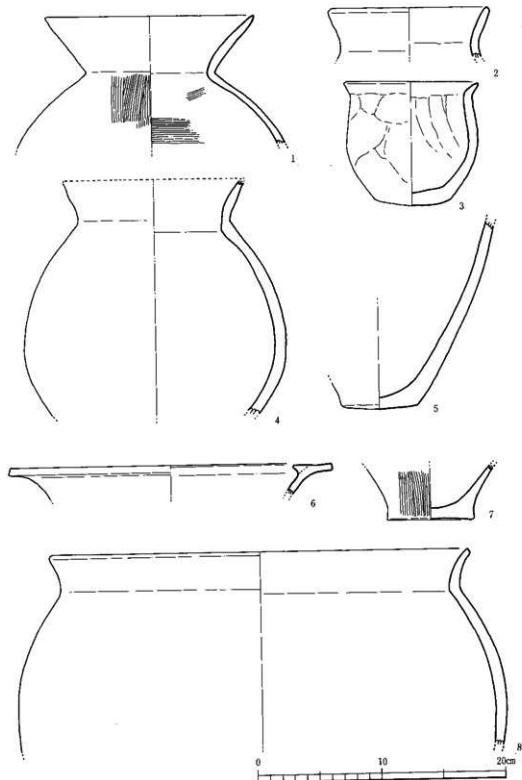
第104図 向野遺跡ヲソラ地区出土土器実測図(2)



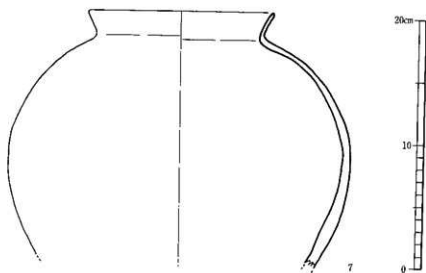
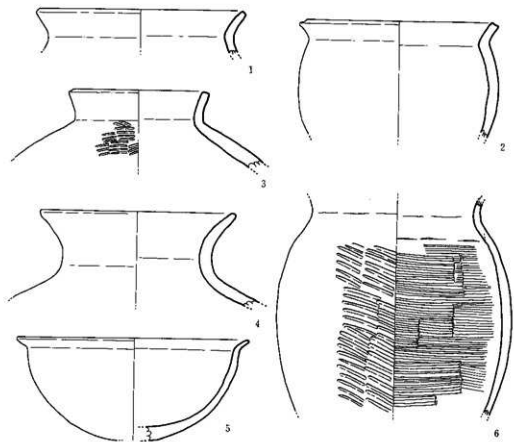
第105図 向野遺跡ヲソノ地区出土土器実測図(3)



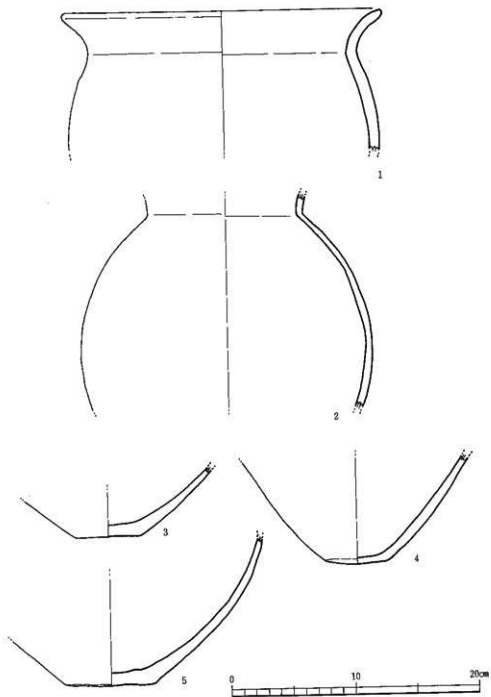
第106図 向野遺跡ヲソラ地区出土土器実測図(4)



第107図 向野遺跡ソノ地区出土土器実測図(5)



第108図 向野遺跡ヲソラ地区出土土器実測図(6)



第109図 向野遺跡ヲソラ地区出土土器実測図(7)

第107図の1は510号土坑出土の口縁部の長い壺形土器である。器面調整は口縁部が横撫で、胴部は外面が縦、内面が横方向の刷毛目調整である。胎土の角閃石・斜長石を含み、明茶色を呈する。

2・3は519号土坑出土の土器である。2は壺形土器で3は鉢形土器である。器面は2が横撫で、3は手づくねで指跡が残る。2点とも胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は灰褐色を呈する。

4は522号土坑出土の土器である。器形は壺形土器に類似するが、外面は丹塗り研磨されている。内面も口縁部周辺は丹塗りされており、胴部は撫で仕上げである。胎土に角閃石・斜長石を含み、胴部に黒色斑がある。

5は520号土坑出土の壺形土器の底部である。形態はレンズ状になっており不安定である。器面は摩滅しており調整は不明である。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は茶褐色である。

第107図6から第108図5はヲソバ地区の遺構を検出中に出土した遺物である。6は鐘先状口縁の壺形土器である。器面は横撫で仕上げられている。7は平底の壺形土器の底部である。外面は刷毛目調整、内面は撫で仕上げである。2点とも茶褐色で胎土に角閃石・斜長石を含む。これらの土器は、形態から弥生中期後半に属する。

第107図5から第108図1～3・6・7、第109図1・2は壺形土器である。器面調整は5が摩滅し不明である。第108図1は横撫で仕上げで、2は内面から口縁部外面にかけて撫で仕上げで、胴部外面は横方向の磨きである。3は口縁部から内面にかけては撫で仕上げであるが、胴部外面は叩きである。6は口縁部を欠くが、頸部内外面は横撫で仕上げで、胴部外面は叩き、内面は刷毛目で器面調整されている。7は摩滅のため器面調整は不明である。第109図1は内外面撫で仕上げで、胴部外面は斜め方向の撫で仕上げである。2も内外両面撫で仕上げと思われるが、摩滅が激しい。胎土にはいずれも角閃石と斜長石を含む。色調は、包含されていた土壌の影響のためか、灰茶色や白茶色などを呈する。

第108図4は壺形土器と思われるが、全体の器形は不明である。器面調整は口縁部が横撫で、あるいは胴部は摩滅のため不明である。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は灰茶色を呈する。5は鉢形土器である。わずかに観察できる底部から平底と考えられる。器面は摩滅しており器面調整は不明である。胎土に角閃石・斜長石を含み、白茶色を呈する。

第109図3～5は底部の資料であるが、器形は壺形土器か壺形土器かは不明である。3・5は平底の底部である。3は器面は摩滅しているが、一部に磨き跡が見られる。5は平底であるが、わずかに丸味がある。器面は撫で仕上げである。底部には黒色斑が認められる。胎土の角閃石・斜長石を含み、白茶色を呈する。4は平底の名残のあるレンズ状の底部である。器面は内外面撫で仕上げである。胎土の角閃石・斜長石を含み明茶色を含む。

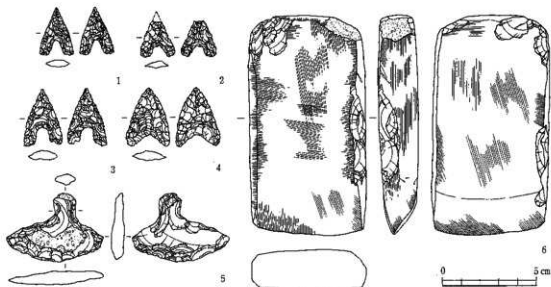
② 石器

第110図は包含層や土坑出土の石器である。1～4は石鏃で、1は1号土坑から出土したチャート製のものである。長さ2.5cm、幅1.8cmで重さは1.0gである。2～4は包含層出土である。3点とも姫島産黒曜石であるが、3はガラス質安山岩で、透明感がない。2は長さ2.1cm、幅1.7cm、重さ0.8g。3は長さ3cm、幅1.6cm、重さ2.2cmである。4は長さ3.2cm、幅2.3cm、重さ2.1gである。以上の石鏃は両面加工された丁寧なものである。5は318号土坑出土のサヌカイト製の石匙で、主要剝離面の反対側には自然面が残されている。大きさは長さ、5.2cm、幅3.6cmで重さは10.2gである。刃部の加工は両面から行われているが、鋭くない。6は包含層出土の偏平刃石斧である。石材は薄緑色をしているが安山岩と思われる。一部に剝離面が残るが全面を磨きあげている。長さ11.6cm、幅6.3cm、厚さ1.8cmで重さは305gである。

(3) 小 結

向野遺跡ヲソワ地区で出土した土坑は、比較的規模や形態に規格性が認められる。このことはこの土坑を掘削する理由や起因が同じ事柄によるものと思われる。またこの土坑群は、出土した遺物から時期を考えると、弥生時代後期前半から古墳時代前葉と思われる。また、出土土器は、甕形土器と鉢形土器が主体を占め、壺形土器や高坏等祭祀的色彩を帯びる土器は見られない。さらに、柱穴などの継続的な生活に直接関係する遺構も検出されていない。

こうした土坑群に対し、近畿地方では群集型土坑墓群としてとらえ、当時の会社の被支配者層の墓地と考える見解がある。しかし、九州ではこれまで調査されているこの時期の墓は弥生時代中期の伝統を継承したと思われる伸展葬による埋葬方法で、土坑墓・木棺墓・石蓋土坑墓・



第110図 向野遺跡ヲソワ地区出土石器実測図

石棺が一般的である。しかもこうした墓地は平野を見下ろす大地の端や丘陵上に立地する場合が多い。

以上の九州の墓地の状況からヲソツ遺跡の土坑を見ると、土坑の形態や立地で様相を異にする。墓坑群と考えるなら、先に述べた木棺墓・石棺墓に埋葬された以外の人々を埋葬したものが、または近畿地方の葬制がこの時期に宇佐平野に伝播したとも考えられる。

また、出土土器に祭祀的な色彩が欠け、煮炊き用の変形土器が多く出土していることから、何らかの作業場的な場所とも考えられる。

こうしたことから、この土坑を墓坑とするには客観的資料にかけており、また何らかの作業場と考えるにはまだ資料が不足している。今後は科学分析のなどを含めた調査を行い土坑の性格を明らかにする必要がある。

4 繪極地区の調査

(1) 調査の概要

向野遺跡繪極地区は川楽地区の西側に設定された調査区である。調査区は微高地である東側の川楽地区と同じく西側の微高地である市場地区に挟まれた低湿地である。調査区の規模は国道10号線に沿った長さ120m、幅20mの範囲を調査した。調査区内の中央部からは遺構は検出されなかったが、西側で複雑に重複した土坑群が検出された。また、東側でも10数基の土坑群を検出した。そこで、西側の土坑群をA区、東側の土坑群をB区として報告する。

(2) 調査の成果

1) 遺構

土坑

A区で検出された土坑は、調査区内の西側約800m²の狭い範囲に集中的に掘り込まれている。その広がりや、さらに西側に延びるようである。第112図に見られる不定形な掘り込みは、その底面の観察から、複数の円形・楕円形・隅丸方形の土坑が複雑に切り合って形成していることが認められる。しかし、土層の観察からは新旧の関係を明らかにすることはできなかった。各土坑の規模は、小さいもので直径60cm、大きいもので直径4m×2mを測るが、直径約2m程度の規模の土坑が多い。また遺構の深さは検出面から約10cmから20cmである。

次に代表的な土坑を説明する。円形土坑は8・26・29・34・40号土坑が代表的なもので、直径は1mから2mで規模は異なるが、ほぼ円形を呈する。また、楕円形になる9・22・36号土坑も長軸が2mから2.5mと規模が異なる。さらに、隅丸方形は18・24・35号土坑がそれであるが、これも24号土坑が3.5m×3.5m、18号土坑が2m×1.4mと規模が異なる。しかし、一番多数を占めるのは不定形な形態をした土坑である。

A区の土坑群に比較すると、重複状態が単純であるB区の土坑も、A区同様に円形・楕円形・

方形等の形態が見られる。円形は3・6・7号土坑であるが、直径は1mから50cmと規模に差が見られる。また、2・14・21号土坑は楕円形または小判型を呈する土坑であるが、この土坑は長軸が1.2m前後とほぼ一定しており、規格化している。さらに、1・9号の方形土坑も一辺が約1mで比較的規格性が認められる。これ以外の土坑は不定形である。

溝状遺構

溝状遺構は2ヵ所で検出された。溝1は調査区の北に約2m離れて平行に、幅約3mのトレンチを設定して調査した際検出したものである。溝の幅は約50cmで、未掘部分で「く」の字状に屈曲するようである。このため、南側の調査区では検出されなかった。この溝の深さは約10cmである。

溝2はA区で検出した土坑群の中央部で検出されたもので、幅は約50cm、深さは約10cmである。溝は不規則に屈曲し、39号土坑で重複し終わっている。

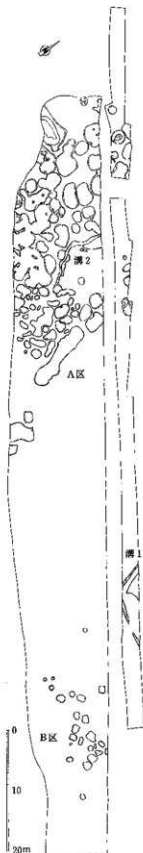
2) 遺物

繪極地区から出土した遺物は、A区の土坑内から出土したもので、しかも土器片のみであった。第114図と第115図に図示した土器がそれである。

土器

第114図1～3は2号土坑出土の土器である。いずれも壺形土器であるが、1は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部が跳ね上がり状になる。器面調整は口縁部が横方向のナデ仕上げであるが、胴部は摩滅しており不明である。2・3は同一個体と思われる土器で口縁部は「逆L字」状になる。平坦な口縁部と胴部の接合部には粘土帯が巻かれ補強しており、胴部には断面「M」字の突帯が3条めぐる。器面調整は摩滅しており不明であるが、この地域のこれまでの例から推測すると丹塗り磨研の可能性が高い。胎土に角閃石・斜長石を含む。

4・5は5号土坑出土の土器である。4は壺形土器の胴部で、「M」字突帯が3条認められる。器面調整は摩滅して



第111図 向野遺跡繪極地区遺構配置図

いるため不明であるが、3と同様丹塗り磨研の可能性が高い。5の底部は、底面の厚さが薄く、胴部の角度から考えると壘形土器と思われる。器面調整は撫で仕上げで、白茶色を呈する。胎土に角閃石・斜長石を含む。

6は6号土坑出土の壘形土器である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は肥厚しやや跳ね上がり状になる。口縁部と胴部の屈曲部の下位に断面三角形の突帯が一条めぐる。器面調整は口縁部は横撫で仕上げであるが、胴部は摩滅しており不明である。胎土には角閃石・斜長石を含み、色調は白茶色を呈する。

7・8は8号土坑出土の土器で、壘形土器の底部である。7の底部はやや上げ底気味になり、端部が外に張り出す。底面の器壁は薄く、胴部とほぼ同じである。器面調整は内外面とも撫で仕上げである。8の底部は底面を欠く資料である。胴部の角度から推測すると壘形土器で、器面調整は内外面ともに撫で仕上げで、薄茶色を呈する。2点とも胎土に角閃石・斜長石を含む。

第115図1は10号土坑出土の壘形土器である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は跳ね上がり状になる。胴部の膨らみは小さく、直線的である。器面調整は口縁部が横、胴部は縦方向の撫で仕上げである。色調は淡茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。

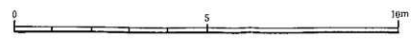
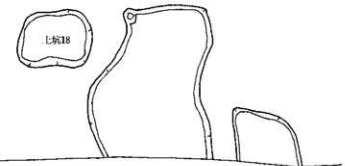
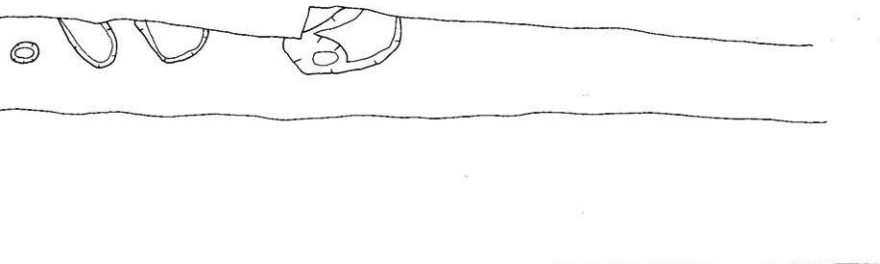
2・3は11号土坑出土の底部である。2・3とも底部と胴部の角度から推測すると、壘形土器と思われる。2の底部は薄く、わずかに丸味をおびる。3は底部の一部を欠くが、胴部との接合部を厚くしている。2点とも器面調整は内外面ともに、撫で仕上げで、淡茶褐色を呈する。また胎土には角閃石・斜長石を含む。

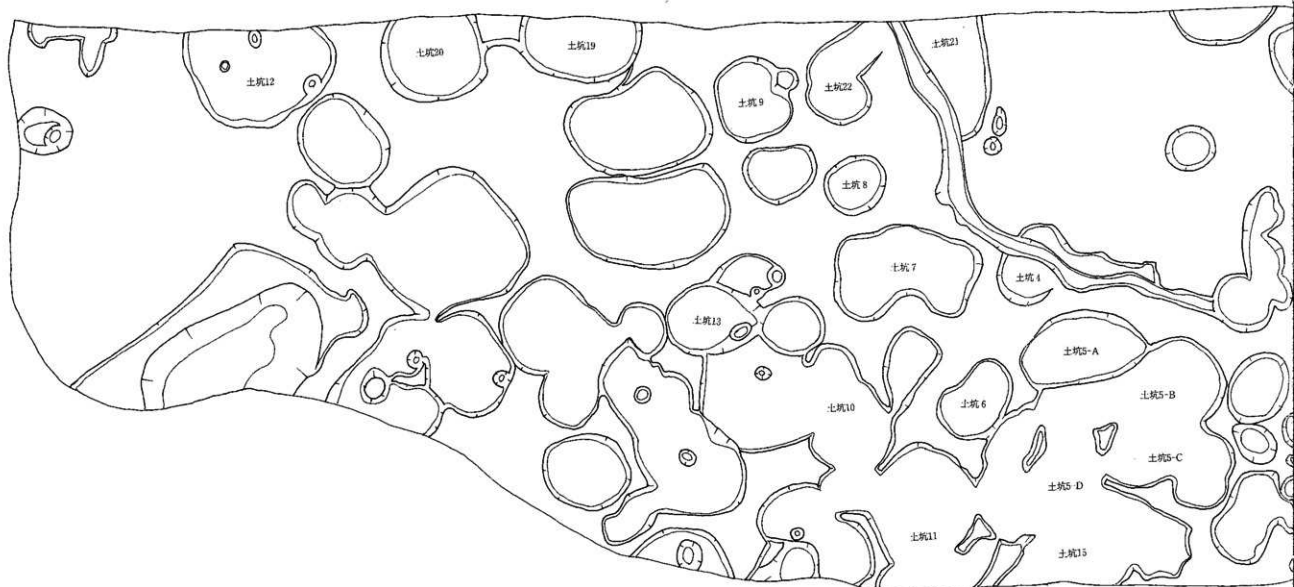
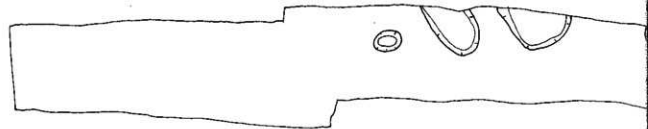
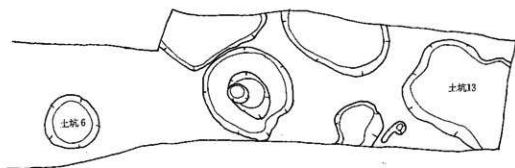
4・5は13号土坑出土の壘形土器である。2点とも口縁部が「く」の字状に屈曲するが、4は内面に稜を生じ、5は丸味を帯びる。また4は口縁外端部が肥厚し5は口縁内端部が跳ね上がり状に肥厚する。器面調整は、両者とも口縁部が横撫でであるが、5の胴部の調整は不明である。色調は4が白茶色、5が薄茶褐色で、胎土には角閃石・斜長石を含む。

6は17号土坑出土の土器である。底部と胴部の角度から推測すると壘形土器と思われる。底部はやや上げ底になり、器面調整は内外面とも撫で仕上げである。色調は茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を多く含む。

7・8は遺構検出の際出土した土器である。7が口縁部、8が底部であるが2点とも壘形土器である。7は口縁部が内側に稜を生じて「く」の字状に屈曲し、口縁部と胴部の接合部には粘土帯を巡らせ補強している。8の底部の器壁は薄く、胴部と大きさは差はない。器面調整は両者とも撫で仕上げで、色調は茶褐色を呈する。胎土には角閃石・斜長石を含み、特に8には角閃石が目立つ。

9は溝1出土の遺物である。この土器は、瓦質で、外面は灰黒色を呈する。口縁部は内傾し、高台風になる底部には3ヵ所半円形の切れ込みが入る。前面撫で仕上げであるが、外面はさらに横方向の鋭磨きがされている。近世の遺物である。



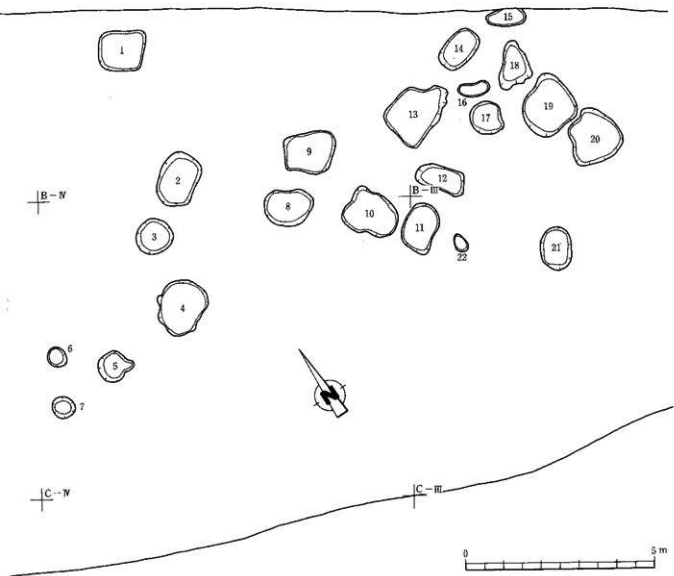


第112图 向野遗址铸铜地区(A区)遗址配置图

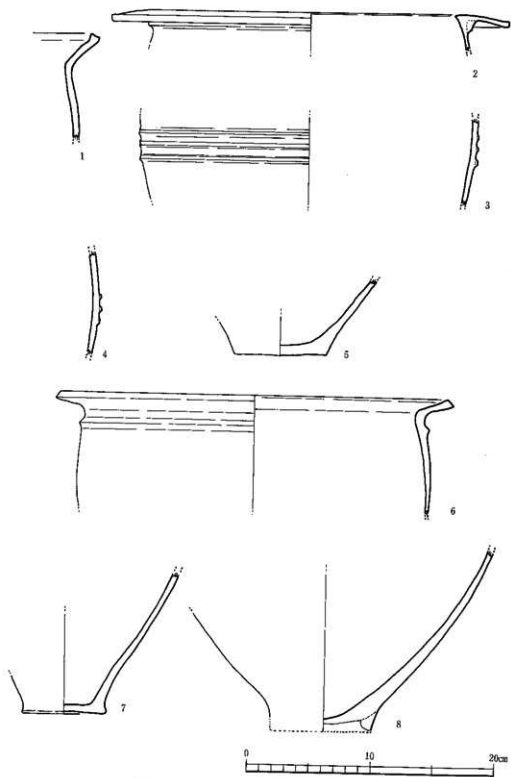


(3) 小 結

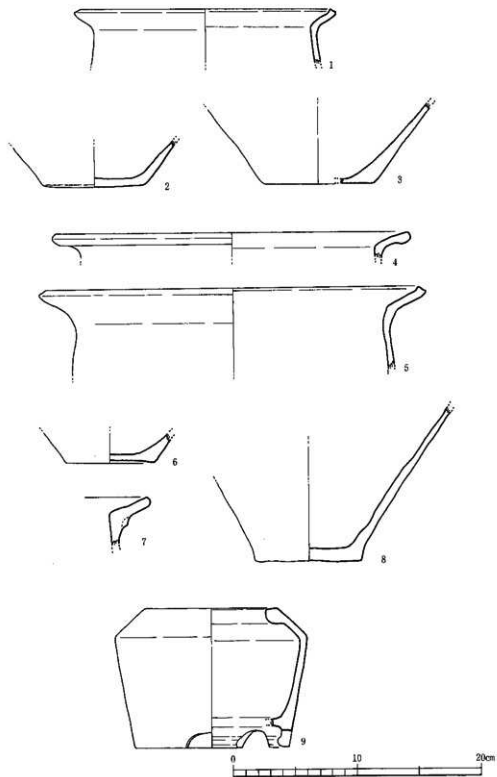
向野遺跡踏極地区は、調査区の両端で土坑群が検出された。これらの土坑群は出土遺物から考えると、弥生時代中期後半の時期にあたる。土坑の形態はすでに報告しているように方形・円形・楕円形等が見られるが、規模の格差が大きく墓坑と考えるには疑問が残る。またこの時期の墓坑は宇佐平野の野口遺跡や榎尻道遺跡、同じ向野遺跡跡兵後畑地区で明らかにされている。それによると、伸展葬で埋葬されていたようで墓坑は細長い形をとっている。また、これらの墓坑群には祭祀土器を埋めた不定形をした土坑が伴う。こうした、弥生時代中期後半の



第113図 向野遺跡踏極地区 (B区) 遺構配置図



第114图 向野遺跡輪極地区出土土器実測图(1)



第115图 向野遺跡輪極地区出土土器実測图(2)

基地の様相から考えると、繪極地区の土壌と出土遺物は様相を異にしており、基地としての可能性は少ないと考える。また、出土遺物を見ると、甕形土器のみの可能性が強く、しかも低湿地であるため、この地域で日常的な生活が営まれていた可能性も少なくないと考える。

そこで考えられることは、低湿地で日常的な生活の場としての不適地であること、出土土器が甕形土器のみであることなどから、何らかの作業場と推測する。

5 川楽地区の調査

(1) 調査の概要

向野遺跡の中でも一番東に位置する川楽地区は、東を用水路で切られ、西は低地になる南北に延びる微高地に立地する。調査は平成元年(1989)に試掘調査に引き続き本調査も実施した。調査区は国道10号線の北側拡張部で、東西90m南北25mの約2000㎡である。遺構は調査区の東半分から集中的に検出された。その内容は、掘立柱による各種の建物遺構10棟、溝遺構6条、土坑12ヵ所とピット群である。建物遺構は倉庫と考えられる2間×2間の総柱4棟、2間×3間の建物3棟、2間×4間の建物2棟、2間×不明が1棟である。土坑は、12基が確認されたが、遺物を伴う明確なものは3基で、形態や規模に統一性は認められない。溝遺構は1号溝と2号溝が平行するものの、他の溝には規則性は見いだせない。

なお調査区の西半分は、南西隅でピット群を検出した他は東部から続く溝が検出されたのみで、建物遺構や土坑は検出されなかった。

(2) 調査の成果

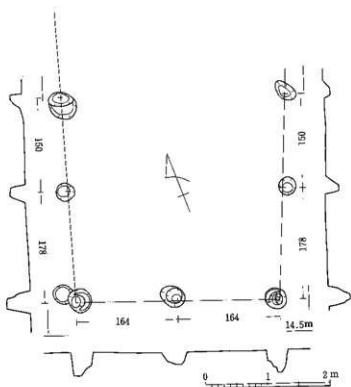
1) 遺構と遺物

向野遺跡川楽地区の明確な遺構は先に述べたとおりであるが、遺構はこれらの遺構の内、土坑や溝遺構などから出土した。出土した遺構の量は多くないが、遺構は時期を決定するに足る資料であった。

① 建物遺構

1号建物 1号建物は調査区の東北隅で検出された。このため、東西2間であることは判ったが、建物の北の部分が調査区外に広がり、南北の正確な規模を知ることはできなかった。柱穴の深さは隅柱が40cmであるが、間の柱穴の深さは20cm前後である。

2号建物 2号建物は調査区の東端で検出された東西2間、南北3間の建物で、23.1㎡の規模である。しかし、東北隅の柱穴は溝で削られ検出できなかった。建物の柱の配列は北と西の隅が鋭角になる平行四辺形状であり、南の柱列の中央はやや内側に入る。検出した柱穴の深さは、四隅の柱が40cm前後であるのに対し、他の柱穴の深さは浅いものが目立つ。また、西側の柱列は比較的柱根が残っており、柱間の間隔を知ることができた。それによると、両側の柱穴間は約170cmであるが、中間はやや広く190cm前後である。

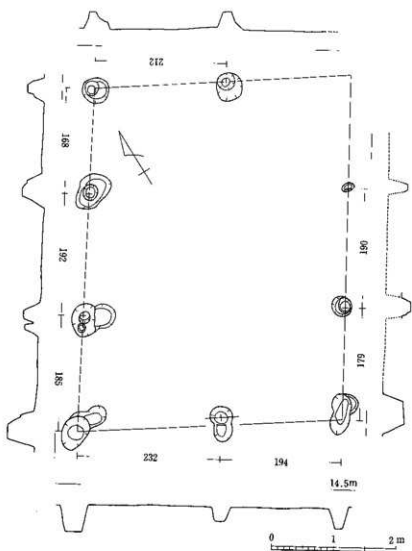


第116図 向野遺跡川菜地区1号建物実測図

3号建物 3号建物は、川菜地区の調査区で検出した建物遺構で最大の規模を持つ。柱の配置は、ほぼ長方形であるが、東隅の柱だけは柱列からずれ、内側に位置する。建物の規模は東西2間の4.5m、南北4間の7mの建物で約31.5㎡の大きさがある。柱穴の深さは約20cmから約30cmで、四隅の柱がやや深く、間の柱穴が浅い傾向がみられる。柱穴の間隔は南北方向の両端が約1.7mで、間の2間は約1.5mと狭くなっている。なお、この建物遺構は8号建物と重複するが、前後の関係は土層観察では確認できなかった。

4号建物 4号建物は、5号建物と大部分が重複し、柱穴の深さは5号建物に比較すると浅い。柱穴の配置はやや平行四辺形になり、東西2間で約3mで南北3間の約4.5mの約13.5㎡の規模である。柱穴は南列が3ヵ所あるが、北列は中央の1ヵ所が欠けている。また、東列と西列はそれぞれ4ヵ所検出されたが、その間隔は両端が1.4m前後で狭く、中央が約1.8mと広くなっている。

5号建物 5号建物は4号建物と重複する。柱穴の配置は東西2間の約3.7m、南北4間の約6.3mで約23.3㎡の規模である。形態は3号建物に類似する。柱穴は西列の5ヵ所がほぼ一列に並ぶが、東列は一部がややずれる。柱穴の深さは30cm前後であるが、四隅の柱穴はやや深い。



第117図 向野遺跡川東地区2号建物実測図

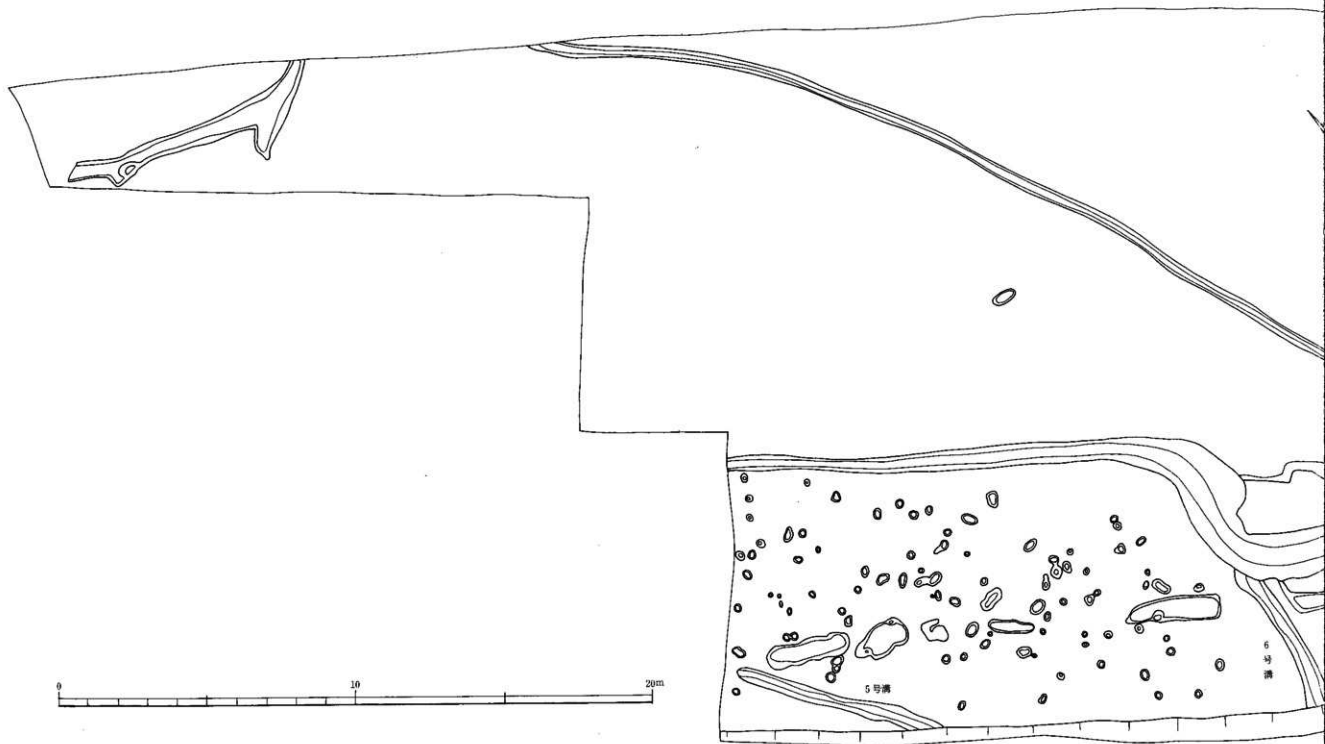
5号建物の柱穴からは第123図1～3に図示した土器が出土しており、時期の特定が可能となった。1は須恵器の坏蓋で、口縁部が屈曲する。天井部外面は回転ヘラ切りで、ほかは横撫で仕上げである。暗灰色で胎土に白色粒を含む。2は、燈褐色の土師器の坏である。底部は回転ヘラ切りで、他は撫で仕上げである。3は高台付きの坏の底部と思われる。全体に摩滅しており、器面は撫で仕上げである。淡黄褐色で角閃石・斜長石を含む。

以上の遺物は8世紀後半から末と考えられるもので、建物もこの時期に近いと思われる。

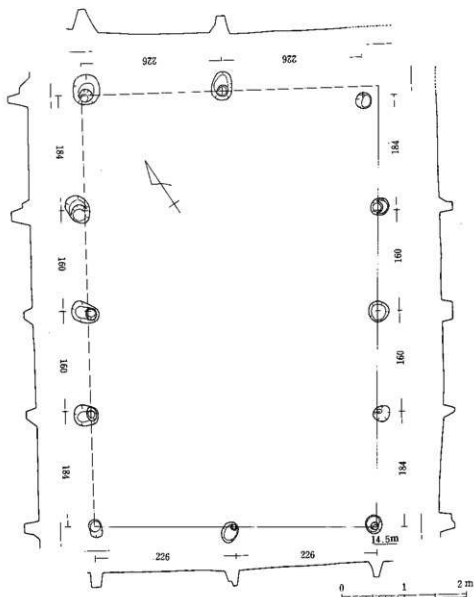
6号建物 6号建物は東西2間、南北2間の総柱の建物である。規模は東西約2.8m、南北約3.3mの9.24㎡であるが、南東隅の柱の配置はやや乱れる。柱穴の深さは10cmから30cmで、







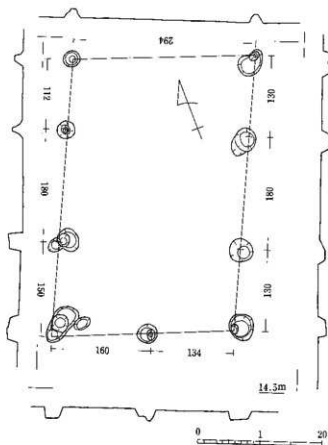
第118図 向野遺跡川家地区遺構配置図



第119図 向野遺跡川床地区3号建物実測図

他の建物に比較すると不揃いである。第123図4は土器は柱穴から出土したもので、高台付きの盤状土器と考えられる。焼成のあまい須恵器で、器面は摩滅している。また器面の一部には赤色顔料が残されている。

7号建物 7号建物の東北部は6号建物の西南部と重複する。東西2間、南北2間の総柱の建物で、6号建物と同様倉庫と考える。規模は東西約3m、南北約3.3mで約9.9㎡である。棟

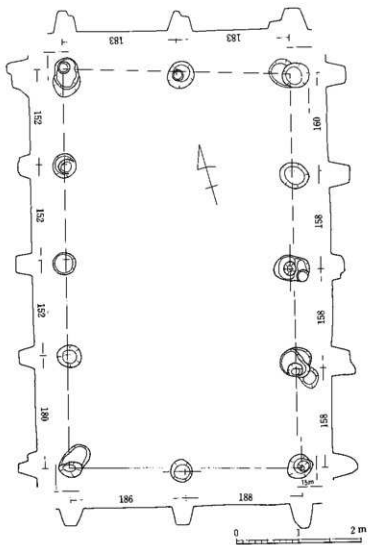


第120図 向野遺跡川菜地区4号建物実測図

出面からの柱穴の深さは20～30cmで、一部には柱の跡の関係するようなくぼみがあり、二段弱状で検出された。

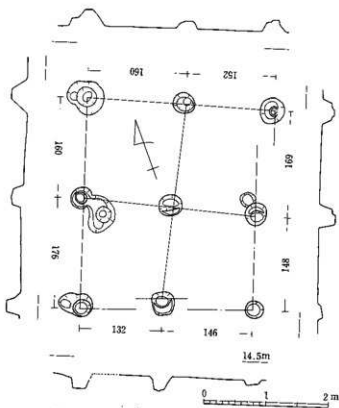
8号建物 8号建物の東南隅の柱は3号建物と重複する。柱穴の配置は東西2間、南北2間の総柱で、規模は南北2.9m、東西3.3mの9.75㎡である。検出された柱穴の状況は北列の一部が溝で削られ、南列の中央柱は東北方向に少しずれている。柱穴の深さは、検出面から20cm～30cmである。

9号建物 9号建物は川菜地区で調査された建物群の中で一番西で検出された建物遺構である。柱の配置と規模は東西2間で約3.6m、南北3間で約5.5mの約19.8㎡である。柱穴は東列以外は直線的に並ぶが、東列は不揃いである。また、この遺構の中央を東西に新しい溝が掘り込まれているため、一部の柱穴は削られている。柱穴の深さは検出面から20cmから40cmである。

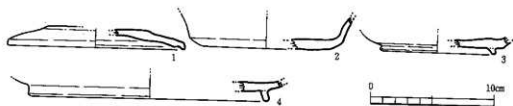


第121図 向野遺跡川東地区5号建物実測図

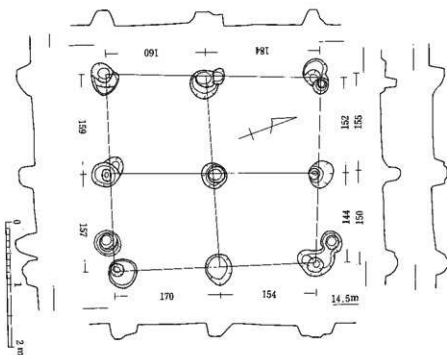
10号建物 10号建物は中央に新しい溝が東西方向や南北方向に彫り込まれているため、すべての柱穴を確認することはできなかった。検出できた柱穴による配置は、東西2間、南北2間の総柱で、規模は東西約3.2m、南北約3.3mの10.56㎡である。柱穴の配置はやや不揃いではあるが、深さは20cm～30cmである。



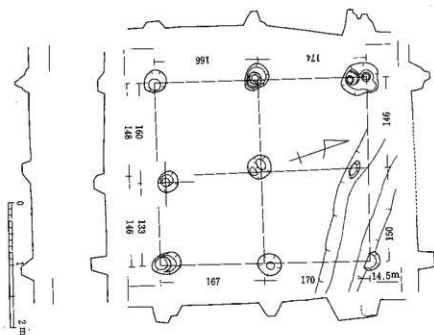
第122图 向野遺跡川乘地区6号建物実測図



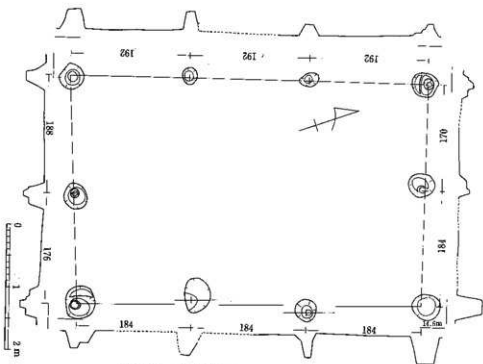
第123图 向野遺跡川乘地区建物遺構出土土器実測図



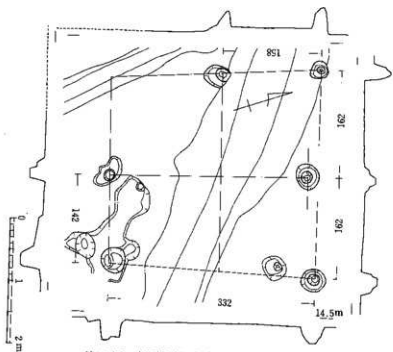
第124图 向野遺跡川奈地区7号建物実測図



第125图 向野遺跡川奈地区8号建物実測図



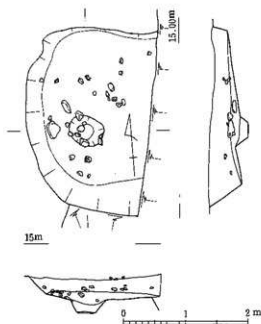
第126図 向野遺跡川来地区9号建物実測図



第127図 向野遺跡川来地区10号建物実測図

② 土坑

1号土坑 1号土坑は調査区の東壁の部分で検出された。遺構の平面形は小判型になると考えられるが、東半分を新しい溝で削られている。床面は、ほぼ平坦で検出面からの深さは約30cmで、床面には直径50cm、深さ約20cmのピットが検出された。第129図に図示した遺物は全て埋土に含まれた破片である。1は土師器の椀形土器である。器面は摩滅のため調整方法が判らない。2は1と同じ器形の底部である。内外面とも撫で仕上げである。3は内黒土器の底部の資料である。これらの遺物の内、3の資料から9世紀中頃と考えられる。



第128図 向野遺跡川東地区1号土坑実測図

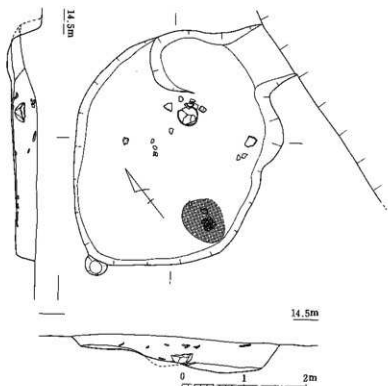


第129図 向野遺跡川東地区1号土坑出土土器実測図

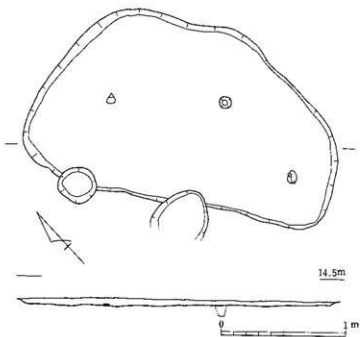
2号土坑 2号土坑は調査区の東部中央で検出された。形態や規模は1号土坑と類似する。規模は3.7m×3.2mの楕円形を呈し、床面は西半分が浅く20cmで、東半分は50cmと深くなっている。遺構内を掘り下げ中は第130図のように焼土や床面から土器が出土した。土器は変形土器の底部である。底部は丸底で、器面は剥落して器面調整は観察できない。しかし、器形から考えると9世紀前半に属するものと思われる。

3号土坑 3号土坑は2号土坑の北側で検出された遺構で、長軸約5.0m、短軸約3.0mの不定形の竪穴遺構である。床面は、平坦で検出面からの深さは約10cmと浅い。床面には直径20cm、深さ20cmのピットが検出された。遺構は須恵器の破片や土師器の破片が出土したが、時期を決定できるような良好な資料は出土しなかった。しかし、周辺の遺構や出土土器の状況から考えると、8世紀後半から9世紀前半の時期に掘り込まれた遺構と考えられる。

4号土坑 4号土坑は調査区の東部で集中的に検出され遺構群の中でも西端に位置し、9号建物の北側に広がる。土坑の規模は長軸9.7m、短軸7.1mで床面には起伏が見られる。検出面



第130図 向野遺跡川楽地区2号土坑実測図



第131図 向野遺跡川楽地区3号土坑実測図

から床面までの深さは10cm～30cmで中央に2号溝が掘り込まれている。この遺構からは多くの土器が出土しており、位置から考えると9号建物・10号建物のグループと関わる可能性が高い。

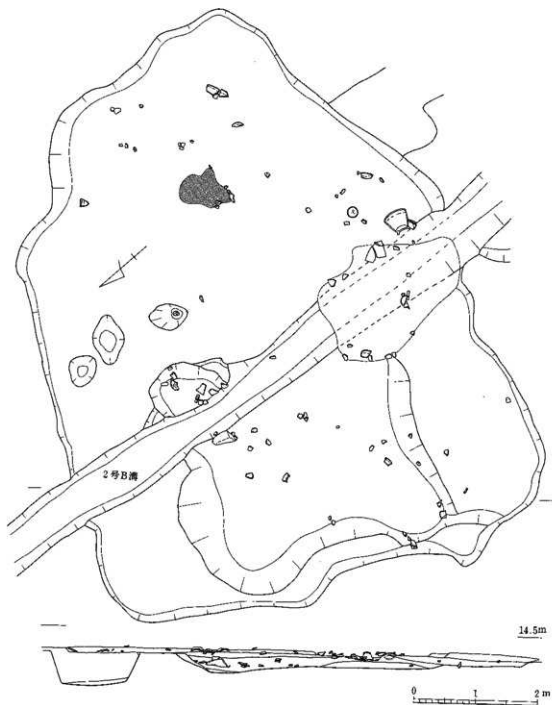
第133・134図に図示した遺物が4号土坑出土の資料である。1～17は須恵器である。この内1～9は蓋で7のように宝珠のつまみが付く形態である。この蓋の口縁部の形態は断面が三角形になり、1・5以外はくちばし状に屈曲する。天井部の形態は、1・3～5は丸みをおびるが、他は平坦に整えられている。器面の調整は、口縁部から内面にかけては横撫で仕上げであるが、天井部外面は篋削りで仕上げている。また7のつまみは、最後に付けられ撫でている。色調は灰色や白灰色で、胎土には砂粒や角閃石を含む。

10～17は坏身である。10・12は内外面横撫での口縁部の破片である。胎土に白色粒や角閃石を含み灰褐色を呈する。11は底部の高台部分を欠く資料である。内外面は横撫で仕上げで、胎土に角閃石や白色粒を含み、淡青色を呈する。13・14・16は完形に復元できる資料である。13の法量は口径13.1cm、器高8.7cmで、器面調整は内外面と高台は横撫でで、底部は篋削りのあと撫で仕上げである。胎土に白色粒・砂粒を含み、青灰色を含む。14は口縁部がやや反る。法量は口径13.6cm、器高4.1cmで、器面調整は口縁部が内外面とも横撫でで、底部は内面は回転撫で、外面は削りのあと不定方向の撫で仕上げである。青紫色で白色粒と角閃石を含む。16は口縁外部が高台部から直線的に外傾し、外端部がややくぼむ。法量は口径12.7cm、器高4.5cmで、器面調整は口縁部が内外面横撫で、底部内面は回転撫でのあと不定方向の撫で、外面は回転篋削りである。青紫色で胎土に角閃石・白色粒を含む。15・17は底部に破片である。器面調整の方法は先に述べた完形の3点と同じである。17は小片のため復元径は正確ではない。

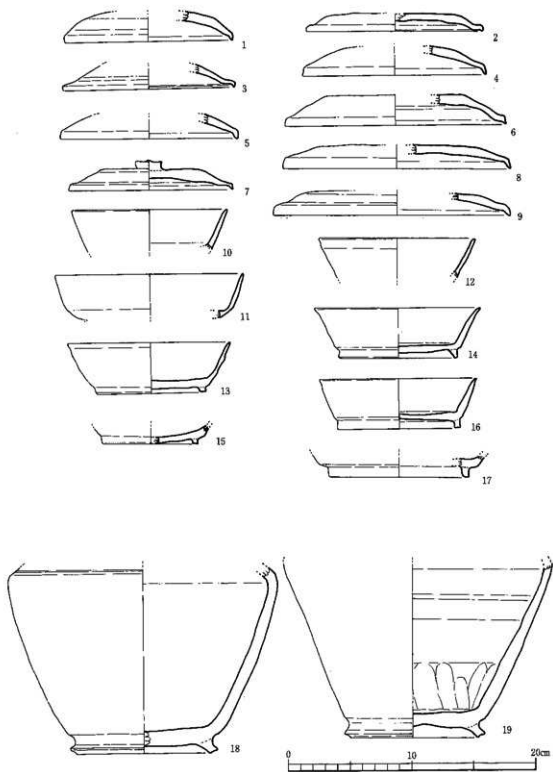
18・19は脚付き蓋で、両者とも高台は外に張り出すように付く。18の器面は内外面・底部撫で仕上げであるが内面の底部近くは縦方向の撫で調整である。19の器面調整も18と同じであるが、内面の下位から底部にかけては18より明確な形で撫で調整がされ、指頭痕が残る。胎土には角閃石・白色粒が含まれ、色調は18が青灰色、19は灰色である。

第134図は4号土坑出土の土師器の壺形土器である。これらの土器の口縁部はすべて横撫でで仕上げている。しかし、1・2は器面が摩滅している。また、4の頸部内面のは指押さえの指頭痕が見られる。色調は明褐色や茶褐色で胎土に角閃石・斜長石・白色粒を含む。

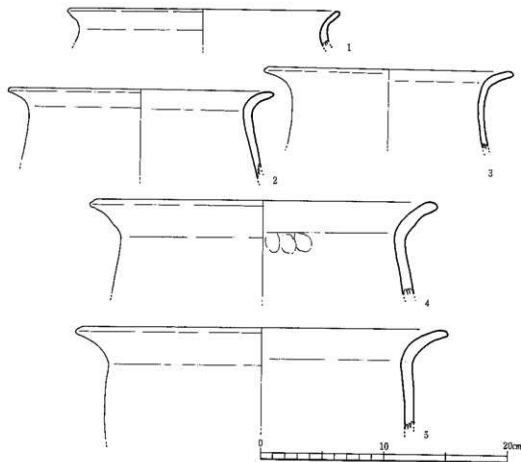
以上の出土土器のうち、第133図の蓋や身には若干の時期差が認められるが8世紀中頃～後半代と考えられる。



第132図 向野遺跡川来地区4号土坑実測図



第133图 向野遺跡川来地区4号土坑出土土器实测图(1)



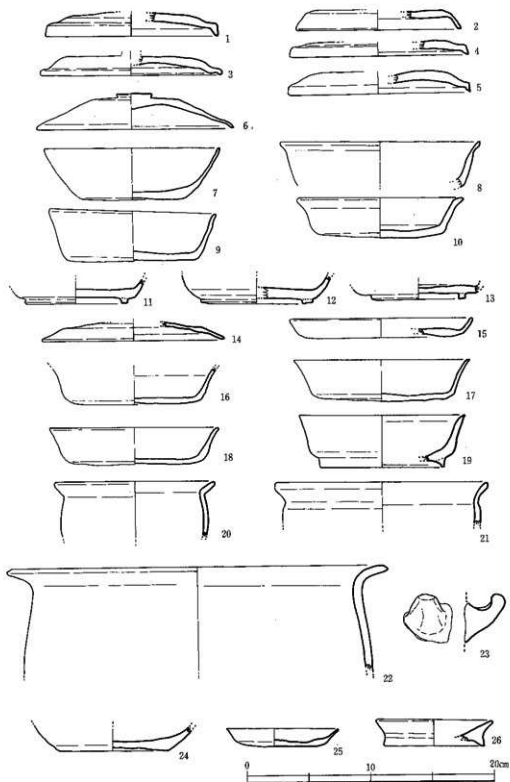
第134図 向野遺跡川楽地区4号土坑出土土器実測図(2)

④ 溝遺構

1号溝 調査区をほぼ南北に切断する方向に掘り込まれた溝が検出された。幅は80cm前後、深さは検出面から約30cmである。この溝は検出中央部で西方に幅約40cmになり枝分かれしている。溝の傾斜は南から北にわずかに低くなる。遺物は南北方向の溝から多く出土している。第135図に図示した資料がそれである。1～13の6以外は須恵器の坏で、1～6はその蓋である。

1・3～5は口縁端部が断面三角形になりくちばし状に屈曲する。2は皿の可能性が強い。6はつまみの付く土師器の蓋で、全面撫で仕上げである。7～10は高台のない碗の身で、口縁部内外面と内底部は撫で仕上げで、底部は回転篋削りである。色調は灰色・白灰色で胎土に角閃石・斜長石・白色粒を含む。11～13は高台の付く碗の底部である。内面と高台部は撫で仕上げで、底部外面は回転篋削りである。

14～26は土師器である。14・16～19は碗で、14は蓋である。16～19は碗の身で、口縁部内外



第135图 向野遺跡川楽地区1号溝出土土器実測図

面ともに横撫でで、底部は篋削りである。また、器形も16・17・18には高台がなく、19は高台が付く。20・21は小型、22は大型の変形土器である。器面調整は横方向の撫でで、胎土には角閃石・斜長石を含み、色調は茶褐色・明茶褐色を呈する。23は櫃の把手である。器面は撫で仕上げで、明茶褐色を呈する。24は皿か碗の底部で器面は撫で仕上げである。15・25・26は皿で、器面は回転撫で仕上げである。26は中世の土師皿と思われ、混入の可能性が高い。これらの遺物の胎土には角閃石・斜長石を含み、色調は茶褐色・明褐色を呈する。

2号溝 2号溝B・Eは1号溝にほぼ平行し、南北方向に掘られている。また、2号溝C・Dは前者と切り合って掘り込まれている。しかし、両者の関係は不明である。さらに、9号建物と10号建物との関係は溝の方が古い。溝の規模は2号溝Cが幅40cm前後、深さ約20cmで、他は幅60cm前後、深さ約30cmである。これらの溝からは時期を決定できる遺物の出土はない。しかし、建物遺構との関係から8世紀後半以前である。

3号溝 3号溝の規模は幅30cm前後、深さ約20cmである。出土遺物はなく時期は不明である。

4号溝・5号溝・6号溝 4・5・6号溝はごく一部の調査であり、全容は不明である。遺物の出土はなく時期を決定することはできない。

(3) 小 結

向野遺跡川楽地区の建物遺構は10棟を調査した。これらの遺構は、出土土器や重複関係から、8世紀後半から9世紀前半にかけて存続したと考えられる。建物遺構は方位を基準にすれば、2号建物・3号建物、4号建物・6号建物、1号建物・5号建物・7号建物・8号建物・9号建物・10号建物の3群に分けられる。

また、建物の形態は、2間×2間の総柱で倉庫と考えられる6号建物・7号建物・8号建物・10号建物の4棟があり、2間×3間の建物としては2号建物・4号建物・9号建物の3棟がある。さらに、2間×4間の建物としては、3号建物と5号建物がある。こうした建物群は、調査区の制限から全ての建物遺構を検出したわけではないが、時期ごとに組み合わされて、存在していた可能性が高い。

つまり、4号建物と倉庫である6号建物、9号建物と倉庫である10号建物、大型の5号建物と倉庫である7号建物と8号建物と言うように、住居用の建物と単数あるいは複数の倉庫が関連しながら、1号溝に囲まれた中に、立ち並ぶ集落景観が推測される。

夜鳴池窯跡の磁気探査

奈良国立文化財研究所

西 村 康

はじめに 考古学における磁気探査には二種類ある。地磁力を測る方法と、垂直成分の差すなわち磁気傾斜を測るものである。1960年頃に前者が開発され、わが国でも60年代後半より導入されて普及してきた。後者は1980年代になってからに開発されたもので、日本でも最近導入され急速に応用されてきている。

これらの内全磁力測定では、普通、プロトン型の磁力計2台を使用する。ノイズに影響されないための工夫で、2台を同時に作動させて各々が観測した値の差をとる方式である。これを2台連動法と呼ぶ。

プロトン型ではセンサーを固定するために、棒を地面に突き刺すという作業が必須で測定に時間がかかるが、深い層位の遺構も特定できるというのが特徴である。一方、垂直成分の差を求める装置ではフラックスゲート型が主体で、有効探査深度は浅い。例えば、通常の須恵器窯跡であれば、プロトン型では地下3m程度までは推定できるに対して、フラックスゲート型では1.5mよりも浅いものに限られるという違いがある。

測定の方法 本遺跡における探査の目的は窯跡を探ることにあつたので、プロトン磁力計による2台連動法を採用したのは、限られた時間内でより広い範囲を測定したいと考えたこと、須恵器窯跡のように大きな対象物の場合には、この程度の間隔でも存在位置を推定するには十分と見なしたからである。

測定に使用した装置は、アメリカ・ジオメトリクス社製のG-816型とG--826型の2台である。2台はケーブルで連結して同時に作動するようにした。測定データは定点、移動点ともに手書きによつた。

測定の結果 測定結果はコンター図として整理した(第*図)。図の外界線上の一目盛りは2mである。コンターは移動点の観測値から定点の観測値を引いた値を用いて、その差が±50ガンマを超えるものは25ガンマ単位で、それ以下の部分では10ガンマ単位で区分した。また、視覚的に値の大小理解を容易にするため、±50、75、100、125と0は太線で描き、マイナス値は点線で表している。

結果を見てまず気がつくのは、本測定区では小範囲での磁気変化が多く、通常窯跡が示すような完結した磁気異常の形態は見られないことである。その中では、測定区の西端に近い部分にある異常は(A)、窯跡の可能性のある地点としてあげることができる。ここには東西方向約5m程度の長さで、南北にプラスとマイナスが一对になった、すなわち双極子磁場を示す磁気

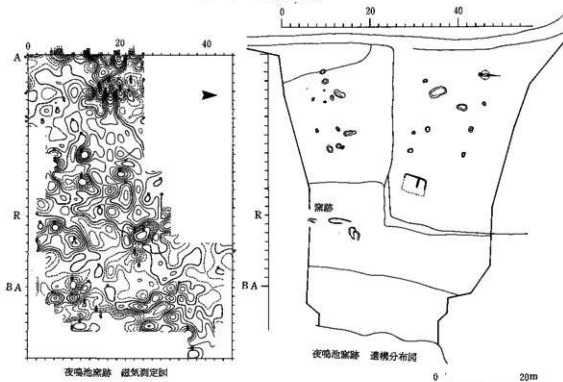
異常がある。異常も周囲と比較すると約100ガンマ近くあり、浅い層位に窯体がある場合に示す程度の中にある。

この以外では、測定区の西端と中央部南寄りにある異常 (b, c) が注意される。しかし、西端にある異常 (b) は、その範囲が測定区外へ広がっていて不明瞭ながら、道路に沿うようにあることや、周辺に類似した異常が分布することから、鉄製品を含む塵芥が原因となった異常である可能性が大きいと考えた。

中央部南寄りにある地点 (c) では、測定中に現代の焚火の痕跡を確認しており、遺構に起因する異常ではないと判明している。これ以外にも、ここには焚火跡が多数あり、測定区のほぼ東半部に集中している。それらの地点はいちいち指摘しなかつたが、本測定区にみる小規模な磁気異常は、時間を隔てて多数の焚火がなされた結果かも知れない。

なお、測定中に観察したところによれば、この東辺部には岩盤が露出していた。また、その範囲の西側には試掘トレンチがあり、耕土らしきものの盛り上げられた場所もあった。測定結果の判定には、この様な条件を考慮したことはいうまでもない。

おわりに ここにおける磁気探査の結果は以上のようなものである。窯体を示すと思われる典型的な磁気異常の形態は、測定範囲中にはない。その中では、西端部に近い箇所 (A) が唯一窯跡の可能性ある地点である。他の地点は焚火などが原因となった可能性が大きい、何らかの手段で遺構の有無を確認しておいた方がよいと思われた。



第136図 夜鳴池窯跡磁気測定図、遺構分布図

写 真 图 版

凡例 遺物に付した番号は挿図の遺物番号と対応する

建物1全景
(東方向から)



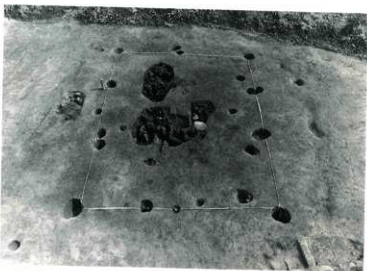
建物1柱穴1
(東方向から)



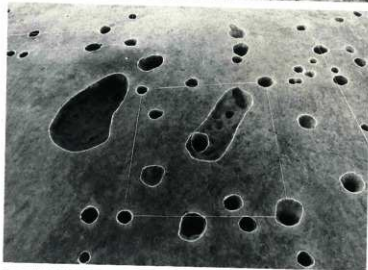
建物1柱穴7
(西方向から)



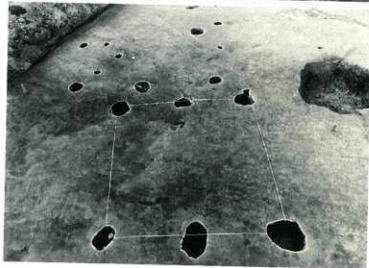
建物2
(北方向から)



建物3
(南方向から)



建物4
(東方向から)





2



8



3



9



4



10



5



11



6



12



7



13



14



20



15



21



16



22



17



23



18



24

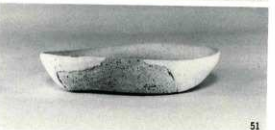
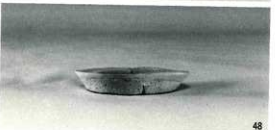


19



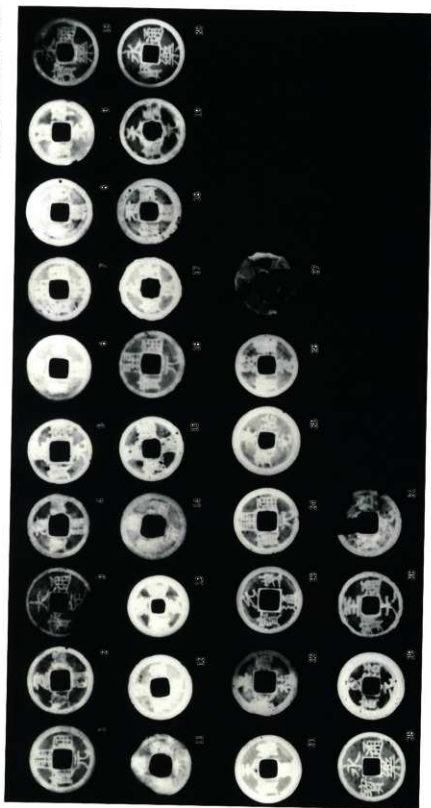
25







図版八 安平北遺跡出土銅銭



居屋敷地区
(東方向から)



城山遺跡
(西方向から)



木部地区
(西方向から)



大根川遺跡
A地区全景
(北方向から)



B地区西半部全景
(東方向から)



B地区東半部全景
(東方向から)



大根川遺跡
D-II区全景
(北方向から)



向野遺跡兵庫畑地区
西部全景
(東方向から)



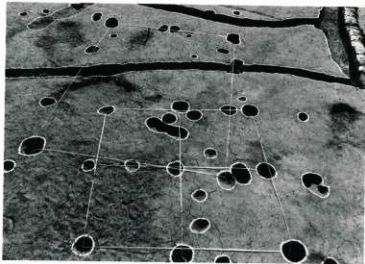
向野遺跡兵庫畑地区
中央付近
(北方向から)



向野遺跡兵庫畑地区
東部全景
(東方向から)



向野遺跡兵庫畑地区
5号・6号建物
(北方向から)



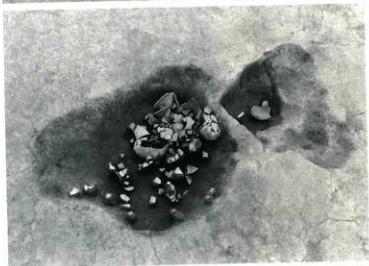
向野遺跡兵庫畑地区
2号土坑墓
(南西方向から)



向野遺跡兵庫畑地区
2号土坑墓
磨製石剣出土状態
(南西方向から)



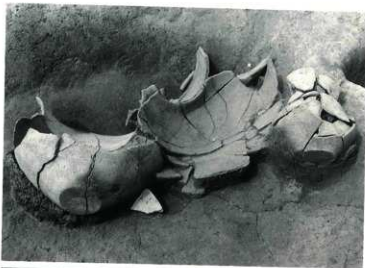
向野遺跡兵庫畑地区
1号祭祀土坑
(北方向から)



向野遺跡兵庫畑地区
1号祭祀土坑
上層遺物出土状態
(北方向から)



向野遺跡兵庫畑地区
1号弥生祭祀土坑
下層遺物出土状態
(北方向から)



向野遺跡市場地区
西端部付近
(南西方向から)



向野遺跡市場地区
西部
(南方向から)



向野遺跡市場地区
1号弥生土坑
(南方向から)



向野遺跡市場地区
1号・2号・3号建物
(東方向から)



向野遺跡市場地区
2号井戸
(南方向から)



向野遺跡ヲソヲ地区
発掘状況
(東方向から)



向野遺跡ヲソヲ地区
201号～210号土坑
(西方向から)



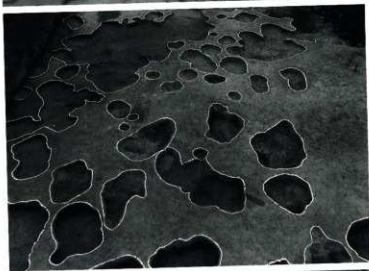
向野遺跡ヲソヲ地区
1号土坑
(西方向から)



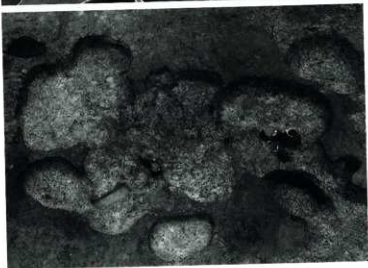
向野遺跡繪極地区
全景
(西方向から)



向野遺跡繪極地区
中央付近
(東方向から)



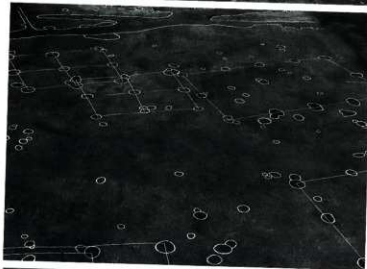
向野遺跡繪極地区
A区中央
(東方向から)



向野遺跡川楽地区
全景
(東方向から)



向野遺跡川楽地区
東部建物群
(東方向から)



向野遺跡川楽地区
西部建物群中央付近
(西方向から)



報告書抄録

ふりがな	いっばんこくどうじゅうごうせんなかつばいばすまいぞうぶんかざいはつちつちょうさほうこくしょ								
書名	一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(5)								
副書名									
巻次									
シリーズ名	一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号	(5)								
編著者名	坂本嘉弘・小林昭彦								
編集機関	大分県教育委員会								
所在地	〒870 大分県大分市府内町三丁目十番一号 Tel. 0975-36-1111								
発行年月日	西暦 1992年3月31日								
ふりがな 所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
安 平	大分県中津市 大字 藤田	442038	101079	33度32分 52秒	131度 14分20秒	890808～ 861130	6400	中津バイパス建設	
居 屋 敷	大分県中津市 大字 伊藤田	442038		33度32分 44秒	131度 20分	860722～ 860801	4200	中津バイパス建設	
城 山	大分県中津市	442038	101085	33度32分 55秒	131度 15分15秒	860525～ 860716	4000	中津バイパス建設	
木 部	大分県宇佐市 大字 南敷田	442119		33度33分	131度 16分50秒	861101～ 861216	7200	中津バイパス建設	
大 根 川	大分県宇佐市 大字 南敷田	442119	107081	33度32分 30秒	131度 17分12秒	890524～ 901226	7650	中津バイパス建設	
向 野	大分県宇佐市 大字 南敷田	442119	107082	33度32分 30秒	131度 17分12秒	890524～ 901226	7650	中津バイパス建設	
所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項				
安 平	製鉄址・集落	中 世	鍛冶炉・掘立柱建物	土 師 器 他	鍛 冶 工 房				
居 屋 敷	散布地	古 墳 他		須 恵 器 他					
城 山	散布地	古 墳 他	土 坑	須 恵 器 他					
木 部	散布地	古 墳 他		須 恵 器 他					
大 根 川	集 落	奈良～中世	掘 立 柱 建 物	土 師 器 他	道 路 状 遺 構				
向 野	墓地・集落	弥生～平安	土坑墓・掘立柱建物	弥生土器・土師器他					

一般国道10号線

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

安平遺跡 居屋敷地区 城山遺跡
木部地区 大根川遺跡 向野地区

平成5年3月31日発行

編集 大分県教育庁文化課

発行 大分県教育委員会
〒870 大分市府内町3丁目10番1号
TEL. 0975(36)1111

印刷 佐伯印刷株式会社
